

双葉社MOOK
グレートメカニクススペシャル

MOBILE
SUITS

MS図鑑

RGM-79 GM

ジム



GM CUSTOM



GM III



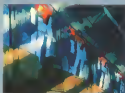
総数100体以上が登場!

モビルスーツ

MSの博物誌

「ジム文化」を知る





MS図鑑

RGM-79

GM



RGM-79 ジム
 RGC-80 ジム・キャノン
 RGM-79SC ジム・スナイパーカスタム
 TGM-79 ジム・トレーナー
 RGM-79L ジム・ライトアーマー
 RGM-79F デザートジム
 RGM-79F 陸戦用ジム
 RGM-79FP ジム・ストライカー
 RAG-79 アウア・ジム

RGM-79R/RMS-179 ジムⅡ
 MSA-003 ネオ
 RGM-86R ジムⅢ
 RGM-79D ジム・凍結仕様
 RGM-79G ジム・コマンド(コロニー仕様)
 RGM-79GS ジム・コマンド(宇宙用)
 RGM-79SP ジム・スナイパーⅡ
 RGM-79 パワード・ジム
 RGM-79N ジム・カスタム

RGM-79C ジム改
 RGM-79Q ジム・クウエル
 RGC-83 ジム・キャノンⅡ
 RGM-79[E] 初期型ジム
 RGM-79[G] 陸戦型ジム
 MSA-004K ネオ連
 造

©編纂：サンライズ

定価：本体1800円＋税

雑誌 63982-84 Printed in Japan ©Futsabasha 2018

ISBN978-4-575-46507-5
 C9476 ¥1800E



9784575465075



1929476018007

MS図鑑

RGM-79 GM

ジム



[GM CUSTOM]



[GM III]



HEAD

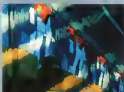
BEAM SABER

THE ARMOR

E.F.S.F.

COCKPIT

LEG



MS図鑑

RGM-79

GM



9784575465075



1929476018007

ISBN978-4-575-46507-5
C9476 ¥1800E

グレートメカニクス・スペシャル

MS図鑑

RGM-79 GM



双葉社



MS
GM

グループ・カンパニースペシャル

MSS



鑑

RCM-79GM

ミーム

双葉社

双葉社



Illustration by: NADCHIKA MORISHITA

Contents

- 004 はじめに
- 006 ジムとはどんなMSなのか？
- 008 **RGMの系譜**
- 010 試作機と量産機のちがい (ガンダム&ジム編)
- 012 華麗なるジムの活劇 Part 1
- 014 年表で見るRGM活躍年代記 宇宙世紀編
- 016 年表で見るRGM活躍年代記 現実世界編
- 018 ジムの分類 (1) / (2) / (3)
- 032 **カラー設定&イラストラインナップ Part 1**

機体解説

- 042 RGM-79ジム / RB-79ボール / TGM-79ジム・トレーナー / RGM-79SCジム・スナイパーカスタム / RGM-79Lジム・ライトアーマー / RGM-79F陸戦用ジム / RGM-79FPジム・ストライカー / RGM-79Fデザート・ジム / RGC-80ジム・キャノン / RAG-79アクア・ジム / RAG-79-G1水中型ガンダム / RGM-79Gジム・コマンド (コロニー輸送機) / RGM-79GSジム・コマンド (宇宙戦仕様) / RGM-79Dジム凍地仕様 / RGM-79SPジム・スナイパーⅡ / RGM-79(E)初演習ジム / RB-79Kボール (K型) / RGM-79(G)陸戦型ジム / RX-79BD-1ブルーディスティニー-1号機 / RX-79BD-2ブルーディスティニー-2号機 / RX-79BD-3ブルーディスティニー-3号機
- 044 戦線におけるジムの役割
- 046 量産機と実験機のちがい (ジム改&ガンダム試作1号機編)

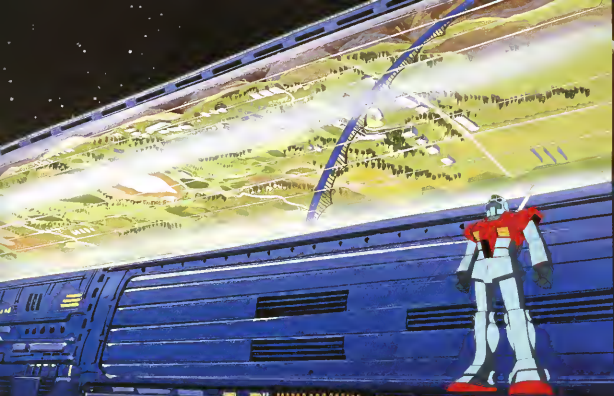
- 044 専用機とカスタム機のちがい (ガンダムNT-1アレックス&ジム・カスタム編)
- 046 量産機と可変機のちがい (ジムⅡ&Zガンダム編)
- 070 試作機と量産機のちがい (ガンダムMk.Ⅱ&ジムⅡ編)
- 074 華麗なるジムの活劇 Part 2
- 078 **カラー設定&イラストラインナップ Part 2**

機体解説

- 086 RGM-79Cジム改 / RGM-79Nジム・カスタム / RB-79Cボール(改修型) / RGM-79パワード・ジム / RGC-83ジム・キャノンⅡ / RGM-79Qジム・クウェル / RMS-179 (RGM-79R) ジムⅡ / MSA-003ネモ / MSA-004 KネモⅡ / MSZ-007豪華型Zガンダム / MSZ-013豪華型ZZガンダム / RGM-84RジムⅡ
- 089 「コラム」グリプス戦後のMSの型式番号
- 094 ジムっぽいヤツら
- 100 ガンダムシリーズに見るRGM-79ジムとその系統機の武装
- 104 ジムはなぜ長期にわたり主力機として運用されたのか？

GM Interview

- 112 小堀博弘
- 117 仲達文
- 122 玄馬宣彦



Introduction

はじめに

RGM-79、すなわちジム（GM）。この名はベースとなった試作機（実験機）であるRX-78ガンダムの生産型であるから「ガンダム・マスプロダクションモデル」の略称として名付けられたものといわれる。映像に初めて登場したのは「機動戦士ガンダム」第29話「ジャブローに敵る」で一瞬でシャア・アズナブルのズゴックに腹部を貫かれてしまう。また、続く第32話「小さな防衛線」では、ほかにもキツカ・キタモトに「でも何だかガンダムじゃな」と言われるように、この機体はガンダムに比べかなり違う外見を持っていた。

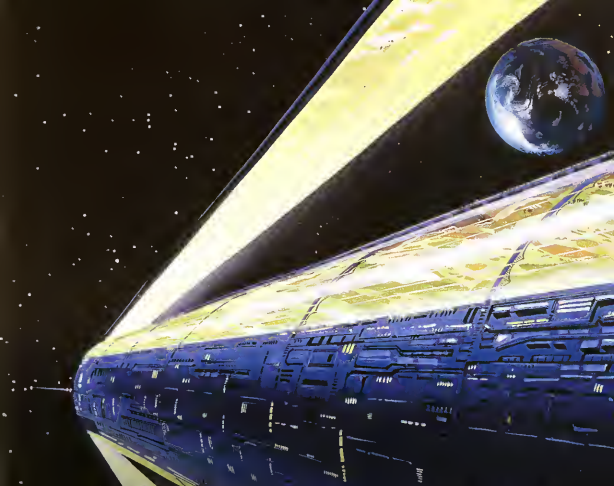
頭部は2本のツノ（ブレイドアンテナ）もなく、胴（ツインアーム）もガンキャノンのようなゴグル型。なんと多くのつべりとしてガンダムよりもいなん節そうだった。それもそのはずで、このジムはある種の「サラレ控」として登場したものだ。ただ、劇中では地球連邦軍の大攻勢を象徴する存在として大量に登場しなければならなかった。もちろん主役のガンダムより強いということはない。むしろ弱そうに見える必要はなかった。そういう大衆向けには、アニメーション作品に登場させるには、まず退屈を誘わずに、観る者には「身」が動きやすいように、線は少なく、形状地味で容れなければならない。また、塗る色数も減らすことが効率化に繋がる。ジムとは、つまり画面上に賑やかさを与える存在として登場したに過ぎなかったのだ。

しかし、それだけでは終わらないのが当時の「ガンダムブーム」の面白いところ。ジムは単に大量に登場し、シャア公国軍のモビルスーツと戦闘を繰り広げる。多くは「いかにも急造品」しるわんばかりに、次々

にやられていく。もちろんシャア公国軍のモビルスーツを撃破するシーンも少なからずあった。特に劇場版の「機動戦士ガンダムⅢ めぐりあい宇宙」では、リック・ドムを一刀両断で斬り倒すという大活躍シーンが描かれたのだ。これは当時、見ている者の想像力を大いに掻き立てた。

それは映像の後述いで、雑誌などで作られた文字登録も「ジムはガンダムとあまり性格の差はなく、ザクIIとよりもう上」というものが作られたことがあった。ちなみに当時は細い設定が作品前から発信される例はあまりなく、雑誌などの媒体で創作されたものが流布した結果、公式設定として採用されたということが多かった。これはつまり当時一部の先鋭的なファンたち（内部や関係媒体のスタッフを含む）が自然発生的に行なった「ガンダム世界なるべくリアルにせよう」という動きの一つの形だったといえるだろう。

一方、ジム（およびザク）が作り上げた文化としての「量産型」という言葉もある。現在、制作では一般的という「試作型（像れている）」、「量産型（量産品）」というイメージは「ガンダム」によって作られたと言っても過言ではないだろう。そもそも、本来、工業製品ならば、試作型は生産型（量産型）という言葉は意味を持つと考えられる。より、初期型と量産型とがある可能性があり、機体的には前者のともいえるそれは、試作機によって様々なトラブルが解決した機体が生産となるからだ。本来、ガンダムI型とII型の式であるならば、ガンダムよりジムは強いはずなのだ。これは、両機が同じ工業製品というより、品類「ガンダム」として生産



「製品(ゆめ)」という模式に近い。日本刀やレーシングガマシンのワークスとフライトペーターなどの差といえはわかりやすいかも知れない。つまり、ガングラムを「特別なもの」とするために、「生産型」ではなく、「量産型」という言葉が適切だったのだ。

こうで当時のフナ、の間に「スエシヤルナ」には乗れないだろ、とけれど、高麗産なジムならは乗るかも知れない、と一機の一、共感のよきなもやが醸成されていた部分は否めないだろう（もつともこれはジョアン公國軍のサタも同様。今ではスエシヤルナ公國には悪い人れを拘くという方が主流のようだが、少なくとも戦前世紀までは、ジムなら悪いを馳せるといったフナ層は少なくなかった。

「『MS』と『ビルス』と『バリエーション』とで、ガンダムに匹敵する性能を持つ」と設定されたム・スナイパー。カスタームが人気を得たのも出展というだろうか。また「カスターム」の続編「機動戦士ガンダム」(本作)の続編「機動戦士ガンダム」で、ジェムの近代化改修機であるジムⅡ。ジムⅡが登場したのも主人公が、これらのジム系機体の登場で、主人公や物語が変化して「作品の連続感」が担保されたともいえる。まOVA作品「機動戦士ガンダム」。

また、出淵裕氏のデザインにより、今年経ったジムのデザインのアップデート」が行われ、用途に際し数多いバリエーションが登場した。そして「機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY」では、ガンダムの機體として特別な「ジム・カスタム」が登場した。

その後「機動戦士ガンダム第08M.S.小队」

ンダム」が主役機であった。ジムの機體を応急的に取り付けたモデルも登場した。中でも99年に発売されたゲームソフト「機動戦士ガンダム 外伝 コロニーの落ちた地で」は、主人公は機動ガンダムに搭乗し、最終決戦での機體変更はガンダムではなくジム・インスパイバⅡに搭乗するという設定があり、ゲームⅡ中、常にジム系の機體に乗り継げるのだ。TVシリーズⅡで機動「イェイヤー」数が少ないというゲームという属性にしても、珍しい存在であった。
 つまり、ガンダムの世界は広がりと共に「ジム」も確立しながら広がったのだ。そして現在ではジム系の機體は約8割程度に上るという広がりを見ている。
 もちろん作品世界を「リアル」にシミュレーションすると、ガンダムはそう多く存在しないはず。その世界観がジムが支える「当量」といえる「地味にいい仕事をします」ジム系のモビルスーツが、コアなファンから支持を受ける、特に前記の「リアル化」時代としては、当然のこと。これもまた「イマジネーション」の世界が広がっていたといえるのだ。

本書は40年ぶりに増わられたこの「ジム」と
それに連なる一旅を、図解という様式で綴
りよとというものである。機軸にバーエー
シヨンの紹介から各機種の解説に至るまで
ここで紹介するのは、過夫40年にわたる「ジ
ム」たちと同行し、生み出した様々な人々
関係者の苦闘の結果である。そのことに思
いを馳せていただければ幸いである。

RGM-79

ジムとはどんなMSなのか?

モビルスーツ



MS-06F ZAKU II

S P E C

RGM-79 ジムのスペック



頭頂高

18.0m



本体重量

41.2t



全備重量

58.8t



ジェネレーター出力

1,250kW



スラスター総推力

55,500kg



センサー有効半径

6,000m

武装

頭部ハルカン砲×2
ヒーム・スプレッド カン
ヒーム・サーベル
ハイパー・バスター

ヒト(180cm)



れがRGM-79ジムのなかだ。そ
像以上の開きがあった可能性もある。
地球連邦軍の一年戦争勝利に貢献し
た、もっとも重要な兵器の一つ、そ
用、すなわち対MS戦闘機という点
も忘れてはならない。対するジオン
公国軍のMS-06ザクIIは、対艦艇
や宇宙戦闘機用の機体で、これはト
ムも同様だった。この違いは後述の
メリットで、ザクIIとの実力差は想
像以上の開きがあった可能性もある。
地球連邦軍の一年戦争勝利に貢献し
た、もっとも重要な兵器の一つ、そ
れがRGM-79ジムのなかだ。

別の機体と見るべきだろう。
またジムは、MS史上初の白兵戦
用、すなわち対MS戦闘機という点
も忘れてはならない。対するジオン
公国軍のMS-06ザクIIは、対艦艇
や宇宙戦闘機用の機体で、これはト
ムも同様だった。この違いは後述の
メリットで、ザクIIとの実力差は想
像以上の開きがあった可能性もある。
地球連邦軍の一年戦争勝利に貢献し
た、もっとも重要な兵器の一つ、そ
れがRGM-79ジムのなかだ。

ジムとはどんな機体か
開発背景や歴史を探る
RGM-79ジムとは、地球連邦軍
で初めて制式採用された白兵用の
モビルスーツ(MS)である。その
名前は、本機のベースとなる実験機
「試作機RX-78ガンダム」の名から、
「ガンダム・マスプロダクションモ
デル」の頭文字を取り、その略称で
GMジムとされたといわれるが、
名称が決まった経緯には諸説ある。
ジムという機体は、ガンダムの画
像版と捉えられがちだ。しかし、ガ
ンダムはルナ・チタニウム合金製の
装甲や、教育型コンピュータの搭載
など、予算を無視したような開発費
が投入された、いわば実験機だ。こ
れに対しジムは「ジオン公国軍のザ
クを上回る性能」というベンチマー
クを大きくクリアし、後継機の一機
MS-09トムをも上回る性能をも持
つ、まさに求められる状況に必要な十
分な性能を有した、高性能機であり、
別の機体と見るべきだろう。

18

15

10

5

グラフで見るMSの性能差

ここでは一年戦争の主要モビルスーツのカタログスペックを比較してみた。
これを見るだけでもシムの優秀さが垣間見えるはず。

RGM-79 ジム

⊕41.2t ⊕58.8t



1,250 エンジェラーター
出力 (kW)

55,500 スラスター
総推力 (kg)

6,000 センサー
有効半径 (m)

MS-06F ザクⅡ

⊕56.2t ⊕74.5t



976 エンジェラーター
出力 (kW)

43,300 スラスター
総推力 (kg)

3,200 センサー
有効半径 (m)

RX-77-2 ガンキャノン

⊕51.0t ⊕70.0t



1,380 エンジェラーター
出力 (kW)

51,800 スラスター
総推力 (kg)

6,000 センサー
有効半径 (m)

MS-09 ドム

⊕62.6t ⊕81.8t



1,269 エンジェラーター
出力 (kW)

58,200 スラスター
総推力 (kg)

5,400 センサー
有効半径 (m)

MS-14A ゲルググ

⊕42.1t ⊕73.3t



1,440 エンジェラーター
出力 (kW)

61,500 スラスター
総推力 (kg)

6,300 センサー
有効半径 (m)

MSM-07 スゴック

⊕65.1t ⊕96.4t



2,480 エンジェラーター
出力 (kW)

83,000 スラスター
総推力 (kg)

5,200 センサー
有効半径 (m)

MSの重さはどのくらい？



RGM-79 ジム
(本体重量)

41.2t



アフリカ象
平均体重
約5~7t



MSM-10 ゾニック
(本体重量)

167.6t



約 6.9 頭分

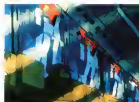


約 27.9 頭分

MSの重量は、RGM-79ジムで41.2t。これはほぼ同じ大きさを持つ戦用兵器である。アメリカ空軍のステルス戦闘機F-22ラプター（空重重量1970）の倍以上の重量となる。一方、半分程度の大きさのアメリカ空軍の戦車M1A2エイブラムスの重量は62.1tとシムの約1.5倍。生物と比較してみるとアフリカ象の約7頭分程度となる。

これは、MSの重量が戦車と航空機の間程度の重さということが出来る。機動戦士ガンダム 製作時「過剰な航空機、メカニカルな戦車のイメージで製作された」ともいわれるが、まさにそのようなものである。

ちなみにこの時代の通常MSの最大重量を誇る機体といえはMSM-10ゾニックである。これはジムより5mほど大きいだけに、重量は約4倍。もっともゾニックはザクⅡの4倍の出力を持ち、8門のメガ粒子砲を備えるいわば移動砲台であり、その用途や内部機構も大きく違う。仕様や用途の異なるMSを一概に同じ基準で比較するのは意味がないといえるのだ。



初期生産型
(シャッローモデル)



U.C.0079

RGM-79
ジム

RX-78
ガンダム



TGM-79
ジム・
トレーナー

RGM-79L
ジム・ライト
アーマー

RGM-79SC
ジム・
スナイパー
カスタム

RGM-79F
陸戦用ジム



RX-78-2
陸戦型
ガンダム

< 現地改修

EXAMINER
RGM-79SD 1
ブルー
ディスティニー
1号機

RX-78-2G Ez 8
ガンダム
Ez8



< 部品を共有

RGM-79SD 2
ブルー
ディスティニー
2号機

< 改修

予備機
RGM-79SD 3
ブルー
ディスティニー
3号機



RGM-79(G)
陸戦型ジム

陸戦型ガンダムとともに現
場からの早期のMS配備要請
を受けて、後継開発製造さ
れた先行量産MS。陸戦型ガ
ンダムとは部品の互換性が
あり共有が可能。ジムとは
別系統の機体。

開発330
RGC-80
ジム・キャノン

水中用
RAG-79
アクア・ジム

< 改修

RAG-79G 1
水中用
ガンダム



RGMの系譜

RGM-79 ジムは、数えるのに苦労するほど多くのモデルが存在する。

宇宙世紀の設定(歴史)の中では、

わずか半年〜3ヵ月の間にこれらのモデルが開発、生産されたとされる。

これらはどのような時代の要請で登場したのだろうか!?

U.C.0088

RGM-86R
ジムⅢ

U.C.0087

RGM-179/180M-79R
ジムⅡ

U.C.0093 ~

RGM-69
ジェガン

ジム目以降の地球連邦軍主力MSは、ジムの名を冠することはない。ジェガンへと統合される。その後 U.C.0123年頃まで主力機として活躍する。配備時期に比例して派生機やハリエーション機も少なくない。

RGM-79 (E)
初期型ジム後期生産型
(ルナツーモデル)RGM-79G
ジム・コマンド
(コロニー戦仕様)

U.C.0083

RGM-79C
ジム改RGM-7905
ジム・コマンド
(宇宙戦仕様)

防衛戦型

RGM-79D
ジム寒冷地
仕様RGM-79
パワー・ジムRGM-83
ジム・キャノンⅡRGM-79D
デザート・ジムRGM-79FP
ジム・
ストライカーRGM-79M
ジム・カスタムRX 78NT-1
ガンダム
NT-1アレックス

一年戦争末期にニュータイプ専用機として開発された。だが、ジオン公軍軍の特殊部隊の襲撃により大破し、軌線には投入されなかった。本機をベースにジム・カスタムは開発されたといわれる。

RGM-79G
ジム・クワエル

RGM-79ジムの系譜にはいくつかの流れが存在する。地球連邦軍のモビルスーツが軌線へ投入されたのは、宇宙世紀0079年の7月頃からで、RGM-79ジムの本格的生産は10月といわれる。以後、実質半年から3カ月程度の間に爆発的な勢いで配備され、おびただしい数の派生機も投入された。これは、ジムが当初から複数モデルを持つ機体だったためだ。

ジムは、いくつものモデルに大別できる。1つ目は初期生産型といわれる系列の機体でジャブローモデルともいわれる。これはジャブロー基地で生産（開発）されたタイプ。もう1つは「機動戦士ガンダム第08MS小隊」に登場した、RGM-79(E)初期型ジムに連なる、後期生産型と呼ばれるグループで、ルナツーで製造されたためルナツーモデルともいわれる。この他にも欧州や地球各地で開発・生産が行われたモデルもあるという。

2つのモデル登場のタイムラグはせいぜい2カ月程度で、それに「初期型（後期型）」と区別するのはどうかという考えもある。つまりジムは1種類でなく、RGM-79という設計企画を元に、各開発拠点で最も作りやすい設計・工法が採用された結果、様々なバリエーションのあるモデルの登場に繋がったということなのだろう。これは主戦の兵器の歴史を紐解いても珍しいことではない。

試作機と

見た目がちがえば機能もちがう？

● 胴体

12ページにて解説

● 頭部

12ページにて解説

● ビーム・サーベル

自兵戦用の格闘戦兵器。出力の調整によりビーム刃の長さはある程度調整できるようだ。安全弁を解除することでビーム・ジャベリンに変形する。

● 肩部アーモア

ンオン公団軍のMSとは違って直線的でソリッドな形状。

● 腰部

12ページにて解説

● 装甲材質 ルナ・チタニウム 合金

サウ・マシンの高剛性にも耐えうる強度を備えた特殊合金。製造方法は手間はかかるが量産機に使用するにはかなり高コストな素材だ。試作機ならではの設備といえるだろう。

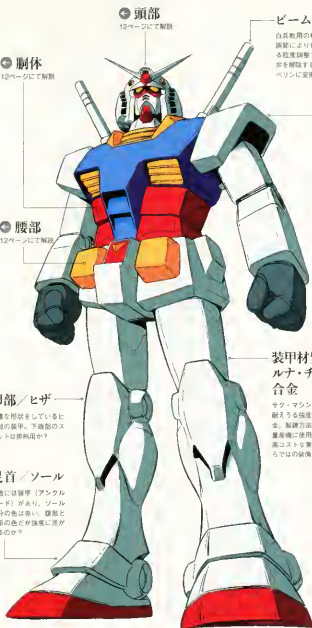
● 脚部／ヒザ

標準な形状をしているヒザ部の装甲。下部のスリットは排熱用か？

● 足首／ソール

足首には装甲（アングルガード）があり、ソール部分の色は赤い。膝部と同系の色だが強度に差があるのか？

ガンダムの生産タイプがジムである。しかし、見比べてみると姿形がかなり違うことに気がつく。では、この両機の違いはどこから生まれてきたものなのか？各機体の仕様や特性を理解することで答えが見えてくる！



ガンダムのダウンスペック版 IIジムではない？

地球連邦軍のモビルスーツ開発・製造計画には大きく分けて2つのものがあつた。ひとつは一年戦争開戦以前より進行していた、モビルスーツ開発計画である「R X計画」と、一年戦争開戦後に急遽立ち上げられたモビルスーツの開発・生産・運用までの包括的な計画である「V作戦」である。そして、おおかまには前者の成果の集大成がR X・78ガンダムで、後者の成果がR G M・78ジムと判断して差し変えられただろう。

R X計画はモビルスーツを開発するための基礎研究から始まり、一年戦争開戦でその重要度が大幅に増した。計画の指針は、長距離支援機（R X・75ガンタンク）、中距離支援機（R X・77ガンキャノン）、そして本命である自兵戦型（R X・78ガンダム）の順にステップを踏むかのように進められた。

その他にも脱出装置とフレキシブルな運用システムを兼ねたコア・プロトック・システム、運用にまつわるデータとを蓄積・分析しソフトウェアを改善し、自機だけでなく共有化により機体運用全体に役立つデータを構築する教育型コンピュータ（使えば使うほど進化する）の搭載、そして駆動だが、きわめて高価なルナ・チタニウム合金の採用など、予算に糸目をつけない機体群であつた。

一方で「V作戦」は、R X計画の

量産機のちがいがいい

肩部アーマー

ガンダムでは白（鍍金の色か?）だった肩甲だが、ジムの場合はホディカラーと同じ色に塗られている。

腹部アーマー

コウピノットの装甲はシンプルな構成に。コア・ブロック・システムを排除した影響なども考えられる。

頭部

12ページにて解説

ビーム・サーベル

ガンダムと類似格といえるビーム・サーベルは1本装備ただし、安全弁を解除することとでビーム・ジャヘリンになるかは不明。運用面やコストを考慮しての結果か。

胴体

12ページにて解説

腰部

12ページにて解説

装甲材質 チタン系合金

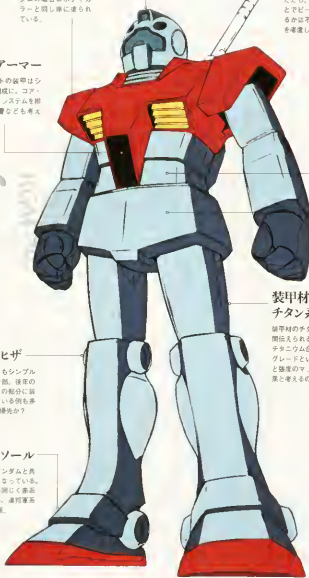
装甲材のチタン系合金は、希少なチタン合金からのダウングレードというより、生産性と強度のマッチングによる結果と考えるのが妥当。

脚部 ヒザ

ガンダムよりもシンプルな形状のヒザ部。後年の機体では、この部分に装甲を追加している例も多い。生産性を優先か?

足首/ソール

足首部分はガンダムと共通した構成になっている。ソールの色も同じく赤系となっている。連邦軍系MSでは主流だ。



このような前提を理解せずに、ジムを単なるガンダムのダウンスペック版と捉える、地球連邦軍のモビルスーツを理解するのに、大きな誤解が生じることになる。

あくまで、現状の技術で実現可能なあらゆる機能を、コストを度外視して投入したのがガンダムであり、ジムは、現実的かつ必要十分な高い性能を持つモビルスーツの生産、配備、運用までを視野に入れ開発された機体であるからだ。

もっとも、ガンダムとジムはまったく別の機体かといえるにせよ、ジムはガンダムの設計をベースにした、大量生産、大量配備ができる生産性、経路の浅いパイロットでも扱いやすく、前線で運用しやすい実用性など、必要とされる機能は遠く足らず投入されている。よくガンダムは「試作機」と評されるが、本来そのままの姿で実戦投入することこそ考え難く、正確には「実験機」と評価すべきだろう。ただ、そのフौरマツや基礎部分は、後の実験機「RGM-79」を視野に入れたものである。つまり、ジムは、僅大であることとは間違いがないのだ。

成果をその中に取り込み、眼前に迫るジオン公団軍のモビルスーツの脅威を排除するための極めて実用的な計画であったといっていだろうか。

各部と機能の比較

前項では全体的なシルエットを比較するところから仕様や機能を検証したが、ここからは各部の比較をしてみよう。
そこから見てくるRGM-79ジムとRX-78-2ガンダムとの関係性は？

RGM-79



メインカメラや武装の構造はRX-78-2ガンダムとはほとんど同じなシムの構造。ノイオンアイはパイザーの中にあるとされる。

RX-78-2



人間の顔にも見える複雑な形状のガンダムの顔は、後の機体にも採用されていることから、技術的な必要性があるのだろう。

1. 頭部

実はガンダムより性能が良かった!?
ジムのセンサーシステム

ガンダムとジムの外見上のもっとも大きな差は、頭部のデザインだろう。2本のプレートアンテナの有無やツインアイ（ステレオカメラ）とゴーグルタイプのセンサーシステムなど、デザイン面でも大きな差がある。

一方、機体面では、前述の各種センサー類以外、頭部バルカン砲など機体構成上はほぼ同一規格で、またジムの中にはロッド式のアンテナを頭部に装備する例もあった。性能面でもっとも重要なセンサー有効半径（6,000m）は、サクジ（3,200m）を大きく上回り、ガンダム（5,800m）とは僅かながら凌駕していた。

つまり、ジムの頭部は、ガンダムから設計の見直しがなされ、単純に工程の簡略化を図っただけ、という可能性もあるのだ。

3. 腰部

装甲上不合理なガンダムの腰部は
性能とのトレードオフか!?

ジムとガンダムの顔面以外の外見上の違いが表れている部位といえば、腰部のプロットだろう。これは、「機動戦士ガンダム」放送時に公開された透視図などでは「ヘルウム・コントロール・コア」となっている。現在でもその設定が継承されているかは定かではないが、何らかの補強のカバー（装甲）なのは間違いないだろう。これは戦後に配備されたRGM-79Nジム・カスタムでも採用されているので、ジムの場合、補強は前部装甲の内部にシーリングされていると考えられている。もちろん、ジムの装甲形状の方が耐弾性は高く、プロットの隙間で跳弾することもない。むしろガンダムやジム・カスタムの場合、求める性能を実現するため補強の大型化は避けられず、やむを得ず採用したと考えられるだろう。

RGM-79



腰部装甲には分割されているものと一体型のタイプがある。強靱な一枚部品が合理的だが、可動部が別添される面もある。

RX-78-2



このように隙間の多い装甲は、弾が当たった時にエネルギーの逃げ場がなく、跳弾しものかき揚げなど、デメリットも多い。

2. 胴体部

極めてよく似ている
ガンダムとジムの胴体部

ガンダムとジムの胴体部は類似している。胸部ダクトのスコット形状、すなわち給排気（もしくは冷却）系と思われる部分の取り回しはほぼ同一。当然、内部にはメイン・ジェネレーターがある。つまり、機体の横断部分の構造は、ほとんど同一の設計であるということだろう。

唯一違うのはコックピット・ハッチ周辺の処理だ。これは機体時の安全性を考えると、単純な形状のジムの方が優れていることは明白だ。むしろガンダムのそれは、構造上跳弾しやすく危険に曝るが、コア・プロット・システムの統合上の制約とも考えられる。

RGM-79



RX-78-2



地球連邦軍戦艦機
FF-X7 コア・ファイター

ガンダムの心臓部といえる特徴的なコア・ファイターだが、収容時はツッド・ウエイトになる部分も多し。それを廃したジムでは設計にも余裕があったろう。



RGM-79 ジム	名称	RX-78-2 ガンダム
18.0 m	頭頂高	18.0 m
41.2 t	本体重量	43.4 t
58.8 t	全機重量	60.0 t
1,250 kW	ジェネレーター出力	1,380 kW
55,500 kg	スラスター総推力	55,500 kg
6,000 m	センサー有効半径	5,700 m

4. スペック

実はそれほど差がない ガンダムとジムの性能

両機のカタログスペックを比べると、ガンダムの方が出力は10%ほど高く、重量は5%ほど重い。スラスター推力は同じ（同じ型式のものが搭載されているのだろう）。つまり、若干ジムの方がスラスターによる運動性能は高く、ガンダムの高い出力はヒーム兵器の威力にも関係していると考えられる。

また、センサー有効半径はジムの方が広い。つまり、これらの結果から単純な性能比較では、攻撃力以外はわずかにジムの性能が高いともいえるのだ。ただ、ここでは比較していない装甲の違い。ガンダムのルナ・チタニウム合金製の装甲のアドバンテージは不明なため、最終的な生存（損耗）率、破壊力はガンダムが上回ると考えられるが、イメージほどの差はないのだ。

共通する武装



ビームサーベル



バルカン砲

異なる武装



ビーム・スプレッドガン (RGM-79)



ビームライフル (RX-78-2)

5. 武装

圧倒的な破壊力のガンダム 確実な実用性のジム

武装について、一番大きい差は、ガンダムが高出力のビーム・ライフルを使用できるという点だろう。しかし、対モビルスーツ戦においてはオーバースペック気味でもあった。

ジムが携行するビーム・スプレッドガンは、敵モビルスーツを撃ち抜くことができ、またヒームの照射面が広いので命中確率も高かったと考えられ、対艦攻撃などにはハイパー・バズーカを用いるなど用途に応じて使い分けを行っていた。また、ヒーム・サーベルは予備をなくし1本となり（実際2本使用する場面はほとんどなかった）製造コスト、および重量の軽減にも貢献した。



ジムの派生機



約 **70** 種

代表的な機体

RGM-79SC ジム・スナイパーカスタム
RGC-80 ジム キヤノン
RGM-79SG ジム・コマンド（宇宙戦仕様）
RGM-79SP ジム・スナイパーⅡ
RGM-79[G] 機動型ジム
RGM-79E 超機動型ジム
RAG-79 アクア・ジム
RGM-79L ジム・ライトアーマー
TGM-79 ジム・トレーナー など

ガンダムの派生機



16 種

代表的な機体

RX-78-1 プロトタイプガンダム
RX-78-3 G-3 ガンダム
RX-78NT-1 ガンダム NT-1 アレックス
FA-78-1 フルアーマーガンダム など

6. バリエーション

〈一年戦争限定〉

作戦地域にあわせるジム 性能向上を追求するガンダム

ジムは、一年戦争時に数多くのバリエーションモデルが展開された。これは配備地域が多様であることから、使用する環境や条件に応じて、それに則して単一目的に絞る方が効率的という考えによるものといえる。

一方、ガンダムにも少数ながらバリエーションモデルが存在する。これは、実験機という設計上のキャパシティの広さを利用して、さらなる性能向上を目的としたものであり、想定外のガンダムによる戦場での実績もそれを後押ししたものである。つまり、ガンダムのバリエーションは、最初から少数しか生産しないことを念頭に置いた特殊機なのだ。



華麗なる ジムの活躍

Part1

映像作品で振り返るジムの名(迷)場面

ガンタムの活躍だけでは戦争に勝てないし、作品を描くのだって難しい。そこには陰日向く活躍するジム(&ホール)がいればこそ！ ここではそんな彼らの姿を各ガンダム作品からピックアップしてみた！

機動戦士ガンダム

最新鋭量産機ではあっても シャアにかかれば一瞬でやられ役

サイト7から地球に来るまでの戦いでホロホロになったホワイトベースが、ようやくたどり着いた地球連邦軍の本拠地、南米のシャプロー基地。

そこではガンダムのデータをもとに、まさにジムが大量生産されている最中だった。と、そこへ大西洋からホワイトベースを追って、シャプローの位置を突き止めた シャア大佐率いるマッド・アングラー隊が強襲！ 迎撃つのが新鋭機の新ジムだ。これが初陣になるジムだが、その相手は同とシャア専用スゴック。シャアとしては久々のMS戦だし、固練のガンダム増しと猛ハッスル、そして脳筋されるジム。

このやられっぷりは、シャア完全悪徳を印象付けるための演出として十分であり、ジムの「やられメカ伝説」の幕が上がった瞬間でもあるのだ。



「アムロがその動きと出て敵が、デと理解し難い中、うかつにもシャアのスゴックに近づき隙を一撃でぶち抜かれて大爆発する」(実はこのシーンの前にも、やられるジムは描かれている)。その後、スゴックとガンダムは大立ち回りをするが、助太刀に走らう、ティ・大尉のファン・ファンが一撃を喰い「足踏ではない」と、ファン・ファンを撃退して逃走するのだ。



機動戦士ガンダム 1979年

TV作品 第29話「シャプローに敵む」より

144



この回のジムと並ぶもう一つの主役メカが、潜入工作で活躍するア・ノイだ。ただ、対MS戦には向いていないのか、ガンダムに次々と倒されてしまった「劇場版 Ⅲ 真・戦士編」だ。とちょっと違う！ 今こそ「可愛イMS」代表のように扱われるア・ノイだが、本来はジムと同じ「やられメカ」の1機なのだ。本編で戦う機会はなかったジムとア・ノイだが、実際に戦ったジムがやられ役？

ろくに戦ってもしないうちに 爆破される危機が迫る！！

地球連邦軍のシャプロー内で大量に生産され、工場で出撃を待つ主力MSのジム。まだ生産ラインに乗ったばかりだというのに、マッド・アングラー隊に目を付けられシャアとアカハナ率いる工作部隊により、機体に時限爆弾を仕掛けられてしまう！ あわや戦わぬうちに全滅のピンチかと思いきや、青見官から逃げ出した、ホワイトベースのカズ、レズ、キ・ノカの活躍で、とりあえず難を逃れた。

すべての爆弾を子供たちだけで処理できたか疑問も残るが「工場が爆発してないから、きっと大丈夫」さすが最終回でアムロに脱出話を教えたニュータイプな子どもたちの活躍が光る名場面といえる(アレ、ジムは？)。



機動戦士ガンダム 1979年

TV作品 第30話「小さな助命艇」より

145



機動戦士ガンダム 1979年
TV作品 第36話「恐怖! 機動ヒク・ザムより」

強大な相手を前にしても 逃げ出すわけにはいかない!

ソロモン戦で印象深いのは、ドズル中尉のビグ・ザムと相対した時に、多少ヒッ
ていたがシールドを構えて、相手の戦力を見極めようと まったく対応をしたシ
ン少尉のジムだ(1 144プラモデルの箱絵にも描かれている) このシン少尉の
機體な対応と裏腹に 彼の制止を振り切り突撃をかけるホーリに対し 視察者も思
わず「おい! ホールで突撃するなよ!」とツッコんだとか 結果的に、どちらも
ビグ・ザムのメカ粒子砲の餌食となり、トロトロに溶かされてしまった「戦いは数
だよ、兄貴!」とはドズルの言だが、数でどうにもならない時もあるよね。



144

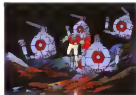
145



劇場版 機動戦士ガンダムⅡ
あゝ宇宙 1982年 劇場公開作品

量産メカの真骨頂! 画面を埋め尽くすジム

シオン公国軍の宇宙要塞 ソロモンからア・バオア・クーでの戦いで 相対する
地球連邦軍は、多くの艦船とジムやボールを戦線に投入した そんな中で特にグ
とくるのが、宇宙巡洋艦サラミスや宇宙戦艦マゼランの甲板上。上下の区別なく露
天駐止されているジムの姿だ。舞臺力の宇宙空間であることを際立たせるSFらしい
描写といえる。劇場版となりこれらの描写のクオリティもアップしたことで IMS
用のテクニックがないから外に突っ立っているんだ!「乗り降りが大変そうだが接触だも
んな」などなど、これらのシーンにリアリティを感じたファンは少なくなかった。



146

147



劇場版 機動戦士ガンダムⅢ
めぐりあい宇宙 1982年 劇場公開作品

名もなきパイロットも 命を賭して戦う戦場

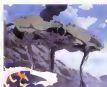
これまでのジムの目立った活躍といえは、シャア専用ズゴックやビグ・サム相手
に満平にやられるくらい。でもこれは「強敵」が相手なので仕方ないこと
同じ量産機が相手ならば と思いきや、ザクⅡが飛び出したホールに当たって
吹き飛ばされたり、戦艦の爆発に巻き込まれたり、やはり色々な目に。「カッコいいジムの
活躍はないものか?」と迷っているなか、あったよ! ありましたよ! カ
ッコいいジムが。リック・トムにバルカン掃射しながら、ビーム・サーベルで斬りか
かり剣を真っ二つ! これがあるだけで シム達は「ご飯3杯」はいけます?



与えられた命令を淡々とこなす
プロフェッショナルなジム

戦場には様々な役目を持った機体と兵士がいるわけで、プロフェッショナルな活躍をしてくれるのが「08小隊」に出てくる陸戦型ジムの狙撃型、ジム・スナイパーだろう。作中では、ジオン公国軍の傭兵兵を乗せて脱出を図るケルゲレンを撃墜したり、アプサラスIIを狙撃したり、あまつさえ味方のガンダムEz 8だって撃つちゃう。ちょっと悪役風な存在感ある描かれ方だが、戦争という側面を考えると、このジム・スナイパーの名もなきパイロットたちは、上官命令を素直にこなす軍人の塩といえなくもない。私情を抜き狙撃のプロ(寡人)と非情な戦場を描く名シーンなのだ。

→1. 狂気をそらんで暴走するキオアスの搭るアプサラスIIを撃ち抜いて止めたのもジム・スナイパーだ。敵のウィークポイントを決めるのもカナカナ腕の立つパイロットらしい。



→アプサラスIIを完全に破壊しようとして近づいたアイナとシローのガンダムEz 8をも狙撃！ 狙撃したヒームは左胸から胸にかけて吹き飛ばした。しかしジム・スナイパーはアプサラスIIに撃たれた。

第08MS小隊



機動戦士ガンダム
第08MS小隊 1996年
OVA 作品
第11話「覆える山(後編)」

コロニー防衛に奮戦する
ジム・コマンドたちの勇姿！?

性能において、ガンダムに勝るとも劣らないジム・コマンド。だがボケ戦の中では、やはり「やられ役」の宿命からは逃れられなかった。第1ラウンドは、サイド6のリボア・コロニーを強襲した敵MS部隊に打ち勝つ。コマンド(コロニー戦仕様)だが、結果は惨敗(とはいえず撃退はしたから任務は成功?)。続く第2ラウンドは同じコロニー宙域でのジム・コマンド(宇宙戦仕様)とシオン公国軍MS部隊との戦闘だ。相手も格上なケルグウリノク・トムⅡで、あす術なし! なかなか「MSの性能の違いが、戦力の決定的な差ではない」とはいかないように。



→コロニー内の戦闘では、アースカラーにペイントされたコロニー居住者の機体が活躍する。爆入してきたバーニのザク改や、機体色が緑色のリノク・トムⅡに打ち勝つのだが、次々と倒れていった。あさり地の利は逃がせなかったようだ。ちなみにバーニの機体は、整備不良なのか故障が多く、大した戦果を上げることもなかった。あまに現地の子供(アル)に見つかるとし。

→リボア・コロニーがあるのは、中立地帯のサイド6にある。本来なら双方の陣営のMSや中流艦艇が戦場。もしくは配備されることはない(ハズ)。たゞ、現地の治安悪化。リア軍や整備されているから、それらの協力者まで連邦軍が介入するのだ(隠し)なく外交問題に発展してしまう。コロニーの子供たちもMSを見たことはなかったもので、存在そのものが脅威とされている可能性がある。



機動戦士ガンダム
ボケ戦の中の戦争



機動戦士ガンダム 0080 ボケ戦の中の戦争
1988年 OVA 作品
第1話「戦場までは何マイル?」



MOBILE SUIT DESIGNER CHIBO

ポケットの中の戦争

Data

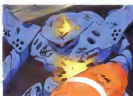
機動戦士ガンダム 0080 ポケットの中の戦争

1988年 OVA 作品

第1話 戦場までは何マイル? より

意地を見せた1機のジムの 弾幕がシャトルを護り切る

極秘に開発されたガンダムNT-1アレックスは、秘密裏に北極基地からシャトルで打ち上げられようとしていた。そこをジオン公国軍の特殊部隊サイクロプス隊が奇襲する! 防衛にはジム専用地仕様がありがたが、相対するサイクロプス隊の機体は、誰もがプロフェッショナルだから、あつという間にやられ敵々な結果に。しかしシャトルの真下直近で危険を顧みず防衛していた機体のお陰で、シャトルは無事 宇宙へ向けて飛び立った。これぞ肉を切らせて骨を断つ 愚直に負けても試合に勝つ の心意気だろう (ジムの安否はわからないが)。



144

991



機動戦士ガンダム

第08MS小隊

Data

機動戦士ガンダム 第08MS小隊 1996年

OVA 作品 第10話「翼える山」(前編) ほか

味方の味方は敵? まさか、利用されることになるなんて!?

ジオン公国軍の秘密基地を巡る戦いは、修繕を迎えつつあった。当初は部隊を送り込み侵入経路を探っていたが、策を煮やした指揮官のイーサン・ライヤー大佐は、陸戦型ジムの動力源を爆弾に仕立てた「山ごと吹き飛ばす作戦」を立案し強行。この時、爆弾代わりにされたのは、物語前半、シロー・ヤンダースに結んでいた 07 小隊の面々だ (さすがにちょっと可哀想である)。これ以外にも、多くの陸戦型ジムがアプサラス宙の一撃で撃墜していたりする (ホント、可哀想だ)。



144

991



機動戦士ガンダム

第08MS小隊

Data

機動戦士ガンダム 第08MS小隊 1996年

OVA 作品 第9話「前編」ほか

番外編!? たどえジム頭でも ボディがガンダムなら強いのは当然?

陸戦型ジムと陸戦型ガンダムは同じ生産ラインで作られているので パーツには互換性がある。そんなわけで、アッガイとの戦闘 (第9話) で弾頭を破壊されたカレンの陸戦型ガンダムには、それ以降は陸戦型ジムの頭部が用いられている。戦場での応急処置でもあり、頭部とボディの色がまったく違うのも修理を安易で行った様子を表し、部品そのものの調達が難しい、という設定も見事に活かしたミリタリズムあふれる描写なのである。もっとも、搭乗者であるカレンは、ジム頭をあまりお気に召していない様子だが。



幻の試作機ツダとスピード競争を演じた ジムの運命やいかに!?

オチノサ戦敗北の後、地上から宇宙空間へ出てきたジオン公国軍の陸上部隊、HLVから出た陸戦仕様のザクⅡは、環境の違いに「割れてしまう」。そんな彼らを救出すべく第603技術試験隊は現地に到着。しかし試験途中でノダと、逃走する艦隊隊にともを刺した来と連邦軍のジム部隊は戦闘に突入する。4機のジムがデューバル少佐の乗るツダに速度勝負を挑むが、「速度試験中に爆発事故を起こした欠陥機」=ツダよりも先に、次々とトラブルを起こし爆発してしまっ! 戦時急造機で過りかかったのたろうか? 不思議なこともあるものだ。



MS IGL00

Data

機動戦士ガンダム MS IGL00 1年戦争秘録
2004年 劇場公開作品
第3話「軌道上に幻影は現はしる」より



↑ザクⅡとの競合試作に敗れたツダは、欠陥機とされているが、その速力はモンノ、パイロットのデューバル少佐の技量も折り減つた。ただ、ジムを引き付けえまではいいのだけれど、やはり最終には空中分解してしまっ! 対するジムも任務を遂げられなかったから、どちらにとっても悲劇的結末だ。

↑MS IGL00 シリーズ最初の2作は、ジオン公国軍視点で物語が展開され、作中に登場する連邦軍の兵士たちは、とにかく「悪役っぽい」、とはいえ、ガンダム 本編ではあまり見られなかつた、ボールの本末あるべき支援砲撃機としての、ちゃんとした活躍が描かれるなど、見どころはたくさんある。

144

145

過酷な戦場を緻密なCGで描く! ア・バオア・クーでのジムの活躍

一年戦争において、ジム(とボール)がもっともその力を発揮した戦いといえば、宇宙要塞ア・バオア・クーでの戦いだろう。連邦軍がその圧倒的な数にモノをいわせたその戦いは、MS IGL00 第3話(0079)でも存分に描かれている。例えば、ビート・ホークを操るザクⅡに、シールドを以て至近距離からライフルをお見舞いしたり、例え停戦命令が出て戦意はなくても、格下のオゴ相手に躊躇なく一撃を入れたり(かなりの回避行動だけれど)とにかく連邦軍のイケイケドンドンぶりがスゴイのである。



↑本作の主役である第603技術試験隊(この時点ではカスベリ戦隊大隊所属)の面々の活躍が中心となっているが、ア・バオア・クーの戦いも連邦軍に勝利している。そうした場面では、客観的にジムやボールが次々と吹き飛ばされ、半壊を繰り返す。本作の「やらせメカ」らしい趣向ともいえる描写だが、本作がCGで描かれているせいだろうか「もし自分があの場にいたら、生き残るのは確しそっ!」と思えるような緊迫感がある。



←「戦いは数だよ、見よう」と思わずドズル中尉のセリフが口をついてしまうようなシーンが本作では随所に見られる。いや、ジムに対してこのセリフは立場が逆だわ! しかも連邦軍と見られるO型のジムがア・バオア・クーで活躍する姿は、これまでガンダムシリーズで描かれる機会がなかったから、とても新鮮に映るぞ。

MS IGL00

Data

機動戦士ガンダム MS IGL00 第3話「宇宙に現はるる」より



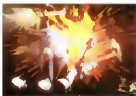
Data

機動戦士ガンダム MS IGLOO 黙示録 0079
2006年 OVA 作品
第3話「密戦に魂は漂る」より

144

宙域から離脱するジオン公国軍 とにかく追撃する地球連邦軍

ア・バオア・クー宙域から離脱しようとする自軍の時間を稼ぐため、先第603技術試験隊とビッグ・ラングの前に立ち塞がるジムとホールの基成部隊。停戦命令が出て戦意のないビッグ・ラングに闘いかったり、なぜか巨艦がカタアケしようとしているヤンキー風だったり、隙なく悪者（ヒーロー）な描かれ方ではある。だが、オニコを覆り、スベックで上回るカスペン大佐のケルグも撃破し、さらに巨大MA、ビッグ・ラングを大破するなど、純粋に戦闘面の戦果だけを見ればジムらしからぬ大健闘といえるだろう。もちろん逆に撃破されるシーンも多々あるのはいうまでもない



145

オデッサ作戦を勝利に導いたのは 陸戦型ジム？ 陸戦強襲型ガンタンク？

陸戦型ジムは連邦軍最初期の量産MSだが、「一部の機体はオデッサ作戦にも参加していた」という設定で「MS IGLOO 2 重力戦線」では描かれている。戦線のメインは陸戦強襲型ガンタンクに連なる形だが、そこに登場する機体は、どれも陸戦型ガンダムと同型のショートタイプのシールドではなく、カンダムタイプのシールドなのがポイント。対MS用の盾とし穴（数値か）に落ちたり、クワラン襲来よろしくワッパ部隊に爆弾を付けられたり、とにかく見事な「やられっぴり」を披露するさまざまなバリエーションと共に進軍する姿は、ミリタリー描写溢れるイイ場面だ。



146

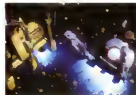


Data

機動戦士ガンダム MS IGLOO 黙示録 0079;
2006年 OVA 作品
第2話「光の影を越えろ」より

番外編！ 世紀のモビル・ボッド対決

ジム以上にやられメカのイメージが強い相棒のボールだが、意外に健闘していることもある。ジオン公国軍の第603技術試験隊でテストされていたモビル・ボッド、オニコとの戦いでは、どちらも未熟な少年兵（新兵）同士の戦いだったため、スベックで上回るオニコがやや有利。しかし後に熟練のホールが駆せ参ずると状況は一転！ シチュエーションとしても「ピンチの新兵を助けるベテラン」というおいしい民間人のだが、本作はジオン公国軍視点で描かれる物語のため、どうしても連邦軍は悪役っぽい描写のため、清々しい気分が伴わないのが非常に残念である（笑）



147

年表で見る

RGM

宇宙世紀編

ここでは、作品世界内と、現実世界におけるジムの歴史を取り上げながら、ジムと「ガンダム」という作品ジャンルについて考えてみることにしたい。そこからジムの歴史＝宇宙世紀の歴史といつていこうかろう。

RGM・79の歴史こそガンダム40年史の象徴だ

79年から放送された『機動戦士ガンダム』の40年近い歴史の中で、作品世界観である宇宙世紀という設定において、RGM・79ジムほど、その設定が変化している機体は少ないかもしれない。このことはMS・DGザクIIと並び、一般的な量産タイプ（主力機）であるからといって、世界観の根幹を支える存在であることと不可分ではない。

オリジナルの『ガンダム』以降、各球像作品、あるいは雑誌、模型、ゲームなどの媒体で宇宙世紀を題材

に展開する場合、89年の『機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争』のように、『ガンダム』のホワイトベース隊以外の視点から「一年戦争」を描く例が多い。そうした派生作品ではいわゆる量産型の「ザク」と「ジム」の登場は不可欠で、作品ごとのストーリーに合わせて、様々なバリエーションが展開している。

つまり製作者たちは、現実と比べて未完成な宇宙世紀という歴史物語の中に、様々なジムの新モデルを忍び込ませる場面を見つけて取り込んでいることに他ならず、それがまた次なる新しい物語や、新しいジムの登場する土壌を作っているのだ。ゆ

宇宙世紀

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

0079年

地球連邦軍主力機の登場

おらな出来事

1月
ジオン公国軍 MS・05ザクIIの量産を開始
地球連邦軍 RX計画によるMS開発が機体設計段階

3月
ジオン公国軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

1月3日
ジオン公国軍 フリテン（シュバ）作戦（コロニー落とし）実行
コロニーは目的地ジャブローの軌道を外れ、

1月4日
コロニーは目的地ジャブローの軌道を外れ、
オーストラリア、シドニーに落下（一週間の戦争終了）

1月15日
ルウム戦役終結 地球連邦軍艦隊大敗
南極条約締結

1月31日
ジオン公国軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

2月7日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

4月1日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

7月
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

10月7日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

12月24日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

12月30日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

12月31日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

1月1日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

9月13日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

9月30日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

11月10日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

12月12日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

12月13日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

12月14日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

7月31日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

9月8日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

9月18日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

2月6日
地球連邦軍 地球連邦政府に宣戦布告
一年戦争勃発（一週間の戦争）

RGM-79C ジムC

RGM-79 ジム

RGM-79N ジム・カスタム

RGM-79(G) 鋼鉄戦艦ジム

RGM-79DS ジム・コマンド (特選機)

RGM-79G ジム・コマンド

RGM-79Q ジム・クワレル

RAG-79 アタア・ジム

特選機登場

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

アルビオン地上部隊のため地球のトリントン基地に到着

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

デラース・フリード「星の国作戦」を遂行 地球連邦軍艦隊

年表で見る

R
G
M
活躍年代記

活躍年代記

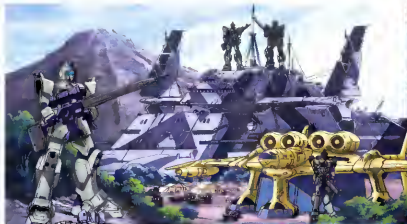
現實世界網



この年表では、ジムに関連している作品タイトルを挙げ、プラモデルやゲームのジムを中心に取り扱っている。製品名称は発売当時のものを表記し、製品(プラモデル)のブランドやゲームソフトのハードなどは英字による略称で表記した。

[illegible][illegible]





ジムの分類〔1〕

—初期生産型とは?—

RGM-79ジムには、多くのバリエーション機が存在するが、単にRGM-79ジムと呼ばれるものの中にも様々な種類が存在する。ここでは、それらのものを簡単に解説していこう。



【最初期にジャブローで開発・生産されたグループ】

一年戦争に投入されたRGM-79ジムは外見上の差異でいくつかのタイプに分けられる。もっとも知られているのは、シャブローが生産（開発）拠点の一つであったことから、いわゆる「シャブローモデル」と呼ばれる機体だ。外見的にもシンプルで、中でも腰部アーマーが一体型となっているタイプが標準的な。これらの機体は、先行量産型のグループとされ、その中でも前期型（A型）と後期型（B型）に大別される。

外見的にはほとんど差がないが、前期型はモビルスーツを早期投入するために開発作業で製作され、機体の性能が出ていなかったとされる。後期型は問題が解決され、期待通りの高い性能を発揮した。それ以外にも腰部アーマーが分体型のタイプや、胸部タクトの処理が異なるなどのマイナーチェンジモデルも存在する。

機種解説



シャブローモデル（通称）の特徴

- ・シンプルな形状の腰部
- ・腰部装甲の構成もシンプル
- ・コクピットハッチは一枚板



一年戦争後期の地球連邦軍の一大反撃作戦、すなわちソロモン迎撃戦である「チェンバロ作戦」に、それに続くオンブ島迎撃作戦である「星一号作戦」に参加した艦隊は、レビル將軍の座乗艦をはじめ、ジャブローで建造され、同基地より宇宙へ打ち上げられたものが多かった。

そして、ジャブロー製の艦艇にはジャブロー及び周辺で生産されたRGM-79ジムが搭載されていると考えられている。これらの戦場で、いわゆる「シャブローモデル」が数多く見られるのは、当然ともいえるのだ。

もちろんティアンム艦隊など、ルナノなどで生産されたと思われる艦艇やジムも数多く参加していたはずで、04年の「MS IGL00」シリーズなど、数多くの作品でいわゆる「ルナノーモデル」も登場している。



〔 Back 〕

機体の一般的中部からモビルスーツの機体を通る、全体デザインとマトリクスRX-78のタムとイメーを繋ぐものは何となく見える。



〔 Front 〕

機体の一般的なデザインとスリットが胸部と頭部を繋ぐのも、シャブローモデルの特徴。それらと機体の一般的なデザインを繋ぐのも、シャブローモデルの特徴。

RB-79 ボール

SPEC

頭高	12.8m
本体重量	17.2t
ジェネレーター出力	400kW
武装	キャノン砲

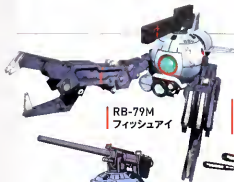
宇宙作業用スペース・ポッドをベースにした支援機動兵器。基本的には大量配備と集中運用を旨とするが、用途に応じて開発された派生機は、様々な任務に対応している。

ジム の 支援 機 I

簡易生産が可能な モビル・ポッド編

地球連邦軍のモビルスーツ生産は、宇宙世紀0079年11月以降戦場に集ったものの、地球圏全体の戦場を考えると、そのスピードは遅々としたものともいえた。そして、モビルスーツのバックアップ用として急速開発されたのが宇宙作業用スペース・ポッドを改良したRB-79ボールだ。これは、火力支援など機能に特化す

ればモビルスーツほどの性能は必要ないと割り切ったコンセプトの機動兵器だ。ゆえに台長戦などは苦手とするが、集約による集中運用によって、モビルスーツの絶対数の少なさを埋める活躍も。地球連邦軍の勝利に貢献した。その多様なバリエーションこそが、同機の重要さを表しているともいえるだろう。



RB-79M
フィッシュアイ



RB-79
ボール
(ツインアームタイプ)

ボールのバリエーション

原型機 宇宙作業用 スペース・ポッド



基本は作業機械の発展型といえるボールだが、派生機もそれなりの数がある。頭部脇の砲を装備したタイプや、水中用に開発されたタイプ、装甲強化型や機動性重視型など非常にバリエーションに富んでいる。意外とできるメカなのかもしれない。



RB-79
ボール (フィフティーン)
キャリバー装備



RB-79K
ボール (K型)



RGM-79 [E] 初期型ジム

謎多き初期型ジムとは？

RGM-79ジムは「機動戦士ガンダム」第1話「シャアロに敵する」で初めて登場している。この時はRX-78ガンダムと同時のビル・ライフルを携行していた。これは宇宙世紀0079年10月最終日の出来事であり、その時点でシャアロイではRGM-79ジムの生産は既済に達している。地球連邦軍のモビルスーツの存在が公になったのは、この11月頃であり、同月じめのオデッサ戦にも、少数のRGM-79ジムやRGM-79[G] 陸戦型ジムなどが投入されたといえる。

96年の「機動戦士ガンダム 第100話」の第1話では、また違うデザインのジムが登場している。これはRGM-79[E]と呼ばれる機体で、初期型ジムともいわれる。この時期には、東南アジア戦線でRGM-79[G] 陸戦型ガンダムなどがすでに実戦配備されており、地球連邦軍のモビルスーツは、徐々に戦線に投入されている。そうした流れともいえる時期に初期型ジムは登場したのである。

外見のデザインとしては、後期生産型と「ルナツー」モデルとも呼ばれる機体に酷似しているものの、細部は微妙に異なっているように見える。

この機体が確認されるのは宇宙世紀0079年10月初めのことであり、「ルナツー」の先行生産機が最終試験に近い試作機と見られる。また、型式の「E」は「実験機」を表す可能性もあり、前述の機体にながらうの試験結果が盛り込まれた可能性もある。

ジムの分類〔2〕

—後期生産型とは?—

初期生産型と呼ばれるモデルに続き、ここでは後期生産型といわれる「ジム」モデルをクローズアップしていこう。具体的な違いから細かい差異まで考えてみたい。



ルナツーモデルともいわれるC/E型系のジム

元来、兵器など短い間に大量に生産される機械は、その生産（開発）総量が推定とすることが珍しくない。そういった場合、各工場やメーカーなどで作りやうに形に多少の差異が生じ、結果的に性能や外見はほぼ同じながら、細かい部分が違った機体となるのだ。要するにシャッフルモデル（乱数生産型）といわれる機体がA/B型というサブナンバリングが与えられるのに対し、こちらにはC型が与えられている。

細かい部分の差異はまったく別ものといえる。これは一説によるとルナツーで開発、生産が行われた機体であるからとされる。

前ページで紹介したいわゆる「シャッフルモデル」のジムに比べ、その外見が大きく違うのが、ここで紹介している、いわゆるC型系列機、後期生産型のジムたちだ。

機種解説

後期生産型の特徴

- ・頭部形状の変化
- ・一連のバリエーション
- ・頭部装甲の完全分割化



いわゆるC型系の、後期生産型という名称は、A/B型（先行生産型）に対してという訳と、RGM-79 [E] 初期型ジムに対するものという2説がある。が、B型でははば所期の性能目標を達しているため、前者説は成り立ちにくい。初期型ジムと後期生産型はよく似ており、[E] 型はC型に対する先行生産機と考えた方が誤り力がある。近代化立修機であるRMS-179 RGM-79RジムⅡはA/B型がベースであると考えられ、C型系の生産数はA/B型よりも少ないのかもしれない。このC型系列には、寒冷地仕様のD型などのバリエーションモデルが存在する。ルナツーモデルであるはずのD型が地上に配備されているのは、不合理性も感じられるが、極地にある宇宙港守備用と考えるとと合点がいく。



〔 Back 〕

背部の最大の違いは、バックパック（ランドセル）の形状だろう。早期C型やOS型は別タイプのバックパックが採用されており、C型の大きな特徴かもしれない。



〔 Front 〕

いわゆるA/B型と各部が大きく違う。頭部の構成はタンゴードやパイザの形状、位置などが異なる。外部装甲も実際に共通点を探すが難しいくらいである。

多目的戦闘機 FF-X7Bst コア・ブースター



コア・ファイターに大気圏内外で活動可能なブースターユニットを装着した多目的戦闘機。メガ粒子砲2門を備え高い戦力を持つ。劇場版「ガンダム」におけるパイロット。

戦闘爆撃機 ジェット・コア・ブースター

コア・ファイターの機首部分を流用した戦闘爆撃機。ビーム兵器は搭載されていない。スマート爆弾を機体下面に搭載できる。



迎撃戦闘機 FF-X7Bst-II コア・ブースターII インターセプトタイプ



名前が示すようにコア・ブースターの迎撃仕様。防空戦目的のため、ブースターを流用し任務にあたる。ビーム兵器ではなく機関砲が主兵器。



ブースター装備無し



「機動戦士ガンダムMS IGLOO 1年戦争秘録」の漫画版に登場したゲム・カムフラージュ。ゲムはジムの機体はMS-06Zetaであるが、カムフラージュはMS-06Zetaではない。つまり、ジムに似た機体を模倣したものである。



ゲム・カムフラージュ

SPEC	
全高	17.9m
本体重量	51t
ジョイント出力	976kW
スラスター駆動力	47,600kg
武装	120mmマシンガン（連射機）、135mm対艦ライフル、シュツプルム・ファウスト、他
備考	手筒式シート装備

ジムの支援機 Part II

地球連邦軍の 航空兵器編

宇宙用の兵器としてのモビルスーツは、従来までの兵器戦術体系を根幹から覆す存在であった。

一方で地球上において、航空戦力の価値はまだある程度保たれていたといえる。それは、当時のモビルスーツには、また航空機ほどの速さで移動する展開能力は低く、機動性という意味で

は、十分に優位であったからだ。

それが、大口径メガ粒子砲を搭載可能なコア・ブースターの登場により、地球上においても宇宙においても航空機のような地位はあがっていった。

それが、一年戦争後、可変機やサブ・フライト・システムなどの登場を促すことになるのだ。

戦闘爆撃機 フライ・マンタ

地球連邦軍における従来型航空兵器の1つ。機体部分に30mm/54口径砲を計6門備える。機体下面に爆弾倉を持った汎用性の高い機体。



宇宙突撃艇 ハブリク

2基のミサイルを搭載した宇宙突撃艇。ビーム機乱暴戦艦を襲撃するため、作戦開始時、真っ先に戦場に投入される決死隊兵器といえる。



空間戦闘機 FF-S3 セイバー・フィッシュ



防空用高高度戦闘機 FF-6 TINコッド

コア・ファイターの派生機でもある戦闘機。運用そのものは一年戦争後のグリプス戦役期まで使用して配備されていた。

大気圏内外での運用が可能で高高度迎撃戦闘機。一年戦争後のグリプス戦役時でも、連邦軍の航空戦力の一翼を担っていた。

ジムの機体のサブナンバ付与の難しさ

RGM-79のサブタイプと、それに付与されるサブナンバーは極めて混沌としていえるようなもの。

そもそも「機動戦士ガンダム」の製作当時、型式番号などの細かい設定は、公式にはあまり考えられておらず、雑誌読者が勝手に付けたものが多いとされている。という例が多かった。しかし、いつかまでして、以後の作品ではある程度は当然で、機動戦士ガンダムはそれと違い、新しいサブナンバーが付与されるようになっていった。

そんな中で「RGM-79A」「B」などは「ガンダムF」の頃、関連企画である「MSV」と同じ流れの中で生み出されたものだ。この企画でジム・ライオン・アーマーはL型、スナイパー・カスタムはSC型、トレイナーはT型と、機能を表す漢字が付与されていた。これはジムに限らず「MSV」系機体の特徴で、機

動戦士ガンダムMS IGLOO 1年戦争秘録」の漫画版に登場したゲム・カムフラージュ。ゲムはジムの機体はMS-06Zetaであるが、カムフラージュはMS-06Zetaではない。つまり、ジムに似た機体を模倣したものである。

動戦士ガンダムMS IGLOO 1年戦争秘録」の漫画版に登場したゲム・カムフラージュ。ゲムはジムの機体はMS-06Zetaであるが、カムフラージュはMS-06Zetaではない。つまり、ジムに似た機体を模倣したものである。

動戦士ガンダムMS IGLOO 1年戦争秘録」の漫画版に登場したゲム・カムフラージュ。ゲムはジムの機体はMS-06Zetaであるが、カムフラージュはMS-06Zetaではない。つまり、ジムに似た機体を模倣したものである。

動戦士ガンダムMS IGLOO 1年戦争秘録」の漫画版に登場したゲム・カムフラージュ。ゲムはジムの機体はMS-06Zetaであるが、カムフラージュはMS-06Zetaではない。つまり、ジムに似た機体を模倣したものである。

動戦士ガンダムMS IGLOO 1年戦争秘録」の漫画版に登場したゲム・カムフラージュ。ゲムはジムの機体はMS-06Zetaであるが、カムフラージュはMS-06Zetaではない。つまり、ジムに似た機体を模倣したものである。

ジムの分類(3)

—最初期のジムとは?—

宇宙世紀における歴史と時間軸に照らし合わせると多少前後するが、ここでは最初期のジム系列機について考えてみたい。その出自と開発背景は、これまでのジムとは異なっている。



RGM-79 A/C系列とは別系統のRGM-79[G]陸戦型ジム

RGM-79[G]陸戦型ジムは、他のジム系列機と同じく、RX計画やV作戦の下達にある機体である。しかし、その出自は独特で、同じRGM系統とは、まるで別物といえる。

それは、この機体の登場前に少数生産されたRX-79[G]陸戦型ガンダムと強い関連があることと無関係ではない。陸戦型ガンダムは「ガンダム」の名を冠するが、実質的には量産機であり、陸戦に特化して再設計された機体である。陸戦型ジムは、その設計のほとんど、量産の部品の80%を陸戦型ガンダムと共通化が図られており、実質的に陸戦仕様モデルといえる。特筆すべきはルナ・チタニウム合金製の装甲材が採用されている点であり、カタログスベック上は、陸戦型ガンダムと並ぶものであるものの、実際的にはほとんど同一の機体といっていだろう。

機種解説



RGM-79[G] 陸戦型ジム

最初期のジムの特徴

- ・頭部センサーはゴーグル式だがバルカンは未装備
- ・装甲材はルナ・チタニウム合金製
- ・部品や部材の供給は不安定



RGM-79[G]陸戦型ジムが生み出された背景。それは地球連邦軍の反攻作戦が、宇宙ではなく地球上から始まったことと無関係ではないだろう。つまり、地球連邦軍のモビルスーツは、まず陸戦型から必要とされたということだろう。

そのためRX-79[G]およびRGM-79[G]は、本来宇宙兵器であるモビルスーツにもかかわらず、地上での運用に特化した仕様で開発された。だが初期のモビルスーツ運用が手探りの状態で、しかも地上戦専用ということで、戦術の可能性は高いと考えられる。一般配備型のモビルスーツ用部品としては高価で貴重なルナ・チタニウム合金を使用したのも、なるべく損失を避けたいという考えもあったのだろう。結果的に東南アジア戦線だけでなく、オデッサ戦でも投入され、「つなぎ」の機体としては成功したと見ていいだろう。



[Back]

[Front]

全体的に装甲に厚みを配られていかに見えるもの地上型であることも裏面していることだろう。実際に重量も他のRGMより重い。

胸部の冷却系の形状が変更されているのは、陸戦運用が前提の再設計と考えられる。ベースとなるRX-79[G]でも取り回しが違う。



主力戦車 61式戦車

地球連邦軍の主力戦車。遠征戦が特徴的な戦車車両だが、「ガンダム」登場以降は、作品製作ごとに登場の機会があると、その知名度がアップしているという形でアサップがされている。



『第08MS小队』版

より通用兵器の雰囲気でもリファインされた『08MS小队』版の61式戦車。戦車上部のキューポラ付近に機銃が装備されている。

『MS IGL002重力戦線』版

『08MS小队』版の61式戦車をベースにCG化が図られている。増設装甲部分には歩兵用の対MS兵器であるリグナが搭載できるようにになっている。



増加装甲なし

両側面部分の上面ライト部分の増加装甲を外したタイプも存在する。こちらは「ガンダム」版のデザインに近い形になるようである。



ジムの支援機 III

地球連邦軍の陸戦兵器編

地球連邦軍はモビルスーツを使用していなくとも、陸戦においてはジオン公国軍と膠着状態に持ち込むことに成功している。そういった意味ではモビルスーツ相手不利とはいえ、陸戦兵器は健闘している存在といえる。特に主力である61式戦車には様々なバリエーションタイプが確認されている。

地球連邦軍の陸上におけるモビルスーツという兵器は、決して万能ではなく、むしろ対ジオン公国軍モビルスーツ用装備に位置づけられた決戦兵器と考えられるべきだろう。それまで培ってきた兵器体系にモビルスーツが加わることで、ジオン公国軍を上回る兵器体系を構築することができたのだ。

ホバー・トラック(ブラッド・ハウンド)

地球連邦軍の戦闘車両の1つで、4基のキバーユニットで移動する。モビルスーツに準拠し、機銃による攻撃や支援を行う。時に移動式の戦闘指揮所としても機能する。ただし、モビルスーツとの直接戦闘には向かない。



『MS IGL002 重力戦線』版

全編でCGで描く『MS IGL002』は、地球連邦軍合に連邦軍主体の視点で展開される。登場するメカも当然CG化されている。



陸戦型ジムと陸戦型ガンダムの違いとは!?



名前こそガンダムだが、ジム系列の量産機に近い性格の陸戦型ガンダム。ただ、部品調達や整備性という点では、出目の特異性が影響を、満足いくものとはいえない。こうした点は同じ先行量産機の陸戦型ジムにも通ずる。



RX-79[G] 陸戦型ガンダム

SPEC

全高	18.0m
本体重量	52.8t
ジェネレーター出力	1,350W
スラスター総推力	52,000kg
装甲材質	ルナ・チタニウム合金

武装

腕部・バルカン砲、胸部マルチランチャー、ビーム・サーベル×2、100mmマシンガン、ビーム・ライフル、160mmキャノン、他

RG GM・79() 陸戦型ジムは、東南アジア地域においてRX-79() 陸戦型ガンダムとはほぼ共通の運用がなされていた。カタログスペック上は出力、推力ともにRX-79() 陸戦型ガンダムよりも若干劣るものであるが、同じ大規模で運用されたことを鑑みても、実用上はそれほど大きな差がなかったと考えられるだろう。実際、陸戦型ガンダムはRX-79() ガンダム製作時の命案パーツの一つ。半量産の型で設計された機体だったが、それが適用して作られた機体だったが、それが適用されたRX-79() ガンダムは、実際に機体として製造されたRX GM・79() に近い性能の機体だったと考えられている。その性能も初期生産型と呼ばれるジム(A型など)と比べ、出力は今では同等である。一方でビーム・ライフルを安定して使えないのも、同じ生産ラインで使われていた機体である。陸戦型ガンダムでも同様で、大出力のビーム兵器を搭載する際は、外部のエネルギーや冷却装置が必要となる。運用も特異なものとなった。陸戦型ジムは、いわば安定して運用できる数値にチューニングされた「ジオン」と考えられ、おそらくこの数値が、高機動に陸戦型ガンダムの過剰なカタログスペックと考えることもできるだろう。つまり、試作型・量産型ではなく、同じ生産ラインで使われていた機体に対して差を生まないのかもしれない。



ジムシリーズ カラー設定&イラスト ラインナップ

各項目の見方



1 MSのカラー設定のイラスト
2 MSの型式番号、名称
3 頭高(または全高)
4 各機体解説ページと同じ●の色で表している
5 本体重量
6 各機体解説ページと同じ●の色で表している
7 作品名: [2] のアイコンで表示
8 製品(プラモデル)の有無
9 [2] のアイコンで表示
10 紹介MSについての紹介
11 本誌機体解説ページで該当するMSは、ここにページ数を表記

このページでは、各ガンダム作品に登場したジムシリーズMSのカラー設定画ならびにイラストを掲載している。

基本的に映像作品を先にMSVやゲームなどの関連企画という順で並び、各製作年代順で収録している。各項目説明の[2]の[12]で示した作品タイトル名に続く(年)は、その作品が放送、公開、または

発売など展開された年号を表す。[3]は製品の有無を示す「[2]」で表示。これはプラモデル製品として製品化されているかを表す項目で、記載されている商品記号は以下のとおり、1 144、1、100はメカコレクションなどを含む通常商品のスケールモデルが該当する。実字表記はそれぞれブランドカテゴリを表し、HG

はハイグレード、LMLはリミテッドモデル、MGはマスターグレード、HGUCはハイグレードユニバーサルセンチュリーの略称。またプレミアムバンダイやガンダムフロント東京、ガンダムベース東京などで発売された限定アイテムなどの場合、それぞれ商品記号の後に (PB) (GFT) (GBT) と付記している。

002

RB-79
ボール

P.43

●12.8m ●17.2m

[2] 機動戦士ガンダム(79年)
[3] 1・144, HGUC(No.114), MG(Ver.Ke), MG(プロショップ限定品)

ジムの姉妹とちいえる支援型モデル・ボイド。上記のプロショップ限定品は10年に発売の、ガンダムマイスター(山口友巳氏のプロデュース作品(ファクトリーイメージガカラー))。

003

RGM-79SC
ジム・スナイパーカスタム (Zガンダム編)

P.44

●18.0m ●47.0m

[2] 機動戦士Zガンダム(85年)
[3] 1・144

[Zガンダム] では放送当時、多数のMSVのMSがゲストとして登場している。一機のアナライズで、バックゲイア成形色を定めたプラモデルもリリースされている。

001

RGM-79
ジム

P.42



●18.0m ●41.2m

[2] 機動戦士ガンダム(79年)
[3] 1 144, 1・100, HGUC(No.020), MG, MG(Ver.2.0)

連邦軍初の量産MS。作中「ガンダムの生誕タイプ」などと言われる。プラモデルなどは、ガンダムの後に発売される例が多いが、HGUCではこれが最初だ (ガンダムはNo.021)。



005



RGM-79D P.53 ジム寒冷地仕様

● 18.0m ● 44.7t

機動戦士ガンダム0080
ポケットの中の戦争(89年)
HGUC(No.038)

第1話冒頭でジオ公国軍サイクロプス隊と北極基地で戦った局地戦用機。戦場では一方的にやられていたが、唯一、アンディのハイゴッグを撃破するという金星を挙げた。

004



RGC-80 P.49 ジム・キャノン (Zガンダム版)

● 17.8m ● 49.9t

機動戦士Zガンダム(85年)
1/144

ジム・スナイパーカスタムと同様、「Zガンダム」内でジャブロー基地の防衛任務にあっていた。当時、MSVのイラストとは違う独特なカラーリングもファンの話題に上った。

007



RGM-79GS P.52 ジム・コマンド (宇宙戦仕様)

● 18.0m ● 44.6t

機動戦士ガンダム0080
ポケットの中の戦争(89年)
1/144, HGUC(No.051),
MG(PB)

作中での活躍シーンは、スカーレット隊降参に一端だが、17年の11月にはMGがリリースされた。ただしプレミアムバンダイの限定アイテムなので現在は発売されていない。

006



RGM-79G P.52 ジム・コマンド (コロニー戦仕様)

● 18.0m ● 43.5t

機動戦士ガンダム0080
ポケットの中の戦争(89年)
1/144, HGUC(No.046),
MG

宇宙戦仕様と比べると地味だが、「0083」のトリントン基地記念機と似ており、陸戦仕様の汎用量産機共通の機体カラーなのかもしれない。17年12月にめでたくMG化された。

010



RGM-79[G] P.55 陸戦型 ジム

● 18.0m ● 53.8t

機動戦士ガンダム第08MS小队(96年)
HG, MG, HGUC(No.202)

01年7月に発売のMS08隊は武器が豊富で、ロングレンジ・ビーム・ライフルも付属したが、オリジナルの陸戦型ジムと形状的な差はない。ただし、ロングレンジ・ビーム・ライフルの威力は絶大である。



008



RGM-79SP P.53 ジム・スナイパーII

● 18.0m ● 45.0t

機動戦士ガンダム0080
ポケットの中の戦争(89年)
HGUC(No.146), MG

作品展開時は製品化に恵まれなかったが、23年後の12年9月にはHGUCにおける「ボウゲ」シリーズのトリを飾り、5年後の17年1月にはMG化されるといって話題を呼んだ。

009



RGM-79[G] P.53 ジム・スナイパー

● 18.0m ● 53.8t

機動戦士ガンダム
第08MS小队(96年)
HG, MG

その名物は連邦軍における由緒正しい「スナイパー」を冠するが、オリジナルの陸戦型ジムと形状的な差はない。ただし、ロングレンジ・ビーム・ライフルの威力は絶大である。

012

RB-79K
ボールK型

P.54



● 12.8m ● 17.2t

① 機動戦士ガンダム第08MS小隊 (95年)

② LM, MG, HGUC (PB)

「08小隊」の発売当時、プラモデルも同時発売されているが、本機のみHGブランドではなくLMとして製品化。PB版は「IGL00」版のボールとのセット商品である。

011

RGM-79[E]
初期型ジム

P.54



● 18.0m ● 48.2t

① 機動戦士ガンダム 第08MS小隊 (95年)

② 無し

第1話でテリヤ・サンダースJr.が搭乗していた機体。製品化はされていないものの、「0083」のジム改をデザインのベースにしているため、製品を改造することで製作が可能である。

014

RGM-79
ジム ジャック・
ベアード機

● 18.0m ● 41.2t

① GUNBAM THE RICE -A BAOA Q-(01年)

② HGUC (会場限定アイテム)



書中にバズーカラックを背えるジャック少尉の機体。当時は会場限定のガンプラも発売されていた。HGUCジム2体とスルガのランチのセット。01年12月発売。価格は税別1800円。

013

RGM-79
ジム アダム・
スティングレィ機

● 18.0m ● 41.2t

① GUNBAM THE RICE -A BAOA Q-(01年)

② HGUC (会場限定アイテム)



富士島ハイランドのライドアトラクションに登場する。ジャック・ザ・ハロウィン部の機体。アダム部長の機体はガンダムと同様の、背中にビーム・サーベル2本を装備している指揮官タイプ。

016

RGM-79
ジム (EVOLVE版)

● 18.0m ● 41.2t

① GUNBAM EVOLVE../15 (07年)

② 無し



本作は「ガンダム 第39話」ニュータイプ・シャリア・プル」をCGでフルリメイクした作品で、登場メカの全デザインが刷新された。「GUNBAM EVOLVE../A」の映像特典用の新作。

015

RB-79
ボール (EVOLVE版)

● 12.8m ● 17.2t

① GUNBAM EVOLVE../11 (04年)

② MG (Ver Ka)



04年12月発売のMGボール (Ver Ka) とHGUC Gアーマーのキャンペーン用の機体が登場した。作品は「GUNBAM EVOLVE../A」に収録されている (07年1月発売)。

010

RB-79
ボール
(シャークマウス)

● 12.8m ● 17.2t

① 機動戦士ガンダムMS IGL00 1年戦争秘録 (04年)

② MG, HGUC (PB)



鯊の口状のマーキングが特徴的なボール。ガンダムシリーズを見渡してみても力強い機体という印象のボールだが、「IGL00」シリーズでは侮れない敵として描かれている。

017

RGM-79
ジム
(初期生産型)

● 18.0m ● 41.2t

① 機動戦士ガンダムMS IGL00 1年戦争秘録 (04年)

② 無し



「IGL00」シリーズの作品を隔した製品は少なくないが、作中登場するジムは「ガンダム」に登場するジムと同じ、という設定のためか、特定の製品は存在していない。

020



RGM-79C

ジム

(後継生産型)

● 18.0m ● 41.2t

機動戦士ガンダムMS IGLOO
指示録0079 (06年)

■ 無し

ジム改に似た形状のジム。「IGLOO」シリーズを通じて、作中における連邦軍の立ち廻る舞いは悪役そのもので、悪役パイロット (姿は見えない) も皆揃って口が悪い印象である。

019



RB-79

ボール

● 12.8m ● 17.2t

機動戦士ガンダムMS IGLOO
1年戦争総集 (04年)

■ MG, HGUC (PB)

「IGLOO」シリーズのボールのデザインは、「0083」に登場したボール (改修型) と似ており、メインアームにサブアームを備える4本脚仕様となっているのが特徴といえる。

022



RB-79

ボール

● 12.8m ● 17.2t

機動戦士ガンダムMS IGLOO
指示録0079 (06年)

■ HGUC (PB)

ボールK型のように頭頂部に連装キャノン砲を搭載したタイプ。ジオン公国軍の試作モデルボット、オゾとガンダム史上稀にみる、閉り合いの総関節を展開した機体でもある。

021



RB-79

ボール

● 12.8m ● 17.2t

機動戦士ガンダムMS IGLOO
指示録0079 (06年)

■ HGUC (PB)

機体にペイントされたトランプマークが特徴的。ただしMG版は未発売なので再現するには部隊マークやラインなどのマーキング類を自作、もしくはペイントする必要がある。

024



RB-79N

 水中型ボール
フィッシュアイ

● 14.1m ● 28.2t

※全長 テールラジエーター

機動戦士ガンダムMS IGLOO
603 (04年)

■ 無し

巨大な両腕のクロー・アームが特徴的な水中戦用機。「603」とは「IGLOO」展開時に「月刊ガンダムエース」(KADOKAWA)に連載されていたコミカライズ作品である。

023



RGM-79[G]

 陸戦型ジム
 (重力戦線版)

● 18.0m ● 53.8t

機動戦士ガンダムMS IGLOO2
重力戦線 (08年)

■ 無し

作品名を冠した連邦製品はないものの、陸戦型ジムのプラモデル自体はMGやHG、HGUCで製品化されているので、ノーマルのジムの腕と組み合わせることで再現は可能である。

026



RGM-79

ジム

(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

機動戦士ガンダム サンダーボルト 第1シーズン (15年)

■ HG (ガンダムサンダーボルト版)、
HG (GUNDAM THUNDERBOLT Ver.)

2種あるHGのプラモデルは、カタカナ表記がコミックス版、漢字表記はアニメ版である。どちらも基本仕様は同じだが、アニメ版は威風凛々な作品に合せて変更されている。

025



 ゲム・カモフ

● 17.9m ● 51t

機動戦士ガンダムMS IGLOO
603 (04年)

■ 無し

コミック「603」のゲストメカ。あまりにもジムに似過ぎているため、友軍から攻撃され大破してしまっただけで登場したジム・ゲファングナー・ゲムも同作品には登場している。

020



**RGM-79/GH
ガンダム・ヘッド**
(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

- 機動戦士ガンダム サンダーボルト
第1シーズン(15年)
無し

まだ製品化はされていないが、陸戦型ガンダム5号とジムのプラモデルをコイデで改造すれば、なんとかなりそうではある(それでも手を加える必要はありそう)。

029



**RB-79
ボール**
(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

- 機動戦士ガンダム サンダーボルト
第1シーズン(15年)
1/144(※コミックス限定付録)

プラモデルは単品発売ではなく、コミックス第3巻の限定版に付属していた(14年2月)。ランナー数は5枚で成形色による色分けがされ、ホイルシールが付属している。

031



**RGM-79[M]
水中型ジム**
(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

- 機動戦士ガンダム サンダーボルト
第2シーズン(17年)
無し

パッと見は『サンダーボルト』版のアタラジムといったところで、用途も同じく水中戦用ではあるが、本機の特徴、顔はジムのままだというのが特徴といえるだろう。

032



**SRF-06
ダーレ**
(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

- 機動戦士ガンダム サンダーボルト
第2シーズン(17年)
無し

南洋同盟が使用するMS。道阿軍やジオン公団軍のMSのパーツを寄せ集めて作られている。あくまで数合わせの機体といえ、「やられメカ」という位置付けで考えるとジム的。

027



**RGC-80
ジム
キャノン**
(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

- 機動戦士ガンダム サンダーボルト
第1シーズン(15年)
無し

本機はジム同様、緊急脱出用にコア・ブロック・システムを備える。形状やカラーリングはオリジナルのMSV版を踏襲しているが、キャノンはバックパックに装備されている。



030



**RGM-79C[G]
ジム改陸戦型**
(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

- 機動戦士ガンダム サンダーボルト
第2シーズン(17年)
無し

陸戦中のアトラスガンダムに代わって、主人公のイオ・フレミングが搭乗していた機体。南洋同盟国境守備隊と激しい戦闘を繰り広げた。残念ながら製品化はまだされていない。

031



**RB-79[M]
水中型ボール**
(サンダーボルト版)

● 不明 ● 不明

- 機動戦士ガンダム サンダーボルト
第2シーズン(17年)
無し

宇宙戦用のボールを水中戦用に改修した機体。形状も細まってバリスカフ(深潜艇)っぽく変えている。掲載しているカラー設定画は左のアームをオミットした状態である。

033



RGM-79SC ジム・スナイパー カスタム

● 18.0m ● 47.0t

■ MSV=モビルスーツ
バリエーション(82年)
■ 1/144.MG

ガンダムに匹敵する能力を有するエース専用機。17年11月にはMGが発売されているが、実勢ともいえるMG化に対してファンは熱めきったとか、たまたまだったとか……。

034



RGM-79L ジム・ライト アーマー

● 17.8m ● 36.8t

■ MSV=モビルスーツ
バリエーション(82年)
■ 無し

ジム・スナイパーカスタムと並ぶ連邦軍のエース専用機だが、方向性はかなり異なる。プラモデルでもジムを流用することで両機できるとか、機体色のオレンジなどは厳禁がましいらしい。

036



TGM-79 ジム・ トレーナー

● 17.8m ● 40.5t

■ MSV=モビルスーツ
バリエーション(82年)
■ 無し

コクピットは操縦席で教官は外の確認のためガラス張りのシートに重座するというが、死角も多そうである。教習車のように教官用ブレーキなどを備えているのだろうか？

038



RGM-79F デザート・ジム

● 18.0m ● 44.7t

■ M-MSV=大河原邦男
コレクション(90年)
■ HG(ガンダムサンダーボルト版)、HG
(GUNDAM THUNDERBOLT Ver.)

陸戦用ジムと共に本機は、ジム・ストライカーのベース機である。だが、派生機(ジム・ストライカー)はすでに製品化されているのに、両機とも未だプラモデル化はされていない。

035



RGC-80 ジム・キャノン

● 17.8m ● 49.9t

■ MSV=モビルスーツ
バリエーション(82年)
■ 1/144.MG(PB)

ガンキャノンが開発ベースだが、本機に装備しているのは240mmロケット砲である。最初のキット化から32年後の15年8月には、MG版がプレミアムバンダイで発売された。

037



RGM-79F 陸戦用ジム

● 18.0m ● 48.2t

■ M-MSV=大河原邦男
コレクション(90年)
■ 無し

九州筑前などに投入されたジムの派生機。よく陸戦型ジムと誤同されることもあるようだが、そもそもの開発経緯が異なる点には注意したい(詳しくは本誌8ページの系統図)。



040



RAG-79-G1 P.51 水中型ガンダム

● 18.3m ● 47.7t

① M-MSV = 大河原邦男コレクション (90年)

② 無し

M-MSVからの製品はないものの、「ガンダム THE ORIGIN MSD」(オリジナルMSV企画) 版の水中型ガンダムが16年10月にHG製品として、プレミアムバンダイで発売されている。

039



RAG-79 P.50 アーク・ジム

● 18.0m ● 49.5t

① M-MSV = 大河原邦男コレクション (90年)

② 無し

06年に展開されたハーモニー・オブ・ガンダムや10年の「ガンダムUC」などでリメイクされ、ゲームやプライズ製品などにはなっているものの、プラモデル化にはなっていない。

042



RX-79BD-2 P.57 ブルーディスティニー 2号機

● 18.5m ● 52.8t

① 機動戦士ガンダム外伝 THE BLUE DESTINY (96年)

② HGUC (No.077)、HGUC (No.208)

ゲーム中のタイプ、ニムバス・シュターゼンに搭載されるEXAM搭載機、1号機同様に2度HGUC化され、最新版のNo.208にはニムバス機再現用の古い鋼パーツも付属。

041



RX-79BD-1 P.56 ブルーディスティニー 1号機

● 18.5m ● 52.8t

① 機動戦士ガンダム外伝 THE BLUE DESTINY (96年)

② HGUC (No.080)、HGUC (No.207)

96年に発売されたセガサターン用ゲームソフトの主人公機。HGUCでは07年と17年の2度にわたって商品化されている人気機種の1つ。ただし、まだMG化はされていない。

044



RGM-79 ジム (ジオニックフロント版)

● 18.0m ● 41.2t

① ジオニックフロント 機動戦士ガンダム0079 (01年)

② 無し

「ジオニックフロント」はPS 2用ソフトとして発売 (リアルタイム戦略シミュレーション) された、ジオン公団軍視点で展開されるのゲームをはじめ連邦系MSは船として登場。

043



RX-79BD-3 P.57 ブルーディスティニー 3号機

● 18.5m ● 52.8t

① 機動戦士ガンダム外伝 THE BLUE DESTINY (96年)

② HGUC (No.082)、HGUC (No.209)

ゲーム後半における主人公機。機体色は同じブルーでも機体形状と異なる点などは、予備機で塗装が間に合わなかった、という設定による。ジムというよりガンダムに近い機体。

045



連邦軍機仕様

RGM-79F 装甲強化型ジム

● 18.0m ● 41.2t

① ジオニックフロント 機動戦士ガンダム0079 (01年)

② 無し

ジム軍機仕様と同時期にロールアウトしたといわれる機体。上半身を中心にリアクティブ・アーマーで装甲強化を図り、新推進システムの採用によりホバー移動が可能である。



ノーマル時

ボールを改造した攻撃用ユニットを取り外した状態。コクピットは実は機庫式で操手と搭手がいる。

NT試験用
ジム・ジャグラー

① 不明 ② 不明

SDガンダムG GENERATION (98年)

③ 無し

「G GENERATION」はプレイステーション (PS) 用ソフト (シミュレーションゲーム) で、本機はそこに登場するオリジナルのMSだ。別名、ニュータイプ試験用ジム。

RGM-79U
ジム・スループ

① 18.0m ② 67.3t

③ MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)
④ 無し

背面にセンサーポッドと水流エンジンを備えた水中用ランドセル (アーク・バック) と脚部のパラスタングというオプション類を装着した水中戦闘機。ソナー・ガンを装備する。

RGM-79FP ① P47
ジム・
ストライカー

① 18.0m ② 50.2t

③ ハーモニー・オブ・ガンダム (06年)
④ HGUC (No.072)

ゲームやプラモデルなどを中心としたデザイン企画「ハーモニー・オブ・ガンダム」で設定された機体。ツイン・ビーム・スピアという自兵装用装備が特徴的な局地戦闘機である。

RGM-79HC
ジム・
ガードカスタム

① 18.0m ② 90.0t

※ ガーディアンシールドが含む

③ MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)
④ 無し

米軍の防衛任務用に開発された特殊機。専用装備のガーディアン・シールドはMS本体は2枚あり、狭いには熟練を要する。ビーム・ダガーやE2ビーム・スプレーガンを装備する。

RGM-79SC
ジム・スナイパー
カスタム (シモダ小隊仕様)

① 18.0m ② 51.7t

※ ミサイルランチャー含む

③ MSV-R=モビルスーツバリエーションR (09年)
④ 無し

ミサイル・ランチャーを装着したジム・スナイパーカスタム。搭乗者はシモダ小隊隊長のハジメ・シモダ。背中のランチャーは陸戦型ジムなどが用いたものの改造タイプ。



フェロウ・ブースター装備時

RGM-79KC
ジム・インターセプト
カスタム

① 18.0m ② 43.0t

③ MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)
④ 無し

ジム・スナイパーカスタムとは形状の異なるバイザーが特徴。大気圏内用コルベット・ブースターをベースに開発されたフェロウ・ブースターを装備し迎撃任務にあたる。とされる。

052



RGM-79LV ジム・ナイトシーカーII

● 18.4m ● 42.3t

MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)

□無し

ジム・ナイトシーカーのベースはジムだが、本機はジム・ライトアーマーをベースに開発された。スラスター類は脱臼に応じてバジできるように爆発ボルトで留められている。

052



RGM-79V ジム・ナイトシーカー

● 18.0m ● 46.7t

MSV-R=モビルスーツバリエーションR (09年)

□無し

重要地点の施設破壊や奇襲作戦といった特殊任務のために開発された機体。全身をランドセルに装備したスラスターの推進力で、最高3,000mより降下が可能だとされる。

054



RGC-80 プロトタイプジム・キャノン

(ジム・キャノン2号機)

● 不明 ● 不明

MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)

□無し

機体そのものの詳細は不明だが、その外観形状からもジム・キャノンで採用されている脚部装甲の試験機も行われたと思われる。この時点で完成している機は2機のままである。

053



RGC-80 プロトタイプジム・キャノン

(ジム・キャノン1号機)

● 18.0m ● 48.9t

MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)

□無し

ジム・キャノンの試作機。両面に300mmロケット筒を備え、頭部ユニットはガンキャノンタイプなのが特徴である。また背部的ユニットはブロック構造となっている。

054



RGC-80S ジム・キャノン

(空軍突撃仕様)

● 18.0m ● 44.9t

MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)

□無し

連邦宇宙軍・第一連合艦隊のサラミス級29番艇アイガーに配備されていた、142MS以降所産機。制式採用の赤ではなく黒色のカラーリングでまとめられている。

055



RGC-80S ジム・キャノン

(空軍突撃仕様)

● 18.0m ● 44.9t

MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)

□無し

ア・バオア・クー戦にも投入されたジム・キャノンだが、一部の機体は仕様が異なり、脚部の分割式装甲を廃して、スナイパーカスタムと同型のスラスターを装備したという。

056



RB-79F ボールF型

● 12.8m ● 21.5t

MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)

□無し

カートリッジ式プロペラントタンクを備えたスラスターユニットをランドセルとして装備し、コックピット周辺の装甲強化を図ったボールの強化型。別名、ボール追加装甲タイプ。

057



RB-79M ボールM型

(機体散布ボッド装備型)

● 14.1m ● 32.6t

MSV-R=モビルスーツ
バリエーションR (09年)

□無し

ボールの戦術運用を見直すために開発された。機体散布用のボッドを装備したタイプ。機体両翼の展開式翼面ボットのコンテナ内には、合計48基の機雷の搭載が可能であった。

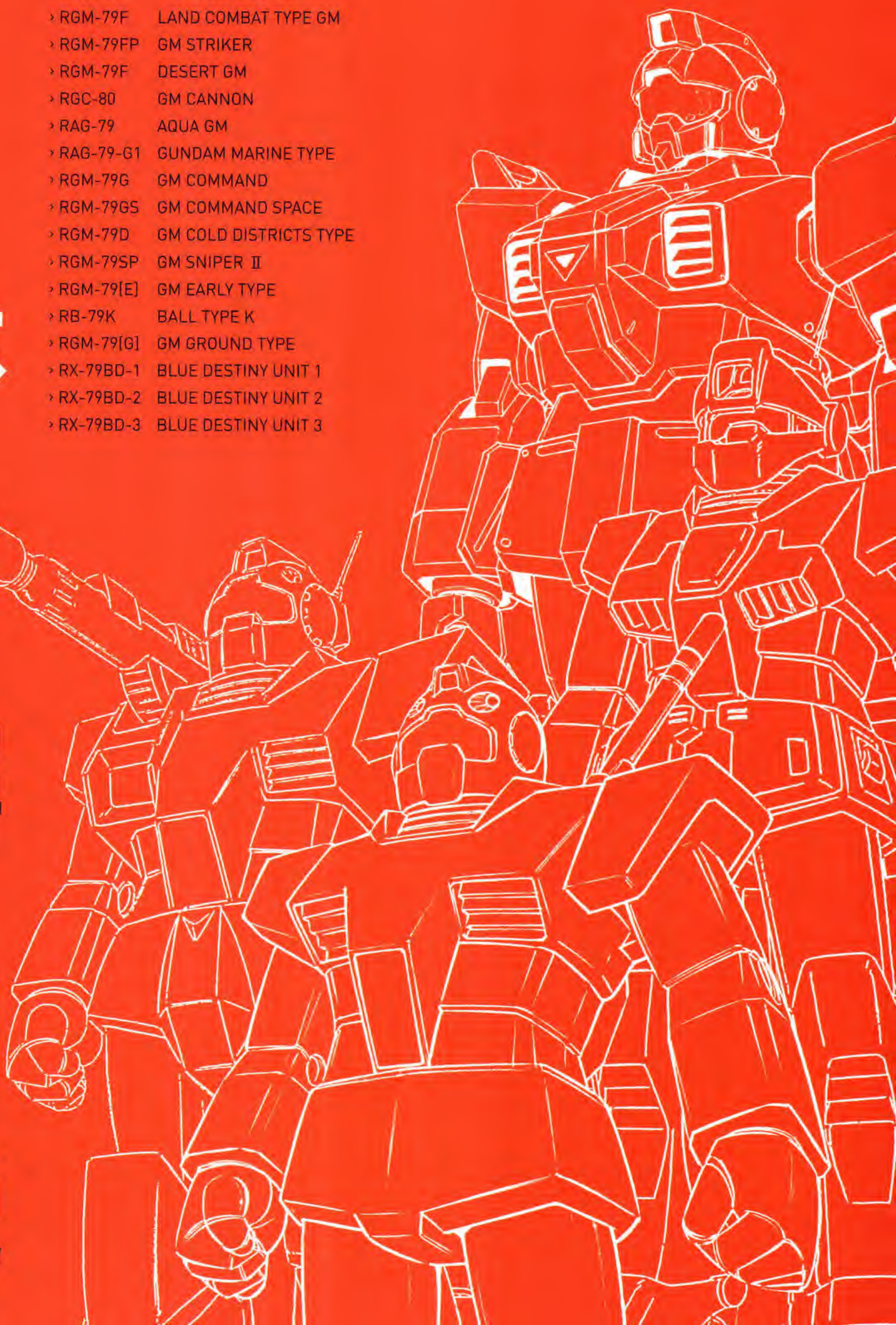
機

体

解

説

- ▶ RGM-79 GM
- ▶ RB-79 BALL
- ▶ TGM-79 GM TRAINER
- ▶ RGM-79 GM SNIPER CUSTOM
- ▶ RGM-79L GM LIGHT ARMOR
- ▶ RGM-79F LAND COMBAT TYPE GM
- ▶ RGM-79FP GM STRIKER
- ▶ RGM-79F DESERT GM
- ▶ RGC-80 GM CANNON
- ▶ RAG-79 AQUA GM
- ▶ RAG-79-G1 GUNDAM MARINE TYPE
- ▶ RGM-79G GM COMMAND
- ▶ RGM-79GS GM COMMAND SPACE
- ▶ RGM-79D GM COLD DISTRICTS TYPE
- ▶ RGM-79SP GM SNIPER II
- ▶ RGM-79[E] GM EARLY TYPE
- ▶ RB-79K BALL TYPE K
- ▶ RGM-79[G] GM GROUND TYPE
- ▶ RX-79BD-1 BLUE DESTINY UNIT 1
- ▶ RX-79BD-2 BLUE DESTINY UNIT 2
- ▶ RX-79BD-3 BLUE DESTINY UNIT 3



機体番号

ボール

ジムに先行して実戦配備された
モビル・ボット

作戦用スペース・ボットをベースに開発された支援用モビル・ボット。基本的な武装は後述の配備のキャノン砲のみで、集団運用による機動力は備わらない。とはいえ本機がもつMSの数々を撃つ前線での役割は重要な機体であり、本機はMSとの白兵戦などは想定されていない。

たゞ、既存の製造インフラの運用が容易であるよりも初期開発で配備が可能だったため、多くの機体が実戦投入されている。一例、本来の運用からかけ離れた任務を行う機体も存在しているが、これらは活用している。地球連邦の初期によるものと思われる。戦後にも作戦用機といえる出動を遂げ、一部の機体は運用されている。

「ガンダム」(第1話)「ソロモン攻防」のソロモン戦で初登場した。ジムと連携して白兵戦を展開していた。

【所属】	地球連邦軍
【開発年代】	U.C.0079~0080
【全高】	12.8m
【全幅】	17.2m
【重量】	400t
【武装】	キャノン砲



特殊機

機体番号

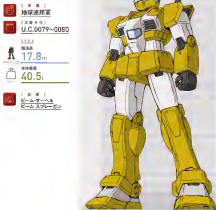
ジム・トレーナー

MSパイロット育成用の
複座式練習機

MSの実戦配備を急ぐ地球連邦軍にとって、MSパイロットの育成は急務であった。TQM(29ジム・トレーナー)は、そうした急務を克服すべく開発された訓練機だ。基本構造は旧GM・29ジムをベースに、複座式やコクピット周りを広く拡張された。教官用コクピットは後述のとおり、教官用コクピットは旧GM・29ジムのコクピットに改造された。教官用コクピットは旧GM・29ジムのコクピットに改造された。教官用コクピットは旧GM・29ジムのコクピットに改造された。

「月刊コミックボンボン」のMSV関連の記事や、84年に刊行された『ザ・ガンダム・シネマ』(講談社)にイラストやプロフィールなどの掲載された。

【所属】	地球連邦軍
【開発年代】	U.C.0079~0080
【全高】	17.8m
【全幅】	40.5m
【武装】	ビームサーベル ビームスプレーガン



ジム・スナイパーカスタム



【 出 産 】
地球連邦軍



【 活躍年代 】
U.C.0079~0087



【 高 さ 】
18.0m



【 本 体 重 量 】
44.2t



【 主 要 材 質 】
チタン系合金



【 武 装 】
ボックスライフル・ビーム
サーベルユニット
R-4ライフル・ライフル
ハンドビーム・ガン
機



variation

ガーディアン・
シールド



RGM-79HC
ジム・ガードカスタム

ジム・スナイパーカスタムをベースに防衛の強化に重点を置いたタイプ。実戦では少なくとも一機一機に配備した大規模なカーティアン・シールドが特徴。

エースパイロットの 要望に応えた強化タイプ

地球連邦軍にとって初の本拠地といえるRGM-79ジムの配備は、すべてが固調というわけではなかった。特に高機動のパイロットたちからは機体性能への不満も多く、思案では改善案が次々と出ていたという。

RGM-79HCジム・スナイパーカスタムは、そうしたパイロットの要望を受けて開発されたエース専用機といえる。主として改修は後部装甲による防御力の強化、大型スロスタール搭載ランダムによる推進力の向上、火力の増強などが挙げられ、また仕様が従来の希望に応じてカスタムできる柔軟性を備えていた。

中でもシールド・出力を強化し、R4タイプ・ビーム・ライフルを携帯する地球連邦設計製を可能とした機体は、新機型とも呼ばれ、本機の名前の由来にもなっている。

「ガンダム」より後発のMSV世界の機体ではあるが、85年の「機動戦士ガンダム」では、ゲストメカとして登場した一機12機。

【エース専用機】

機体番号

ジム・ライトアーマー



【所属】
地球連邦軍



【生産年代】
U.C.0079~0080

SPEC



総高
17.8m



本体重量
36.8t



ジェネレーター出力
1,250kW



【装甲材質】
チタン系合金



【武装】
ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
ビーム・スプレーガン



VARIATION



RGM-79V
ジム・ナイトシーカー

開発と製造にスラスターとプロペラントを増設し、重量は6000kgから空陸機下が可能となる機体型。開発製造機と見做しとする特殊部隊に配備された。

軽量化により高機動力を得たカスタム機

本機は、エース専用機というカテゴリーにおいては、RGM-79SCジム・スナイパーカスタムと同様だが、目録した方向性は大きく異なる機体という。それは機体的な軽量化による高い機動性の機体である。これをより具体的に挙げて、「とにかく速く動く」が機体の特徴である。が基本なので、機動に不向きな機体板の構造、主要部品の厚手の軽量化、構造などの変更等を行っている。それにより機体は「ビーム・ライフルは、バスターガンと同様の出力タイプであった。一見すると標準で致命的な弱点を有く機体だが、駆動機構から軽量化のバリエーションは幅広く、高出力の火線と高い機動性を活かした一撃必殺戦術で多大な効果を上げたパイロットも少なくない。MSVにおける連邦軍エース専用機の代表ともいえる本機だが、ジム作戦での露出度の多さに比べ、軽量化の機体には見えていない。

陸戦用ジム



〔所属〕
地球連邦軍



〔生産年代〕
U.C.0079~0080

スペック



標準高
18.0m



本体重量
48.2t



全備重量
61.5t



ジェネレーター出力
1,250kW



スラスター総推力
53,800kg



センサー有効半径
6,100m



〔装甲材質〕
チタン・セラミック複合材



〔武装〕
ビーム・サーベル
ビーム・スプレーガン
レールキャノン



COLUMN

専用レールキャノン



専用ビーム・スプレーガン

専用レール・キャノンは電磁軌道による加速で弾丸を射出する大銃なので、ハイパー・バズーカと似た形状だが、射撃システムそのものが異なる。

欧州戦線で戦った装甲を強化した陸上戦用機

R.G.M. 99ジムをベースに陸戦用の強化改修を施したタイプ。主にヨーロッパ半島を中心と配備された機体である。よく東南アジア戦線などに投入された先行量産型のR.G.M. 79Ⅱ「陸戦型ジム」と区別されるが、本機はまったく別の機体である。

主を改修点として、市街戦戦況は上半身の軽率が高いため、オウリスの設計を中心とした装甲強化に重点が置かれている。これにより前線軍が低下し、パイロットの生存率は向上したという。進行する火器は、レール・キャノンやオリジナルとは形状が異なるビーム・スプレーガンなど、専用武装が搭載されている。

また本機をベースに陸戦戦用機や近接戦闘型のタイプが開発されている。初出は『D.C.L.U.Ⅲ(バンダイ)』陸上に搭載されていた「モビルスーツコレクション 大規模戦術兵器M.S.近接戦闘型」で、後にはこの連戦のモーション・モデル・スーツ・パリエーション・M・MSVと改称されるようになった。

デザート・ジム



【所属】
地球連邦軍



【活動年代】
U.C.0079~0080



【身長】
総高
18.0m



【重量】
本体重量
44.7t



【重量】
全備重量
59.5t



【出力】
ジェネレーター出力
1,250kW



【推力】
スラスター総推力
57,800kg



【センサー】
センサー有効半径
6,100m



【主材料】
チタン・セラミック複合材



【武装】
ビーム・サーベル
ビーム・スプレーガン
シールド
バズ



COLUMN



ミサイルポッド
装備レールガン



専用ビーム・
スプレーガン

ベームスライダは制動用ジムとは、機動するが
制動は両腕のバズで制動され、その制動も
大きく異なる。おそく使用する機動も
考慮して仕込まれたのだろう。

リアクティブ・アーマーを装着した 砂漠戦に対応した陸戦用ジム

R.G.M. 79F 陸戦用ジムと同じ型
式番号を持つが、本機は砂漠地帯で
の運用を想定した局地戦用機だ。
まず、装甲による抗弾性を重視し、装
甲を強化した陸戦用ジムだった。ア
フリカや中東戦線などの砂漠戦を
主体とする戦場では不具合も多かつ
た。そのため機動性の低下を防ぐた
め改良を施したのがR.G.M. 79Fデ
ザート・ジムである。主な仕様変
更点として、機体各部にシーリングを
施して、密閉空間を形成し口部に防
塵フィルターを設けている。
また、機体各部の増加重量部分には
リアクティブ・アーマーを装備する。
いわば、陸戦用ジムの砂漠版パンケ
ーグといえる機体だが、一つした選
択案そのものは決定だったようだ。
自衛隊用のR.G.M. 79Fジム・ス
トライカーなどにも採用されている。
90年に開発されていたM・MSV
出身の機体であり、06年に公開され
たジム・ストライカーの基デザイン
となった機体でもある。

ジム・キャノン



地球連邦軍



U.C.0079~0087

SPEC



標準高
17.8m



本体重量
49.9t



ジェネレーター出力
976kW



スラスター総推力
63,500kg



（装甲材質）
チタン系合金



（武装）
バズカン砲
252mmキャノン砲
ビームスラッシャー
ビームライフル



variation



RGC-80S

ジム・キャノン（空襲突撃仕様）

ジム・キャノンの中距離仕様。前線機知能機（カウランナーユニット）を併せ、前線スラスターは50型と旧型のものを装備し強化されている。

ガンキャノン量産化計画から 予定変更で誕生した機体

地球連邦軍のV作戦による、RX-78ガンダムの量産計画は前線中距離支援用機RX-77ガンキャノンの量産化も予定されていたという。しかし量産計画そのものは断念し、一部はRX-X、77Dガンキャノン量産型として実装配装されたが、結局、量産計画は破産し消滅したといわれるものでなかった。そこで実装配装が完了したRX-X、77Dをベースに開発されたのが本機である。試作機では前部のキャノン砲は2門だったのが、実用化に際して4門に増強されたといわれている。またジムとの部品互換率は60%で生産性も考慮されていた。ただ、こうした計画変更の影響は少なからずあり、量産の配備は一年戦争の末期で、北米やアフリカ戦線に投入されたが、生産数そのものは少なかったといわれている。

RX-80Vの一種として、機首「2」ガンダム」のゲストメカとして出現した際、全高25mのカウランナーが装備し、ファンを大いに声高わせた。

アクア・ジム



地球連邦軍



U.C.0079~0080

SPEC



総高
18.0m



本体重量
49.5t



全機重量
64.3t



ジェネレーター出力
1,280kW



スラスター総推力
8,950kg



センサー有効半径
4,300m



装甲材質
チタン・セラミック複合材



光束バズカミ4
魚雷×2
ミサイル×2
ハーブーンガン
1機



COLUMN



ミサイル・ランチャーガン

水中戦ではミサイルよりも、射撃ミサイルや魚雷といった遠距離兵器が有効である。そのため本機は、水中戦に特化した武装を装備している。

ジオン公国軍の水陸両用機に 対抗すべく造られた長寿機

地球連邦軍が開発した水陸両用機。ジオン公国軍の水陸両用MSに對抗すべく作られたが、性能面では劣るため、沿岸警備や艦艇射撃（潜水艦）への攻撃などに用いられたという。その経緯として、説明をしよう。とやべえ機師のRGM-79ジムの性能面から考えられるが、対するジオン公国軍の本機は半田ゆえはじめから必要最低限の能力を付与するに止まったと考えられる。

U.C.0079年において本機は運用されており、開発経緯はともかく、機体の基本性能は満たしているという点でどうも、制空の敵も射撃の機体で十分対応可能、という連邦軍の姿勢も窺える。それゆえに相手機が機体を運用した場合は、対抗しきれないのは明白である。

「ガンダムUC」では、そんな経緯が現実となっている。巨大な制空、AMX-Xアッシュロウの機では、あえなく降参して撃破されている。

水中型ガンダム



地球連邦軍



U.C.0079~0080

SPEC



総高 **18.3m**



本体重量 **47.7t**



全備重量 **58.5t**



ジェネレーター出力 **1,330kW**



スラスター総推力 **9,670kg**



センサー有効半径 **4,600m**



チタン系合金



ビームマシンガン
水中型専用ビーム・ライフル
磁気式バーベーンガン
魚雷



COLUMN

水中型ビーム・ライフル



ライフル・カバー

ビーム兵器の携行については遠征隊の機動力は高く、水中型の用はビーム・ライフルでもその性能は劣化している。また使用時には魚雷カバーを装備する。

見た目を“ガンダム”にした アクア・ジムの改修型

水中型は、通常「機動戦士ガンダムUC」時代の機体として認識されている。しかし、いくつかの作品に登場しているものの、映像作品には登場していない。だが、バンダイのガンダム、HGシリーズでは「機動戦士ガンダムTHE ORIGIN MSD」版の機体として製品化も果たしている。

近世では、通常「機動戦士ガンダムUC」時代の機体として認識されている。しかし、いくつかの作品に登場しているものの、映像作品には登場していない。だが、バンダイのガンダム、HGシリーズでは「機動戦士ガンダムTHE ORIGIN MSD」版の機体として製品化も果たしている。

水中型においては十分な性能を発揮したと賞賛され、性能向上を果たしたエース専用機。外見、特に頭部はコールド式センサーながらもガンダムタイプを使用し、機体の性能も強化されている。

ジム・コマンド (コロニー戦仕様) 土

“新時代のジム”を體現した ニュースタンドモデル

本機は、地球生産型へもしくはコロニーと称される系統に属する。ジム本来の性能を保持すべく開発された地球連邦軍の量産MSである。そのため細部はジャブローで生産された系統の機体と異なり、性能も向上している。装甲材はタン・セラミック複合材だが、推力やジェネレーター出力は旧X・マカランダと同等以上の水準を持つ。

一年戦争後期は、主戦場が宇宙へと移り、ジオン公団軍とコロニーを巡る戦動の増加が見られ、本機はそれを想定し、コロニー内戦向けの仕様となっている。そのため大威力のビーム兵器系統ではなく、実体弾のマシンガンが主体である。

作中では、中立のはずのサイド6、リゾー・コロニーに配備され、調整して来たジオン公団軍のMS部隊と戦ったが、あまり活躍できず出番は少ない。

	【新機】 地球連邦軍
	【機体番号】 U.C.0079~0080
	【パイロット】 無設定 18.0m
	【燃料容量】 43.5t
	【全重量】 56.4t
	【シャシ・ターボ出力】 1,330kW
	【スラスター総出力】 67,000kg
	【センサー総出力】 6,000m
	【装甲材質】 タン・セラミック複合材
	【武装】 40mmバズーカ・機内爆弾・ビームサーフ・ヘルバ・ブレイブマシンガン



ジム・コマンド (宇宙戦仕様) 土

宇宙空間での戦闘用に 最適化を加えたモデル

RGM-79Gジム・コマンドと異なるところ、本機は宇宙空間での戦いを主眼に設計された構造の仕様の機体である。

そのため、ランドセルやスタスターは強化され、推進剤タンクの容量も増設、ジェネレーター出力もコロニー戦仕様から10%増の向上しており、ビーム・スプレッドではなく専用のビーム・ガンを行き、作中では、M5V1とゲルググ

	【新機】 地球連邦軍
	【機体番号】 U.C.0079~0080
	【パイロット】 無設定 18.0m
	【燃料容量】 44.6t
	【全重量】 75.0t
	【シャシ・ターボ出力】 1,390kW
	【スラスター総出力】 74,000kg
	【センサー総出力】 6,000m
	【装甲材質】 タン・セラミック複合材
	【武装】 40mmバズーカ・機内爆弾・ビームサーフ・ヘルバ・ブレイブマシンガン



とM5V1とゲルググとを対峙させ、コロニーを襲撃し、リゾー・コロニー周辺で戦動を繰り返した。しかし、ジオン公団軍のMSに圧倒されて、ほぼ「一歩引退」に追い込まれた。機内にジム・コマンドのスペックは旧X・マカランダに勝るとも劣らないのだが、ゲルググやリゾー・ドムは、それ以上の性能（特に推力関連）だったため、やむを得ない部分もある。

局域戦用機

機体カラー

ジム寒冷地仕様

寒冷地仕様は量産機 ならではのバリエーション？

本機をはじめとする寒冷地等にある地球連邦軍基地で運用される局地戦用機。本機のベースは、ルナツー製「ジム」であり、ゆるぎない性能ととも呼ばれる。ルナツーモジュールである「寒冷地仕様」というものの具体的内部構造は不明だが、バフテリーの大型化や寒気遮断防止用カバーの設置、凍結防止の改造などが主だったとみられる。

多い環境ゆえの配慮で、土気質は実稼働の費用マージンを減らす。『機動戦士ガンダム0080』ボクノトの中の戦争「第1回の冒険」で、サイクロプス隊との死闘を演じる。「一方に倒れるばかりの軍備はつながらず、唯一、シャトルの打ち上げで中止した機体があった。たゞ、シャトルの機体が倒れて、その後の被害は不明だが残存したとみえる。

【機体】	地球連邦軍
【所属】	U.C.0079~0080
【サイズ】	全高 18.0m
【重量】	全機重量 44.7t
【動力】	全機出力 58.7t
【武装】	ガンダム・ガンダム
【性能】	1,250kW
【防御】	60,000kg
【移動】	5,790m
【材料】	チタン・セラミック複合材
【備考】	6mmバズーカ砲、ビームサーベル、電撃マイン



高機動型特殊機

機体カラー

ジム・スナイパーII

ガンダム越えを望もう？ ジムベースの高性能機

後継機「ジム」をベースに、RGM-79Gジム・スナイパーIIのコンモットを反映させたモデル。高機動、長射程のビーム兵器やそれに伴う高機動射撃用センサーおよび高機動率の強化、機体各部へのスラスター増設、機体の向上による高機動化が図られている。性能面ではE.M.X.IIがガンダムを超越し「ガンダムを超えたジム」といえる。一方、コストは比

【機体】	地球連邦軍
【所属】	U.C.0079~0080
【サイズ】	全高 18.0m
【重量】	全機重量 45.0t
【動力】	全機出力 61.0t
【武装】	ガンダム・ガンダム
【性能】	1,390kW
【防御】	102,000kg
【移動】	8,700m
【材料】	チタン・セラミック複合材
【備考】	ビーム・サーベル、62mmバズーカ砲、ビーム・マシンガン、スナイパーライフル



例として高く、その戦争環境に適合したため生産数も少ない。初期の「ギンダム」では、スカレーン隊の機体として登場するが、M.B.「ビーム・ガンダム」に「あつ」という間もなく登場され、高機動性を見せつけるに終わっている。しかし、後年の「ジム」などでは、それ相応に強い機体という扱い、いざし頃の活躍を見せることとなる。

初期型ジム

ルナツーが製造していたジムの初期モデル

地球連邦軍の小惑星基地、ルナツーにおいて秘密に生産されていたジムタイプFのGM79ジムの生産開始時期はU.C.0079年10月であり、配備も含めて、複数の変形や特殊で製造が行われていた。本機は、そうして出来たタイプの一つである。初期型と呼ばれるだけあって、後継機体と比べて、機体各部で異なる部分も多い。また、性能面でも

常機体より落ちるとされる。作中登場、サンダー・ボリスが操縦する本機は、アナナの乗るMS-06RD-4サブコ機動型との区別では、両機を区別されてしまった(二機動数士ガンダム第08話の小惑星「第一話」)。その際、RX-79(Ⅱ)陸戦型ガンダムに乗ったサンダースは、ジムとのパワー差に驚いていたので、少なくとも機体性能は相違あるようだ。

【所属】地球連邦軍

【機体番号】U.C.0079

【全高】18.0m

【全長】48.2

【武装】100mmマシンガン



汎用型支援砲撃機

ボールK型

2基の砲門を備えた意外な強さをみせるボール

本機は、只目、79ボールの標準的な試案であるキャノン砲に受えて、ライフ・フィッティング・キャリパーと称される2連装砲を装備するタイプだ。マシニング・ターは途中までサブアームが大きく分岐したタイプで、大きな物から小さな物まで操作できる。機体は測りずらい程度で、武装はあるが性能が主役ではないだろう。また、外装の材質は不明だが

ら、ザク・マシンガンに比べると多少は耐えてみせるかと、意外と頑強な構造のものである。地球へ赴く途中のアマダ少尉が単独でサンダー・ボリスを撃破するため、初期型ハイパーアークを撃ち、ウイングで格闘戦で自由を奪う計画は、連年の計画では考えられない意外性のある戦い方といえるだろう(二機動数士ガンダム第08話の小惑星「第一話」)。

【所属】地球連邦軍

【機体番号】U.C.0079~0080

【全高】12.8m

【全長】17.2

【武装】2連装マシンガン・ライフ・フィッティング・キャリパー

【武装】2連装マシンガン・ライフ・フィッティング・キャリパー

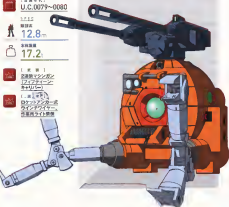
【武装】2連装マシンガン・ライフ・フィッティング・キャリパー

【武装】2連装マシンガン・ライフ・フィッティング・キャリパー

【武装】2連装マシンガン・ライフ・フィッティング・キャリパー

【武装】2連装マシンガン・ライフ・フィッティング・キャリパー

【武装】2連装マシンガン・ライフ・フィッティング・キャリパー



機体番号: 0079

陸戦型ジム



【所属】

地球連邦軍



【所属年代】

U.C.0079

SPEC



総高

18.0m



本体重量

53.8t



全備重量

66.0t



ジェネレーター出力

1,150kW



スラスター総推力

49,000kg



センサー有効半径

6,000m



【装甲材質】

ルナ・チタニウム合金



【武装】

ビーム・サーベル×2

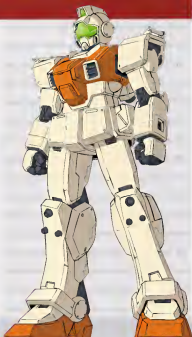
100mmマシンガン

ビーム・ライフル

ロケットランチャー

ミサイルランチャー

※



ガンダムと同規格の パーツで製造されたジム



VARIATION

ロングレンジ・
ビーム・ライフル

標準よりもヒール・アーマー
も華やかで大型の
ビーム兵器。

ロングレンジ・ビーム・ライフル装備の
陸戦型ジムをスナイパータイプと呼ぶ。
作中では陸戦型ジムより出番が多い。

実戦機であるRX-78ガンダムの製造過程で発生した余材を有効に活用し、なかっただけを削いで造った。先行量産されたRX-78(G)「陸戦型ガンダム」と同じようにインペリアル軍に奪取されたのが、このRX-78(G)「陸戦型ジム」だ。

それゆえ陸戦型ガンダムと本機は兄弟機といえ、また「ガンダム」にもこの近いジム、という見方もある。このように両機共通のパーツを使ったいわゆる後のRX-78(G)「陸戦型」とはまったく別系統の機体である。陸戦型というのも、配備場所の高かった東南アジア戦線などに向けての仕様といえ、食料運搬能力を優先したための割り切りといえる。スペック面でもジムに譲るが、構造材強度などは「ガンダム譲り」で同等の部分もある。

設定上は、陸戦型ガンダムに近い存在ながら、あまり活躍の機会はない。機体にもよるが、陸戦型ガンダムに比べ、カレンの乗る陸戦型ガンダムの運用になる程度だ。

ブルーディスティニー1号機



【所属】
地球連邦軍



【識別番号】
U.C.0079~0080

【サイズ】



全高
18.5m



本体重量
52.8t



全備重量
73.0t



【装甲材質】
ルナ・チタニウム合金



【武装】
腕部バルカン砲×2
ビーム・サーベル×2
腕部バルカン砲×2
腕部有線スライム×2
198mmマシンガン



COLUMN



NT試験機
ジム・ジャックラー

ボールを改造した近接ユニットをレーザーで操作するといつ 試験オールレンジ攻撃を行える機体。ブルーディスティニーと似たゲーム対面の機体。

ニュータイプを駆逐する EXAM システム搭載機

本機は、ジオン公国のニュータイプ研究施設、フラナガン機関の一品であり、同国が上を志したウルスト・ミーゼス博士の開発したEXAMシステムの高性能版である。EXAMシステムとは、ニュータイプ搭乗機に対応するための装置で、そのために機体や操縦者への負担も大きく、システム自体は第三の危険を帯びていた。

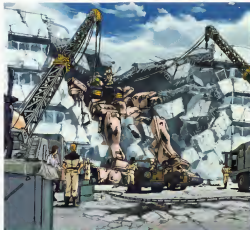
出典：『機動戦艦 高达』、『機動戦艦 高达』でシステムの運用テストを行っていたが、機体はオーバーロードして大破。そこでシステムを内蔵する頭部をRX-79(II) 陸戦型ガンダムに移植したのが、RX-79B(III) フルーディスティニー1号機だ。

※ガザール用「機動戦艦ガンダム」外伝「HERO DEEDS」に「(完全版)のオリジナルの性能機だが、「特殊な能力、性能を持つジム」という言葉付けや、ゲームの冒頭で、パイロットのM・08 T X (E X A M) イフリードは、今も人知れず、このカライズ作品などが展開中だ。



GM

U.C.0083-U.C.0096



一年戦争時、地球連邦軍の主力機として活躍したジム。戦後になると、ジオン公国系の技術流入が盛んになり始める。当初、真降宮のMSや開発技術はあくまで割的存在だった。だが、時代が進むにつれその境界は曖昧になっていく。その流れはジムの立場を徐々に変えていく。

戦後における ジムの役割

一年戦争後の世界を知るためのトピック

連邦軍で運用されるジオン公国軍MS

TOPIC-001

軍縮とデラース紛争



MS-06M
マリナー・ハイザック

地球連邦軍は、本物実用機をほめていた。こうした品は地球連邦軍の発展にはあまり関係してはなかったように、ジオン公国製の機体を発注する例が少なくなかった。



MS-06F-2
ザクII (F2型)

ザクIIは、MS-06F-2型の最終型の機体タイプ。地球連邦軍のサリエンティン基地では、戦後に確保されたザクIIが即ち戦時中製人の機体と見做され、使用された。

「数合わせ」の運用から 本格的な前線配備へ

一年戦争後に連邦軍は、戦時中の戦力の増強としてジオン公国系MSを採用。戦後初期は、戦時中（アグレッシブ）や戦時中として用いられたMS-06F-2などを中心として、部分的な運用がなされた。あくまで戦力は連邦軍系MSが主体だった。だが、戦後7年が経過すると、一年戦争の記憶は徐々に希薄化したため、戦時中にも配備される例が目立つ。例えば連邦軍よりも格格的にアドバンテージがあった米中戦時には、米中戦時中をリファインしたマリナー・ハイザックがそのまゝ運用されている。また「ジオン復興戦」を立案する任務としていたティターンズにも採用され、「ザクが連邦軍の主力」というイメージを植え付けるための心理的プレッシャーを与えるハイザック同様、一種のプロパガンダにも活用されていた。



KEYWORD デラース紛争



ジオン公国軍現存する唯一のMS-06F-2型ザクII。その後の連邦軍の対応を決定づけた事件といえる。ガンダム製作と戦艦の運用をめぐって、ジオン公国と連邦軍との関係が緊張した。そして、この一連の出来事は、戦後のジオン公国と連邦軍との関係に大きな影響を与えた。

ティターンズ組織の背景ともなった。ジム、クワールなど連邦軍の機体が、戦時中から一方、ティターンズはガンダムの開発を阻止すべく、ガンダムを破壊する計画を立てた。それは、戦時中から行われていた。そして、戦時中から行われていた。そして、戦時中から行われていた。

戦時中、ジオン公国軍は、戦時中の戦力の増強として、ジオン公国系MSを採用。戦後初期は、戦時中（アグレッシブ）や戦時中として用いられたMS-06F-2などを中心として、部分的な運用がなされた。あくまで戦力は連邦軍系MSが主体だった。だが、戦後7年が経過すると、一年戦争の記憶は徐々に希薄化したため、戦時中にも配備される例が目立つ。例えば連邦軍よりも格格的にアドバンテージがあった米中戦時には、米中戦時中をリファインしたマリナー・ハイザックがそのまゝ運用されている。また「ジオン復興戦」を立案する任務としていたティターンズにも採用され、「ザクが連邦軍の主力」というイメージを植え付けるための心理的プレッシャーを与えるハイザック同様、一種のプロパガンダにも活用されていた。

戦時中、ジオン公国軍は、戦時中の戦力の増強として、ジオン公国系MSを採用。戦後初期は、戦時中（アグレッシブ）や戦時中として用いられたMS-06F-2などを中心として、部分的な運用がなされた。あくまで戦力は連邦軍系MSが主体だった。だが、戦後7年が経過すると、一年戦争の記憶は徐々に希薄化したため、戦時中にも配備される例が目立つ。例えば連邦軍よりも格格的にアドバンテージがあった米中戦時には、米中戦時中をリファインしたマリナー・ハイザックがそのまゝ運用されている。また「ジオン復興戦」を立案する任務としていたティターンズにも採用され、「ザクが連邦軍の主力」というイメージを植え付けるための心理的プレッシャーを与えるハイザック同様、一種のプロパガンダにも活用されていた。

戦時中、ジオン公国軍は、戦時中の戦力の増強として、ジオン公国系MSを採用。戦後初期は、戦時中（アグレッシブ）や戦時中として用いられたMS-06F-2などを中心として、部分的な運用がなされた。あくまで戦力は連邦軍系MSが主体だった。だが、戦後7年が経過すると、一年戦争の記憶は徐々に希薄化したため、戦時中にも配備される例が目立つ。例えば連邦軍よりも格格的にアドバンテージがあった米中戦時には、米中戦時中をリファインしたマリナー・ハイザックがそのまゝ運用されている。また「ジオン復興戦」を立案する任務としていたティターンズにも採用され、「ザクが連邦軍の主力」というイメージを植え付けるための心理的プレッシャーを与えるハイザック同様、一種のプロパガンダにも活用されていた。

戦後の混乱によって
実われる業績

連邦系とジオン系の融合が MS群雄割拠の時代を生む

「機動戦士Zガンダム」の舞台となるダリス動戦は、MSの発展の時代といえる。もともと地球連邦軍は、国力を飛躍に伸ばし地球力を有しており、それに旧ジオン公国軍の特殊化した「一匹」を加えることによって、MS開発自体の技術の底上げが図られた。ガンダムMS-3で多能化されたムーバブル・フレームは、運動性の向上だけでなく、設計の革新性を生み、可変機の発展に寄与した。また、ジオン公国からもたらされたサイコニューロ連動装置は、連邦軍のニュータイプ研究の進展そして強化人間の研究と連動性のニュータイプ専用機の開発を促している。



第2世代MSの条件

- ムーバブル・フレーム
- ガンダリウム合金
- 全天周監視モニター
- リニア・シート

ガンダリウムの合成として確認するが、上記の機体のコア・エンジン（もしくは全て）を満たしていれば第2世代MSといえる。エゥーゴのクワトロ・バジールが代表的な機体として知られる形式などは、その代表格といえるだろう。



MSN-00100
百式

第2世代以降のMSの一例

第4世代MS



MSZ-01
ZZガンダム

エゥーゴの開発した可変式機体。連邦としては特殊の性能を誇る機体のMS。

AMX-004
キューベレイ

アウクス製のニュータイプ専用機。サイココム員部のファンネルを搭載している。

第3世代MS



RX-139
ハンブラビ

可変機構は未だだが高い機動性を持つ可変機。セザン・クーパー大尉などの機体。

RX-110
ガブスレイ

チャターンズの開発した試作可変機。特設可変機はOmni形態への変形が可能。

ヘンパトさせるのも大きな目的の一つと考えられる。

オメガ・システムを高度化するための技術開発は続けられ、宇宙世紀0080年代前半には、ジムをベースとしたノラ・ハウの機体から、A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・R・S・T・U・V・W・X・Y・Zと続いた「G・P・シリーズ」がスタート。一方でオメガ・システム研究所の技術も高度化させ、カスターム・システム・クワエルのラインは継続されている。

設立した宇宙世紀0077年、ティターンズとエゥーゴという、地球連邦軍内の権力対立に端を発した内戦が勃発。一年戦争と異なる構相を呈していた、MS開発の方向性が「強化した試作機」と「高度な機体」に分化する。地球連邦軍は、旧ジオン公国軍の技術と融合した、高性能機へとシフトする。

また、この時代のジムの改良といえ、旧M・79の改良機であるムムEがメインとなって、ティターンズ、エゥーゴ両方に配備されている。ハイダム（ヘンパト）に配備されているが、バリエーションなどにも、安定な機体の主力を形成している。

その後、ルノックスにジムが組み立てられる。オメガ・システムを高度化した。これらは地球力の技術のオメガ・チャーターによって生み出された機体で、高度な技術を持つ。オメガ・チャーターによって生み出された機体で、高度な技術を持つ。オメガ・チャーターによって生み出された機体で、高度な技術を持つ。

量産機と

時代が変わればガンダムも変わる

頭部

地球連邦軍の主力MSの格である
ゴッドタイプセンサーを採用した
頭部。内蔵装置としてバルカン砲を
随所に備え、顔の形状もゴッド・コ
マンド系（ムサフーモデル）を模倣する。

ビーム・サーベル

青銅のラウンドセムの両面に1本
装備しているのは変わらず。連
邦の重なりからコストなどを
考慮したためか？ 機体によっ
てはシート裏面に予備を装備
する例も。

装甲材質

最早期には、軽重が衡
性が高いが高価なミ
ア・チタニウム合金で
はなく、チタン・セラ
ミック複合材を使用す
る。これは生産性と保
護性のバランスを考慮
した結果といえるの
だろう。

胴体部

コア・ブロック・シス
テムの採用されていない。左足、胸部ダクト
をはじめとしたコア
ブロック固有のレイアウ
トなどはシム系機ガン
ダム系を模倣している。

脚部

機体から脚にかけての
装甲も一様化している
のはシム系機の特徴と
いえるだろう。高機動
で動きが激しいもの
の例、おんも同様とい
えるようにだ。

また機体といえる半前世紀OGB3年、
次世代に向けてのMS開発がスタートした年といえる。
時代に先鞭をつけるはずだったGPシリーズと、
シム系機とどの開わりはどのようなものだったのか？

シム改

時代の狭間が生んだ
技術のすれ違い

実験機RX-78ガンダムの存在意
義は、あくまで量産機RX-78
ガンダムを開発するための、実験機としての役割が
主である。一年戦争時は、量
産機を開発するための実験機とい
うのが本来の目的だ。一年戦争時、
RX-78ガンダムは、戦後の半前世紀
OGB3年までには普及が図られていた。
この時代のガンダムといえるのは、『ガ
ンダム開発計画』に続く『GPシリーズ』だ。設計者は一年戦争時のRX-
78ガンダムのノウハウを、量産化を目
的とした実験機の開発ではない。計
画記録は採られたとはいえず、もち
ろく、その中で得られたデータなどは
後継機にフィードバックされたと考
えられる。『開発計画』に採られていた
のは、最終的にあける最終性能をも
つ試作実験機の開発だった。
それと同時並行の機体設計は、ハイ
エンド技術や、実験機設計のより
リアルな主眼にたつ、さらには機体
デザイン・エレクトロニクス（ヘルメ
ット系）の技術者で固められたクラブ、
ワークス開発のRX-78GP01ガン
ダム試作1号機、AE社が吸収合併
したジオン・モビルスーツ技術者中心の
第1回次世代機によるRX-78GP02
ガンダム試作2号機、そしてRX-
78GP03ガンダム試作3号機が主
なる工程で開発され、それぞれ機
体は、まったく異なる性格の機体
として同時並行で開発された。

実験機

ビーム・サーベル

片腕内にはガンダムと同様の位置にあるように見える2本のビーム・サーベルだが、これは本物のコウビットプロトタイプとバリエーションを兼ねるコア・ファイター1号機に装備されている。

ガンダム試作1号機

胴体部

コア・ブロック・システムを搭載しているため、機体や関節コウビットタイプの機体は、ジムのほぼすべてガンダムと共通している（システムの違いがある）。

FF-XD コア・ファイターⅡ

コウビット試作に型取する小型実験機。機体の両腕基部にビーム・サーベル専用のビーム・ガンが装備。

頭部

ノンアイタイプのセンサーとスリットの入ったマスクは、ガンダムタイプの共通レイアウトといえる。機体部のセンサー（メインカメラ等）やフレートアンテナが両腕にガンダムに比べてやや傾け出しているのが特徴。

装甲材質

近代のガンダムを模倣するのが狙いといえるGPは鋼鉄とびあて、装甲材質も近代ガンダムのルネ・チタニウム合金を模倣している。重量感との平衡調整の高性能化も目的である。

実験機のちがいがいい

「U.C.0083 編」

脚部

両足だけでなくアキギ全身の足はガンダム系機体とは異なる。足元部分の色が濃緑系機体で異なることを示している。

では同時代のジム系機体とGフリンジーは、どのような関係性にあるのか？ 歴史研究が深まりだった一年戦争時代とは違い、戦後はジムという明確な基準がある。Gフリンジーで機体デザインが統一され、計画機体の各種パーツ類をジム系機体でテストすること、効果的な開発が行えた。そうした例の一つが、RGM-79Dジム改にGフリンジーで機体デザインが統一された。同時に、機体各部のテスト機（試作機）のための実験機という役割を担い、スラスターなど部品にガンダム試作1号機用パーツが導入されている。

一方、バード・ジムのような特殊な例をのぞき、Gフリンジーはガンダム系機体との関係性は薄い。ガンダム試作1号機と同時代の主力機、ジム改を比較すると、その違いは鮮明になる。コア・ブロック・システムや、空間制御システムへのパーツ機体など、かつてのRX-78ガンダムのシステムをより洗練した形で進化させたガンダム試作1号機に比べ、ジム改はあくまでRGM-79ジムの改修機、試作機といえる。それにもかかわらず、Gフリンジーの機体は、今後の開発の発展を促すべく新技術を実験する「次、ジム改は一年戦争の最終段階に位置する機体に過ぎない。新技術や機体構造をため、今後の開発に有利に試作機、生産型との違いはより鮮明になる。基準性能を除き、そこに技術的な先進性は、ほとんどないといえるのだ。

RGM-79N
ジム・カスタム

SPEC

総質量	18.0t
本体質量	42.0
ジェネレーター出力	1,420kW
スラスター総出力	67,480kg

ジム・カークをベースにした異次元のシステムタイプ。ガンダムNT1アレックスの登場（オーガスタ等）などが導入されているという。少数だが生産され実機投入された。

RX-78NT-1
ガンダムNT-1アレックス

SPEC

全高	18.0m
本体重量	40.0
ジェネレーター出力	1,420kW
スラスト駆動力	174,000kg

一昨戦争末期に開発された遠征用車輦のニュータイプ車輦。アムロ・レイの作戦を予定していたとされるが、ジオン公国軍特殊部隊との戦いで大破し、失われた。

厳密には「カスタム」ではなくガンダム NT-1 の量産機？

ニュータイプ専用機の開発技術が活かされたジム

年報統計に「農業化された大規模な
稲作のRGMは70ジム」に、戦中から
戦後のかけこみで稲々立生産がなされ
ている。その中でも、特に高生産化
を遂げたジムタイプが、オーガス
タ株種。研究畑中米の諸国を最良種
と、他はオーガスと並ばれる優
体種である。RGM70ジム・カ
スタムは世界的な標準といえる。

[illegible]

ジム・カスタームという名称から単純に「RGM」やジムをカスタマイズした機体」という印象を抱くかもしれないが、「ガンダムNEXT—アレノタスの乗船機」というニューアンスの方が、近いのかもしれない。

量産機と

ガンダムは変われどジムは変わらず……？

頭部

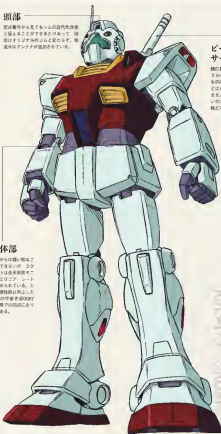
型試機時から見てモシムの近代化改修とほとんど変わらないが、コックピットは全米新機でモニターとリアシートに改造されている。たが基盤性能は向上したものの宇宙空間での使用は困難で目的にそぐいつつある。

胴体部

外観からは違いがほとんどないが、コックピットは全米新機でモニターとリアシートに改造されている。たが基盤性能は向上したものの宇宙空間での使用は困難で目的にそぐいつつある。

ビーム・サーベル

機体両脇にビーム・サーベルに改造されているものは、初期試機機と比べるとビーム・サーベルの構造が変更されているのはラントールの機体と異なる。



ジムII

多種多様なモビルスーツが生まれたグリプス戦役。特に可変機など、複雑な構造を持ったモビルスーツはその代表格。だがその活躍は、特殊な紛争下だから生まれた性能といえる。果たしてこの時代のジムの役割とは？

時代が生んだ 可変MSの優位性

「機動戦士ガンダム」の舞台となる宇宙世紀0079年、連邦グリプス戦役と呼ばれる戦いは、機動戦士ガンダムで増えた。この戦争とは、戦況が大きく変わった。

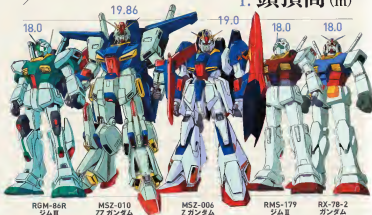
最大のポイントが、国家間の戦争ではなく、タイタニアスとジオという、どちらも地球連邦軍内部の組織による、一種の勢力闘争が原因となった紛争という点にあり、その性質から一足戦争よりも戦況は局地的になり、大規模な兵器よりも少数の兵器が戦場を支配するといふ状況が多く確認された。

こうした当時の情勢は、結果として可変機に大きな影響を与えている。戦況で述べた通り、一足戦争後は、結果的にカンブリア急襲といえる急襲戦が頻れた。従来の機動連邦軍の主力は、艦隊のアナハイム・エレクトロニクス社、そして連邦軍に提供されたジオン公国軍の工業や工場の加わり、技術のミクスチャーが盛ったのだ。同じ軍内の工業でも、各基地や研究所ごとに研究開発を独自に行っていたことも特徴だ。特に研究開発の技術力をアップルするといふ意味でも、特長能力に特化したジオン軍は有利だった。少数種族という状況も加わり、時代はハイエンド技術の競争の土壌となり、特に基本スペックに可変機がジムIのようだとM8とは、その戦況面でも

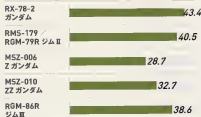
歴代ジム&ガンダム 性能徹底比較

モビルスーツ(MS)の性能を端的に表すのがスペックだ。アニメ本編とは関係のない後付けの文字設定で、劇中で描写される機体はそうないが、「MSがどんな性能なのか?」という点を妄想する手がかりになるのだ。

1. 頭頂高(m)



2. 本体重量(t)



一年戦争時のMSと、グリプス紛争期の最新型MSでは機体の機能性に相応する重量に大きな差が生じている。その要因は装甲と、新世代のムーバブル・フレームの採用にある。前者はルナ・ナタニウム合金から、より強度で軽量のガンダリウム(γ)合金に置き換えられたことで、同時に軽量化が図られている。そして後者のムーバブル・フレームは、MSの構造全体を機体から変え、装甲面積の減少(ビーム兵器がMSの弱点となり、全面を装甲で覆う意味が消失したことも要因)も大きく影響を与えている。超重量級の機体のあるMSZ-010 ZZガンダムですら、RX-78ガンダムより1t以上軽く、いかに新素材や新技術の登場が画期的だったかを物語っている。一方、RMS-179ジムⅢの設計を継承するRGM-86RジムⅡは、一部にガンダリウム合金を採用し、装甲が増加しつつも軽量化を遂行している。



3. ジェネレーター出力 (kW)



モビルスーツの動力源であるジェネレーターの出力。一年戦争時、RX-78のガンダムは推進力機という位置付けだが、近大戦の後期に登場したMS-14Aゲルググでも、同レベルの出力を発揮していた。ジェネレーターの開発はMSの性能を左右し、技術的進歩は目覚ましいものがあった。事実、グリプス戦役時のRMS-179ジムⅡでも、ガンダムの出力を上回る。この時代の出力目安は大体1800kW台で、2000kWのMSZ-006 Zガンダムはハイパワーかつ軽量のMSで、優秀なハイウェイトレシオを持ち、運動性に優れた機体といえる。一方、ジェネレーターを3基搭載したMSZ-010 ZZガンダムは機体例で、後の時代の機体と比較しても、これほどのパワーを持つ機体はイレギュラーなのだから。例えば宇宙世紀0086年に開発されたニュータイプ専用機の高スペック機であるRX-93 ヴガンダムですら2880kWだった。



4. スラスター総推力 (kg)



MSの機動性や行動範囲に影響を与えるスラスター機も、一年戦争以降に大きく発展し設備の1つ。その発展を受けたのは、グリプス戦役時に登場した可変機たちだ。これらは変形による推進機体の変換、行動範囲の向上が最大の得意であり、能力に著しい影響を与えるスラスターは、可変機の登場と密接な関係にあるといえる。こうした可変機の代表格といえば、MSZ-006 Zガンダムだが、変形機構のウェーブ・ライダーは航空機に匹敵する推力を発揮しという。その理由の一端は、群を抜くスラスター総推力と不可分ではないだろう。一方で最も進化した可変機といえるMSZ-010 ZZガンダムは、変形にもスラスター総推力はZガンダム以下。これはZガンダムがウェーブ・ライダーすらも戦闘形態の一機としていたことに対し、ZZガンダムはあくまで運動形態と捉えていた結果なのかもしれない。



5. センサー有効半径 (m)



いち早く敵を認識するのに必要なセンサー機の進歩も、一年戦争とグリプス戦役以降では、数倍の差が懸念。敵やその機体について言及されてはいないが、おそらく火器管制システムの制約範囲と考えるのが妥当だろう。つまり、有効な攻撃を与えられる距離だ。敵よりも早く相手を感知して攻撃することは、任務の有効に役立つことができるということでもある。

それゆえ戦後はセンサー機をはじめとするMSに搭載される電子機器が、大幅に進化を遂げたのではないだろうか。例えば7845-179ジムⅡやRGM-79RジムⅡは、RX-78ガンダムの活躍した一年戦争時代の機体をベースとしているが、センサー機などはガンダムよりも大幅に向上している。これがMSZ-006 Zガンダムなどの最新機になると、一年戦争時代のMSと比べて3倍以上の有効半径を實現している。



頭部

従来のガンダムを真の機体として開発されたばかりで、オリジナルに近い機体。また、機体のバルカン砲の構造や、機体「バリエーション」に改良されている。このシステムは最新の機体でも継承されている。

腰部

機体前半はオリジナルのガンダムから大きく変わっている。サイドアーマー部にはワイルド・ゼロ・ライフルや手榴弾などをも搭載できるようになっている。

継承されるガンダムとジムのガンダム化

ティターンズの開発したガンダムMk-IIは、エウゴに継承されたことで、開発元である組織の意図とは異なる、独自の運命をたどった。だが特化した機能はないものの、MSの優れた素性のよさは別な形で活かされることになる。

シールド

本機にスライフレールを装束と特機式の防弾装置。デザインや機体はジム・コマンドやガンダム試作1号機のものに近しいような印象である。また、ビーム・ライフルの半自動モードやバグをマウントできる。

直接的な量産ではなく、素性の良さを継承する

地球軍士官と通じるティターンズが、自らの意図となる位置付けの機体として開発したRX-178ガンダムMk-II。機体材料こそ、ティターンズが自らの開発にこだわったため、諸君由来のナチン系合金だが、機体構造に革新的な設計であるムーバブル・フレームを導入している。これまでの従来型MSで採用されたモノコック構造からは別格を誇り、機体自体の軽量化と優れた運動性を実現しているのだ。

ガンダムMk-IIは正式確定機体だったRX-178ガンダムとは異なり、当初から機体構造の1/3の軽量化テストを行っており、量産型を視野に入

RX-178 ガンダムMk-II (ティターンズカラー)

機体の開発はティターンズの立場が中心でいるため、機体のカラーリングは従来のイメージから、宇宙空間での機体色を低くする傾向も考えられる。エウゴに継承された機体は改良された。



試作機と

ガンダムMk-II

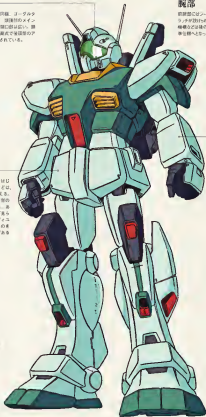
エウゴ・ゴカラー

量産機
のちが
い

[U.C. 0088 編]

腕部

前庭部にはフルボディサントの
ラッチが取り付けられている。こうした
機構などは他の選手もほぼ全員の機
材に採用されている。



頭部

従来のカメラシリーズ同様、コンパクトタイプのセンサーが、望遠側のメインカメラに連するほど開口部が広い。望遠のバルカン砲は内蔵式で望遠側のレンズは3倍に伸縮されている。

陳錦

フロントアーマーをはじめとした防衛装甲などは、ゾムと同等といえる。また、鋼鉄と鋼鉄製のセンサーについては、異なるものとなるのが見られることから、ボディユニットはゾムと異なるものを使用している機体があるのかもしれない。

量産機)

RGIM-86JL

ジム
III

機動であったが、その間、四半ダムとは違ひ、最初からそのまゝの形である程度の量の水を貯めに入れていたのだらう。だが、運用経験中の3機すべてが故障した。流送エリゴに利用される本機は、タイター・シズの日産1,000トン、結果的に「量産化計画」は頓挫するが、遂に東洋に立寄らずその運搬は諦められることになる。

第一次オ・ジョン戦争で連邦軍主力財源となったHGM、船員ジムは、HMS・179ジム王をベースとしながら、ガンダムMKⅡ、Ⅲと同型のパーツが投入されていた。またスラストの機能なども、同機の建設のフィードバックを効果とさせる装置となっていた。

要として、この大空襲は、一連の連戦を経て、遂に復讐を遂げたのだという遺憾が、確に復讐を遂げたのだというか？ グリプス戦役後は、連戦の戦力が大幅に低下していた時代、それゆえ、以前のような相手の開戦を誘うには、自分の戦力がなく、おのずと既存の戦力を活かす方向性が模索されたはずである。

その一方で、ガンダムと戦うことが持つ、魂を肉體に刻みこむという行為の重要性のよまという側面も、異國情の裏と表められるジムタイプの変容化に象徴的だったのではなないだろうか。かつてのガンダムとジムの関係性のように、ガンダムは、主目的の達成化ではないものの、その成否は確実にジムに受け継がれているのだ。

ジムⅢはガンダムMk-Ⅱの 量産タイプなのか!?

グリブス戦役初期に開発されたガンダム Mk-IIIは、将来的に量産を視野に入れた機体だったのだろうか？

ガンダム Mk-Ⅱのパーツが多数用いられたように見えるジムⅡと比較することで、その関連性を探ってみよう。

RX-178

ガンダム Mk-III(エターゴカラー)



標本名

(タチーリヤダ)

戦後の機軸はむしろウェブに所属するチームなどでも取られたが、それよりも断度は高く全体的に現れる。従来の赤黒ではなく、新色の採用はグラフィック態度でディカーンズが展開したことと不可分ではないだろう（この時代に海軍軍の正式塗料が取入れられた）。

$$\gamma = \mu \mathbf{F}$$

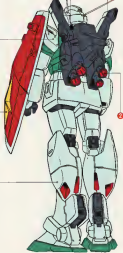
道地方の重要MGでは、これまで様々な制装のシルエットが採用されているが、シムダでは異色鮮やかに印象に。よほど食料在庫があったのか、はたまた軍需物資で戦時国産品の売れ行きが強く推進されたかは定かでない。

腹部スラストー

よく似た面影と一体化したような数値ユニットだが、横村の位置はガンダムMk.Ⅲに近い。スエアキレス隊を母に模範ユニットらしきものが追加されている。

RGM-86R

シム直



ガンダムMK-IIの量産タイプ、
バーザムとの関係性は？

同様の設定では、バーナムはカンダム&Kの「最悪度」ではなかった。両者の「真実性」が同じであったのは、この両者の間に道徳的区別を認め「倫理的な最悪度」は「月利0%」「サブプライム削減」で、カンダム&Kのバーナムを凌駕して、バーナムのアレンジを行ったことが原因。結局はメディアやオピニオン・リーダーも含めて「カンダム&Kの最悪タイプではないか?」という設定をめぐり、倫理性の「真実性」が異なる、争い続けられ、両者の間に道徳的区別が認められず、

RMS-154
15-154

●ココが裂れている!

「ビーム・サーベルラックの懸架」

ガンダムAGEの主人公はム・サール。RX-78ガンダムとは異なり、スラスターとラッパが特徴。ム・サールはガンダムAGE主と同様のバシバシを演じているために、ム・サールのサーベル型近接武器も一瞥して



●ココが型ている!

メインスラスタの数

バックボーン構造に共通性があることにもちなみ、
 ノム国は国語にもスラスターを埋められ、その配置
 はガンダムAGEと類似している。国語版で開発
 がフォーミュラとされる利便性もまたある。



背中(ランドセル&バックパック)で見るMSのちがい

一年戦争時代にはランブルだったランドセルもバックパックも、戦や設定としての機能的な違いもあって、時代が流るごとに発展していき、ここでは背中から見えるMSの違いを挙げてみる。

U.C.0079~U.C.0083



**RX-78-2
ガンダム**

両サイドにビーム・サーベル用のラックがあるタイプ。



**RGM-79
ジム**

ビーム・サーベルの装備数は1本で機体色と同じ色だ。



**MS-06F
ザクII**

MSの総称といえるザクⅡのランドセルはランブルな設計である。



**RGM-79SP
ジム・スナイパーII**

中央にスラスターを集中的に配したタイプ。サーベルラックはない。



**RAG-79
アクア・ジム**

水の色の機体と合わせて中央部に水色のラダーが描かれている。



**RGC-80
ジム・キャノン**

右側面に連射する形でキャノン砲を装備している。サーベルラックはない。



**RX-78GP01
ガンダム試作1号機**

ユニバーサル・テスト・ザクが特異的な中堅全機の高機動タイプ。

まとめ

1年目のランドセルは、ガンダムをベースに発展していったという設定であり、デザインは基本的に共通(ビーム・サーベルが2本になったのみ)。その後はバリエーション展開の要素や、ジムも機体の発展を遂げる。水中型・機動型といったバリエーションは機能的な設計が機能を実現している。さらにOVA版が流れると、機体のフォルムの向上から、MS機体のディテールが描かれ、新文字や設定の改良の向上や高出力化といった要素を受け、ランドセルは発展していく。

U.C.0087~U.C.0088



**RMS-179/RGM-79R
ジムII**

外側の装甲はジムと変わらないが、スラスター・センサーも増設している。



**RMS-106
ハイザック**

両サイドからも張り出している機は、機体の起飛の助燃剤である。



**MSA-003
ネモ**

ジム・スナイパーIIと似た構成とされている半吊のランドセル。



**RMS-108
マラサイ**

ランドセルのデザイン上にあるセンサーは機体モニター機能か？



**MSZ-006
Zガンダム**

サークル・スタビライザーとフライング・アーマーで構成されている。



**MSZ-010
ZZガンダム**

ミサイル・ランチャーを内蔵した同大のバックパックが特徴的。



**AMX-004
キュベレイ**

一度きりと機体に取り付けられているように見えるランセル・コンテナだ。

まとめ

MSの「四角の機体」と呼ばれる機体は技術発展の波が押し寄せた時代。それと並行して進化を遂げたバリエーションとして、一年戦争よりも強力なスラスターの搭載が実現していき、またZの登場のような可変MSが登場したこと、画一的なバックパック・スラスターという設計が崩れたものもこの時代の特徴といえる。作品の発展から見れば、『Zガンダム』以降、多数のメカニックデザイナーが作品に参加したこと、それぞれ異なるバックパックが描かれるようになる。

華麗なる ジムの活躍

Part12



映像作品で振り返るジムの名(迷)場面

このページでは、一年戦争以後に登場するジム系列機の活躍ぶりにスポットをあてよう。往年作品になると、相変わらずの「やられメカ」からベテランの奮戦機体など、バリエーションが見られる。多少重複はするが、各作品の製作年代順でカテゴライズしている。

Z&ZZ&逆襲のシャア

相手がシャア……クワトロ大尉じゃさすがに分が悪すぎたか!?

敵を退けるため早速ジムⅡが登場! しかしクワトロ大尉の腕を思いリッター・ディアスに奪われしめられ、意図下でも機体の引き出しがでずじままに地上に墜落。四式以前の機體のように……。重傷を負ったのは、カミーユの機に倒れ込んで重傷を負ってしまったジムⅡ。これであと一息の残る機体がなくなってしまった。



Data

『機動戦士Zガンダム』1985年
TV作品 第2話「戦え!」より

144

145

アーガマの直撃は
レたちに任せろ!



何の説明もありませんでしたが ネモはエウゴの新型機なんです!

カミーユがウォン・リーに修正されることと有名な『Zガンダム』第9話だが、新型機ネモとジムⅡのエクウゴカラー初登場回でもある。アーガマの運命をしていたのだが、ジムⅡはハイザックに倒れ失墜させられ、いいところはずに。同じ旧型ベースのハイザックがエウゴのリッター・ディアスを倒したとは大違い。



Data

『機動戦士Zガンダム』1985年
TV作品 第9話「新しい戦い」より

146

147

強化人間が乗るんだから かなり手強い相手になります

歴史的に重要視しながら、高機動に分類できそう。それにロザミアが乗ってアーガマから逃げ回る。クワトロの首式のビーム・ライフルを盗け(しかも後から撃たれたのに)。さらにハイザックも乗っている。で、これはネモというよりロザミアがすごいのか? ちなみにロザミアは、ネモはシンプルにマシンとのこと。



Data

『機動戦士Zガンダム』1985年
TV作品 第41話「激突!」より



ジャブロー基地には MSVがいっぱい

本格的にはプラモとしての存在であった[MSV]の機体たち。「機動戦士Zガンダム」ではそんなMSVの登場も認識だった。ジム・キャノンにはジャブロー基地の防衛能力として登場していたが、ビル滅しにガンダムAmbに撃たれて壊れ去り廃されたりと、あまりいいところはない。



Data

『機動戦士Zガンダム』1985年
TV作品 第12話「ジャブローの嵐」より

ジム系機体が乗ってればその 宇宙世紀の戦歴らしさが

05年から公開される劇場版「機動戦士Zガンダム」3部作では、新作カセットとして現代風にアップデートされた様々なMSが登場していた。ジムなどの登場シーンも増えている。最新バージョンもいろいろと戦歴を添えて描くシーンでは、何かと甲斐に立っていて、これも自然と納得いへ。



Data

劇場版「機動戦士Zガンダム 星を継ぐ者」ほか
2005年 劇場公開作品



大事なものは、目の前のジムよりも ベース・ジャバーなんだってば！

巨大型飛行機アウドムラから脱出したジム連隊。ガンダム・チームを助けに来たまではよかったが、ボーチャールにベース・ジャバーを奪われてしまった。これは行方不明のジュードを助けに行こうとしたためだが、事態が飲み込めないジム達は茫然失笑である。



Data

『機動戦士ガンダム ZZ』1983年
TV作品 第25話「リナの命（再編）」より

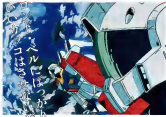
最後の最後に登場するけれど 救援にやってきたんです！

小惑星アタックスの後ろ半分の破壊に落下しようとする危機に、アムロのガンダムでアタックスを押し返そうとする中、突然として現れる連行軍の部隊の中には、なんとジムⅡの姿が！ 真逆のミサイル・ボンドが熱で故障しないか心配だが、共に小惑星を押し返そうと奮戦する。



Data

『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』1988年
劇場公開作品





ガンダムタイプのテストベッドだが 機体評価は未知数！？

オレンジ基調の機体色がポイントのバード・ラム。トリントン基地での機動戦では、アレン半衛が搭乗し、コウヤキースのザクⅡ(ダタ型)相手に活躍。しかしボトーに破壊されたガンダム試作2号機の追撃戦では、ダム・トロイ・ペンに足を突かれ撃破された。機体時のデモンシャルは低くおいてに注意。



Data

STARDUST MEMORY

『機動戦士ガンダム 0083 STARDUST MEMORY』

1991年 OVA 作品

第1話「ガンダム帰来」＆第2話「終わりの季節」より

乗り手が変われば機体も変わる じつは高性能な量産機？

破壊されたガンダム試作2号機の凶悪戦を行くアルビオンの666。野木のコウが乗るガンダム試作1号機を返すものは、ペテランのバニング大尉のガンダム。大型砲撃機のザメルに張り合いの機動戦を演じる。大尉は食害するものの発射ザメルを撃破した。さすがペテランパイロットは闘う戦術を知らない。



Data

STARDUST MEMORY

『機動戦士ガンダム 0083 STARDUST MEMORY』

1991年 OVA 作品 第2話「終わりの季節」より



ギブスを叩き割って出撃する バニングの心意気

バニング大尉は、中隊におけるゲッターズ・フリード連隊でも中心的役割を果たす。地上部隊のまさけと、シーマにスタグロにされるコウのガンダム試作1号機。彼を助けに入ったのは、自分の腕のギブスを叩き割って出撃してききバニング大尉だった。シーマのゲルググすら圧倒する性能はさすが！



Data

STARDUST MEMORY

『機動戦士ガンダム 0083 STARDUST MEMORY』

1991年 OVA 作品 第5話「ガンダム、覚め醒れ」より

遅れてやってきた致命傷で 宇宙に散ったバニング

シーマと演習演習官ウィリアムが交わした機動戦術を模範手に入れたバニング大尉。その時、シーマのゲルググが突撃をしかけ襲撃に突入する。機体も壊滅するがシーマを撃破し、帰投しているその途中に海軍の機体加納が襲撃。バニング大尉とジム・カスタム(機体も)は宇宙に落ちてしまった。



Data

STARDUST MEMORY

『機動戦士ガンダム 0083 STARDUST MEMORY』

1991年 OVA 作品 第5話「機動戦術」より





111

重装甲のジュアッグを切り裂く！
ガンダムファン情かしの武装！

ダカールの街を襲撃した旧ソ連機受
け。都市を陥落していたジム軍以下の
MS隊は、暴れるジュアッグを倒すため
ビーム・サーベルよりも出力の高いビ
ーム・ジャベリンで攻撃警備！ しかしそ
の直後、シャンプロの放った大口砲も
子供達の家に突き込まれてしまった――



① Data

『機動戦士ガンダムUC』 2010年
OVA作品。episode 4「重力の世界の果て」より

144



100

旧ジオン残党軍の旧式 MS 相手に
一進一退の攻防を見せる

トントンの暴走は近所の商店街から上陸する
前ゾロン機突撃隊を水際で迎撃する連隊軍。ム
ムムやオオの目玉機がメイン戦力だが、それ
は相手も似たようなもの。内陸でのジムとセ
ミストライカーとイフリート・ジュナイトの
戦いは見どころの多いとつだが、高配はイフ
リート・ジュナイトの軍に。機体は



Data



『機動戦士ガンダム UC』 2010年
OVA 作品 episode 4「重力の果ての国で」より

ネモにジムⅡ、ジムⅢ
連邦軍歴代最度機操い詰め！

グリブス戦役時の高橋純重少佐。ネても時代遅れながらダカール制覇に参加。上から自衛しかブールを驚かせたが、ジュニアにはドーム・サーベットのパワーが足りず遂に敗りつけられ撃墜。しかしこれがヨリ目に活断の機会を与えた。決して無駄にやめられただけではないのである。



• **Desktop**

北京

『機動戦士ガンダム UC』 2010年
OVA 作品。episode 4「権力の罅の底で」より

144



— 34 —

アンカーで動きを制するまではいいアイデアだったが……

ダカール制覇のあと、トリントン基地を周回する2回ジョウ検定車。巨大MA、シャープロが海中から浮上するとマラヤ軍司令官を襲撃。平戦にいたアタア・ジムの1機は、アンカーでシャープロのクロー・アームを拘束しようとするが、まったく制とできず、叩き落とされた機体はついに沈没したと報告された。

 Data

龍鳳呈祥

「機動戦士ガンダム UC」 2010年
OVA 作品。episode 4「重力の境界の国」より

11



21

B44



RGM-79N
ジム・カスタム

● P.87

● 18.0m ● 42.0t

■ 機動戦士ガンダム0083
STAROUST MEMORY (91年)
■ MG, HGUC (No.130)

カッコいいジムの代名詞といえるジムの生産機。作中でもバニングをはじめ、バイト、モンシアといったベータラン者が操縦する。80年代に製品化されなかったが近年、MG、HGUC化を果たした。



B45



RGM-79C
ジム改 (トリアントン基地防衛機)

● P.86

● 18.0m ● 41.2t

■ 機動戦士ガンダム0083
STAROUST MEMORY (91年)
■ MG, HGUC (No.113)

機体カラーは「ガンダム」のジム・コマンド（コロニー防衛機）に似る。機体両腕の配色とも考えられるが正確は不明。また、ガンダムにおいてジム改といえば、このアースカラーが定番だろう。

B47



RGM-79C
ジム改

● P.86

● 18.0m ● 41.2t

■ 機動戦士ガンダム0083
STAROUST MEMORY (91年)
■ MG, HGUC (No. 113、ボール改修型とのセット)

スタンダードカラーと特設ある機体のジム改。トリアントン基地防衛機機体にMG化（93年11月発売）されたと、HGUC版は機体面でプラバンの限定アイテムのみと（94年12月発売）。

B49



RGM-79Q
ジム・クウエル

● P.89

● 18.0m ● 39.8t

■ 機動戦士ガンダム0083
STAROUST MEMORY (91年)
■ MG, HGUC (No.070)

作中機体。エピソードでモンシアたちがウィータースの制御塔を襲撃する際、青空のMSデッキに乗り込むが第一機体のみ。また機体色の成りもあってか、人気が高いジム系機体の1機だ。

B48



RB-79C
ボール改修型 (C80)

● P.87

● 12.8m ● 17.2t

■ 機動戦士ガンダム0083
STAROUST MEMORY (91年)
■ HGUC (プラザ版スタンダードカラーとのセット)

ダークス・フリードによるコロニー落としを阻止するため、ソーラーステムとの戦闘作業を行っていた。タイムルを短したMGこそないが、仕様そのものはMSのVerkaと変わらない。

B71



RMS-179/RGM-79R
ジムII

● 18.0m ● 40.5t

■ ガンダム新機動 -0087- グリーンダイバース (91年)
■ 無し

作品の見どころは、大規模投入の科学力に事倍へり、2台ガンダムを有する（ジムII+3台のライバルのバリエーション）や色違いのデザインが豪華らしい。全体的にメカ的なジムの印象は少ない（※）。

B70



RMS-179/RGM-79R
ジムII (エゥーゴカラー)

● 18.0m ● 40.5t

■ ガンダム新機動 -0087- グリーンダイバース (91年)
■ 無し

作品の主人公、アサギ・ブリリダス、カラー・ブリリダス姉弟が戦艦に乗り込まずに、戦艦をくぐる機体でこれ！機体の前面を覆います。手短かにそのサポートする姿にキーンとします！

073



**RMS-179/RGM-79R
ジムII (エスカフローラー)**

●18.0m ●40.5t

■GUNDAM EVOLVE 1/12 (20年)
■無し

タフットの官式とシャア専用ザウとのかいを強く「1/12」が初出で、2005年公開のマラサイの活躍を強く「1/12」の機体で登場した。両作品を収録した機体ソフトは20年1月発売。

072



**RGM-79N
ジム・カスタム
(イヘルズ版)**

●18.0m ●42.0t

■GUNDAM EVOLVE 4 (22年)
■無し

ここに登場しているジム・カスタムは、作品そのものには登場機体となっている。「イヘルズ」シリーズでは、種々の機体製作に向けたトライアルがなされていたため、本機もそんな一例といえる。

076



**RMS-179/RGM-79R
ジムII (デザートカラー)**

●18.1m ●40.5t

■機動戦士ガンダムAUC (10年)
■HGUC (P18)

デザートカラーのジムです。トリントン基地の防衛任務に動く機体でしたが、もろは参加機体です。10年1月にはアレバンの機体アイトムとしてHGUC化がなされ、その後、再版も出されています。

074



**RMS-179/RGM-79R
ジムII**

●18.1m ●40.5t

■機動戦士ガンダムAUC (10年)
■MG (P46)

AUC ep.4「軍力の奪取の夜」の第1ガンダムシリーズMSの機体。作中では西軍とジオン軍両軍が入り乱れる中、しっかりとやられっぱなしを演じる。プレバンでMSの製品化（17年9月発売）。

077



**RAG-79
アクア・ジム**

●18.0m ●49.5t

■機動戦士ガンダムUC (10年)
■無し

時代交代が激しいMSにおいて一歩前中から、その後の17年以降に立ち寄りた中核機体。連邦軍における水陸両用機の後継で、ゲームでは従来のMSとが製品化にはあまり関係していない。

078



**RMS-179/RGM-79R
ジムII
セミストライカー**

●18.1m ●43.5t

■機動戦士ガンダムUC (10年)
■HGUC (P18)

機体の一部に機動性を追加し、フィン・ビーム・スピアを装備した機体。サン・ジャークの機体色で、市販ではイフリート・シュナイトとの区別を測って見事に動いていた（→要項参照）。

079



**MSA-003
ネモ (デザートカラー)**

●18.5m ●36.2t

■機動戦士ガンダムUC (10年)
■HGUC (No.140)

対艦戦用のサンドラウの多量。こちらはトリントン基地に配備され、セーラー・サーベルで運用された。ビーム・スライパー・ライフルで武装されたり、と見事に「やられるが」を兼ねた。

078



**MSA-003
ネモ (地球連邦軍仕様)**

●18.5m ●36.2t

■機動戦士ガンダムUC (10年)
■HGUC (No.140)

ダカールの開発機体。足車、エアーゴのMSは連邦軍の戦況を察知しては、グリブ空母に運送されたと機体。実機の色を模して、機動センサーの色や機体はオリジナルと異なる。

001



RGM-86R
ジムⅢ (デザートカラー)

● 18.0m ● 38.6t

■ 機動戦士ガンダムUC (10年)
■ HGUC (19)

トラントン戦時の配備機。機体色は砂漠色を基調としたセントカラーで、同様にミサイル・ボックスを換装する。今までは、イフワード・ジュナイドのヒートダートの機色となった。

008



RGM-86R
ジムⅢ

● 18.0m ● 38.6t

■ 機動戦士ガンダムUC (10年)
■ 無し

UCに no.4 登場。ダカールでの回シオン機変革との戦いで、ビーム・ジャベランでフェリックスに撃りつける凄まじい。各機タイトルを冠したガンダムは全く (22) 版で対応しよう。

003



RGM-237C
**パワードジム
カーディガン**

● 18.0m ● 82.1t

※スベックはビルダーによる設定

■ ガンダムビルドファイターズトラウ (14年)
■ HG

チームトラウ・ファイターズの紅一点カシメ・フミナタのガンダムで重武装かつ高機動を機体 (型試番号020はビルダーのフミナタの名称を表す)。後にライニングガンダムへと変身している。

002



RGM-79K9
**ジムスナイパー
K9**

● 18.0m ● 80.2t

※スベックはビルダーによる設定

■ ガンダムビルドファイターズ (13年)
■ HG

アル・ギンザン代官のレナード兵隊のガンダム。HGUCジム・スナイパー・IIIをベースに足マシオが製作した。18年8月から発売の「バトルロイヤル」第4弾では本人兵隊だったことが判明した。

005



RGMGM-79
**GM / GM
(ジム・コマンドヘッド)**

● 18.0m ● 41.2t

※スベックはビルダーによる設定
■ ガンダムビルドファイターズ
GMの登場 (17年)
■ HG

GM GMの頭部にはいくつかのバリエーションがあり、これは「ボクダ」に登場するジム・コマンドと同一タイプ。流行する装備は専用ジム・スプレーガンとシールドが基本となっている。

004



RGMGM-79
GM / GM (Zim・コマンドヘッド)

● 18.0m ● 41.2t

※スベックはビルダーによる設定
■ ガンダムビルドファイターズ
GMの登場 (17年)
■ HG

ガンダムマフィアのガンダムの機体。プロポーションのバランスはローキーでスタイルリッチである。それらも作中自衛隊は、やはりジム系で「ちょっと半端なジム」といったところ。

007



MSMGM-07
ジムズゴック

● 不明 ● 不明

■ ガンダムビルドファイターズ
GMの登場 (17年)
■ 無し

ガンダムマフィアが使うガンダムズゴックのような外装はバグが可能な。その中身はGM (GM)。今までは機を弄し、元来4イジン・クワダとディガンズゴックの間に載る。

006



RGMGM-79
**GM / GM
(Zim・コマンドヘッド)**

● 18.0m ● 41.2t

※スベックはビルダーによる設定
■ ガンダムビルドファイターズ
GMの登場 (17年)
■ HG

この機体は「ガンダム」に登場するバグ・MSと同様。ただしガンダムタイプではなく、真の00の機体に近いバグ・MSタイプ。HGではこのタイプの機体が登場する機体として、

391



MSA-007
ネロ

● 190.2m ● 34.1t
(全高 25.20m)

■ ガンダム・センチネル(30年)
■ 無し

▲「ラムダ」ガンダムの上半身と501ガンダムの下半身の設計を組み合わせて製造された量産MS。後継機型や試作型などの説もある。本作は機体誌上で描写され「バズンの設計」を描いた。

394



MSA-004K
ネモⅢ

● P.91

● 18.5m ● 45.4t

■ Z-MSV(35年)
■ 無し

右腕にビーム・キャノンをもつ大出力装備。当初はネモとは別系統の機体で、ネモの後継機が検討し、本機が採用されたという経緯があった。[UC] ms-4では異世界のゲストメカとして登場。

395



MRXGM-009
サイコジム

● 40.0m ● 388.0t

■ スピリットはビルダーによる設定

■ ガンダムビルドファイターズ
G編の登場(17年)

■ HG(PG)

ガンダムマフィアの切り札。HGUCサイコ・ガンダムをベースに改造されている。カラーリングも赤を基調で、機体からビーム光線を射出する。ブレイクにて製品化もある(17年12月)。



392



MSZ-013
量産型ZZガンダム

● P.92

● 18.5m ● 29.2t

■ M-MSV(30年)
■ 無し

オリジナルの機体から多くの機体を移植しながらも、劇的にはストロンと同等の性能が認められる。という点に量産型ZZガンダムと共通する特徴。後年、連邦作品などにも登場している。

391



MSZ-007
量産型Zガンダム

● P.92

● 20.4m ● 30.9t

■ Z-MSV(35年)
■ 無し

Zガンダムの可変機構を継い、大出力化を図った高機動の試作機。機体型というも見たが、劇的に登場化はされなかった。何という「MSがある」を解放する機体ともいえる。

393

TGM-79C
ジム・カナール
(宇宙仕様)

ジム・カナールの宇宙仕様。増設するセンサーやナビゲーションシステムなどは完全性を保ちた設計を施す。本機は機体誌の機体とジム・カナールと呼ぶ。



TGM-79C
ジム・カナール

● 不明 ● 不明

■ 機動戦士ガンダム
エコーデュ・シエル(31年)
■ 無し

本年にある機体誌第40のバイロット星域宇宙エコーで運用される機体。機体はジム。機体形状や機体一式。これは不確定な機体や機体などの不確定の機体に対するための機体。

095



RGM-79C ジム改ノーマル カラー (AOZ版)

● 不明 ● 不明

■ ADVANCE OF Z
タイタースの機のもとに(32年)
■無し

宇宙世紀0054年の地球連邦軍に配備されていた機体。「AOZ」はタイタース期まで機体が確認されるが、同時代に活躍していた本機のような機体のMSも数多く登場する。

096



MSS-009 ジェモ

● 不明 ● 不明

■ 機動戦士ガンダム
エコー・デュニウス(31年)
■無し

ニュータイプ専用機であるMSS-009は、ニュータイプ感の強さは全機パーツを用いて製造された新形態の機体である。運動性や機動性は高いが、生産数そのものは少ない。

097



RGM-79Q ジム・クウエル (AOZ版)

● 不明 ● 不明

■ ADVANCE OF Z
タイタースの機のもとに(32年)
■無し

MS-022ガンダムT型ハイゼムのベースとなった汎用機MS。デラズ戦中に設立されたタイタースに配備されていた。本機は機体部を中心にコックパイロットとして運用されている。

098



RGM-79CR ジム改高機動型

● 不明 ● 不明

■ ADVANCE OF Z
タイタースの機のもとに(32年)
■無し

タイタースMS実験体「Z」の改良機体。タイタースによるジムZの機体改良の成果。機体こそジム地帯が、各部に改造が施されている。作中ではエアリアル・ハンターが射撃する。

099



RGM-79EW EWACジム

● 不明 ● 不明

■ ADVANCE OF Z
タイタースの機のもとに(32年)
■無し

ジム改高機動型に電子戦用装備を搭載したタイプ。タイタースで検討された。実験用の早期警戒機ランのひとつである。「Z」登場のアイザックのような機体のランダムが特徴である。

100



RGM-79SR ジム・ スナイパーⅢ (原作ビーム・ランチャー装備)

ジム改高機動型 (改造)。ダム・スナイパーⅢ (80) とともにオプションパックの機体による。機体や機体への対応が確認されていた。考え方としては、ケルグウィーンの機体に近い(機体など)。

RGM-79CR ジム改 高機動型 (中継機支援ユニット装備)

RGM-79SR ジム・ スナイパーⅢ

● 不明

● 不明

■ ADVANCE OF Z
タイタースの
機のもとに(32年)
■無し

ジム改高機動型をベースにしたカスタムタイプ。作中ではカール・マクスバハが機体。ジム・スナイパー・カスタムのように機体にはパイザーを備え、専用のビーム・ライフルを運用する。



102



MSA-003
ネモ・カノン

● 18.5m ● 不明

□ ADVANCE OF Z
ティターンズの機体と似て(10年)
□ 無し

ロング・シールド・ブースターはティターンズの「シールド・ブースター」を参考にエゥーゴで独自に開発した装置だ。内蔵機体を格闘していることで両肩の機体にも展開可能だ。

101



MSA-003
ネモ・カノン
(ゾラ機)

● 18.5m ● 不明

□ ADVANCE OF Z
ティターンズの機体と似て(10年)
□ 無し

機体のセンサー部にフェイスカバーを装着し、ロング・シールド・ブースターを最大3基展開可能な専用バウイングを装着したことでカスラム機、機体のカラーリングも異なる。

104



RGM-79C [WAGTAIL]
ジム改
(ワグテイル)

● 不明 ● 不明

□ ADVANCE OF Z
機に似ている(10年)
□ 無し

ジム改(ケラウノス所属機)の改修機、機体の部品は少ないが、(電装ホビーマシン)「アスキー・メディアワークス」の所蔵としてRGM-79Cジム改を複製し、改修パーツ付録(10年5月4日)。

103



RGM-79C
ジム改
(ケラウノス所属機)

● 不明 ● 不明

□ ADVANCE OF Z
機に似ている(10年)
□ 無し

元ティターンズ所属「ケラウノス」の機体。ザンジバル機やケラウノスに改造されていた、パーツの不揃いなども特徴(5月4日)。ジム・コマンドなどのパーツを装着した機体は稀だ。

104



MSA-003+FXA-05D
ネモ・
ディフェンサー

● 不明 ● 不明

□ ADVANCE OF Z
機に似ている(10年)
□ 無し

タキにガンダムと似たバックパックを装着し、0ディフェンサーを装着した機体。ただし、0ディフェンサーのコクピット等は早期開発ユニットに換装されている。

105



MSK-003
ワグテイルII

● 不明 ● 不明

□ ADVANCE OF Z
機に似ている(10年)
□ 無し

重なる機体を受けたケラウノスのジム改は、7月に完成すると報告が送られてきた。これらではスラップとビルトを繰り返して機体は増える。その際、さらに改造が加わりワグテイルIIとなる。

106



RGC-83
ジム・キャノンII
(ホワイトコーラル)

● 18.0m ● 不明

□ ADVANCE OF Z
機に似ている(10年)
□ 無し

ルシアン・ベント所属機に遠征機体の強化と近代化改造を施した機体。2門あるビーム・キャノンのうち、右の1門を最新のメカ電子制御、左側を最新機ユニットへと換装している。

107



RGC-83
ジム・キャノンII
(ルシアン・ベント専用機)

● 18.0m ● 不明

□ ADVANCE OF Z
機に似ている(10年)
□ 無し

ゼブラパターンが特徴的なジム・キャノンのカスラムタイプ。遠征機体だけでなく海戦にも対応できるように、機体後部装置として2基のヒート・シークを装着している。

機

- › RGM-79C
- › RGM-79N
- › RB-79C
- › RGM-79
- › RGC-83
- › RGM-79Q
- › RMS-179/RGM-79R
- › MSA-003
- › MSA-004K
- › MSZ-007
- › MSZ-0013
- › RGM-86R
- GM EARLY Type
- GM CUSTOM
- GM TYPE C
- Powered GM
- GM CANNON II
- GM QUEL
- GM II
- NEMO
- NEMO III
- Z GUNDAM MASS PRODUCT TYPE
- ZZ GUNDAM MASS PRODUCT TYPE
- GM III

体

解

説



HGM-745

ジム改



地球連邦軍



U.C.0083~



18.0m



本体重量
41.2t



全國總量
58.8



ジェネレーター出力
1,250kW



スラスター総推力
57,480kg



チタン-セラミック複合材



〔 式 例 〕
50mmバキワン砲
ビーム・サーベヤ
ブルバシブ・マシンガン
他



VARIATION



トリントン基礎記憶帳

オーストラリア、トレントン芸術祭賞、
並上りのセンドカラーが特徴。カラー
パニング大判が優美に、音質つつ
ラズ・フリーのザメルを楽した。

分散した規格を統合するために
リファインされたジム

一は競争という始原的動機に主眼を置いた。自G M・79ジンは、戦時軍用機ゆえに、設計や製造機体が大乱立する事態を招き、戦後に民間運用を行う上で問題が生じていた。そこで排他生産型（C型）をベースに、乗客数一と機能向上を図ったのが自G M・79C型改であった。

だが、これは、一年程度で失った精神力の回復に、例えても、物理的な中絶を用いたMSの制御技術が基礎となっていたからで、ジョオンの軍事の後援勢力は未だに、ジョオンの存在に、彼らが活動する際には常にMSを依存する。それらMSをも凌駕するMSが出現した。この一した概念は、やがてデラーズ紛争として歴史の表にのぼった。

ジム改は「機動戦士ガンダム00」
GUSTARDUST MEMORY
に登場するが、もともとに雑誌「ガンダム・センチネル0079」で
発表されたジム後継生産型がベ
ースとなっている。

RGM-75N

ジム・カスタム

高性能化を模索した 貴重なジムの系統

本機は旧X・78NT-1ガンダムNT-1アレノクスやRGM-79Gジム・タウエルなどの開発元として知られるオーガスタ基派/研究所、いわゆるオーガスタ系の機体で、高性能ジムの代名詞的存在だ。性能も、従来のジムとの倍近い数値で、RX-78ガンダムに匹敵するジェネレーター出力を得る。

「機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY」Yに登場するジムの派生機だ。作中、サウス・バニング大空や旧「不変身」の第四小隊「パイロット」の機体として、ジム系機体としては異例の活躍をした。設定上にも「機動戦士ガンダム0083 ポケットの中の戦争」の主要メカ、ガンダム特1-1アレノクスの技術がフィードバックされた機体だ。デザインラインの統一化も検閲され、機体各部に共通性が見て取れる。

【機体】
機動戦士

【登場年次】
U.C.0083

【サイズ】
全高
18.0m

【重量】
本体重量
42.0t

【性能】
全機重量
57.6t

【動力】
シラレーター出力
1,420kW

【武装】
スラスター機動力
67,480kg

【特殊能力】
サターン・バニング統合機

【武器】
Beam Saber
Beam Rifle
Beam Saber
Beam Rifle



標準支援型モビルポッド

RGM-75

ボール (改修型)

一年戦争ではジムとともに 活躍した戦闘ポッド

一年戦争時、RGM-75ジムの支援用戦闘ポッドとして改修されたRGM-75ボールの改修型が本機である。主な改修点としては作業用アームの追加やスラスターの増設など、ボール本来の作業用ポッドとしての機能が開かれているようだ。

「機動戦士ガンダム」でも、ジムとセットで行動する存在だったが、MSの配備が進むと次第に姿を消していった。だが戦後、一年戦争時、RGM-75ジムの支援用戦闘ポッドとして改修されたRGM-75ボールの改修型が本機である。主な改修点としては作業用アームの追加やスラスターの増設など、ボール本来の作業用ポッドとしての機能が開かれているようだ。

【機体】
地球連邦軍

【登場年次】
U.C.0083

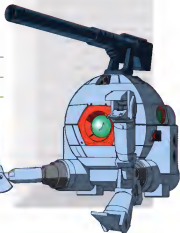
【サイズ】
全高
12.8m

【重量】
本体重量
17.2t

【性能】
シラレーター出力
400kW

【武装】
サターン

【武器】
サターン



機体番号

パワード・ジム

ガンダムのために生まれた
パーツテスト用の実証機

旧G.M.79Cジム改をベースとした実証機「ガンダム開発計画」の1機。旧X-79GP-01ガンダム試作1号機用のパーツを組み込み、大型バリア・シールド・アブソーバー・ユニットを装備。機体も30cmアップと機体向上を遂げた。「ガンダム」を経て最終機「ジム」が開発されるのではなく、「ジム」

でテストを行い、それを「ガンダム」に反映するという。戦後らしい開発の流れも窺われる。「機動戦士ガンダム0083」の冒頭で、コウ・ツァノクの乗るザクIIが2機の機体に変装している。正確な機体は見せつけない。その後、奪われたガンダム造りの任務に当たっても、敵の不良打ちによって、その実力を発揮する前に撃破された。

【機体】地球連邦軍

【機体番号】U.C.0083

【機体】18.0m

【機体】46.6t

【機体】64.2t

【機体】1,650kW

【機体】71,480kg

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機



機体番号

ジム・キャノンII

支援用として開発された
新たなジムバリエーション

かつて旧X-79ガンダムキャノンの重武装を目指した旧G.C.60ジム・キャノンの改良機で、本機のベースとなる旧G.M.79Cジム改との部品共用化はさらに進められている。戦後の技術力向上の成果から、旧機型のキャノン機はビーム・キャノンと変更された。

1ガンダムNT-1アレノワスのデータがフィードバックされている。本機は単体では旧機のザクII・アーマーを駆使させるとはいえず、本機の開発、試作のバリエーションは少ない。「機動戦士ガンダム0083」の冒頭で、奪われたガンダム試作2号機の部品を合流したアルビオン機の機体として登場し、それぞれ活躍した。

【機体】地球連邦軍

【機体番号】U.C.0083-0087

【機体】18.0m

【機体】47.3t

【機体】66.9t

【機体】1,420kW

【機体】59,480kg

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機

【機体】ガンダム・システム統合機



RMS-099V RMS-099

ジムII



【所属】
地球運搬車



【活動年代】
U.C.0087~0096

SPEC



総高
18.1m



本体重量
40.5t



全備重量
58.7t



ジェネレーター出力
1,518kW



スラスター総推力
62,000kg



センサー有効半径
88,000m



【装甲材質】
チタン合金セラミック複合材



【武装】
バルカン砲×2
ビームサーベル
ビームライフル



VARIATION



エアーゴカラー

運搬車のイメージを反映するため、グリーンを基調した機体色に変更されている。また運用される機体の中には、肩の星十字マークを塗り潰して隠れている。

マイナーチェンジによって コンセプトを継承する

一年戦争の前後にかけて登場したジム系汎用機の中で、「RGM-79」の血統を最も多く受け継いでいるのが「ジムII」といえるだろう。RMS-099のハイザックやRMS-117「ガバルダイオ」といった、融合する量産MSの登場以降、旧来のジム系機体が数種、統合される中で新機に製造された機体もあるため、本機には「RMS-099-R」（旧ジムの改修タイプ）と「RMS-117-R」（新機製造タイプ）と2通りのタイプの機体が存在している。

ジェネレーターや、スラスターの変更、全周固定シッターの導入など、次世代MSに見られる近代化改修が行われたが、基本設計は一年戦争時のジムゆえ、グリーズ戦役時では旧式機であり、突撃攻撃に新MSが開発される中で苦戦を強いられている。

だがジム系本来の特性のよさは残されており、連射性の高いビームライフルは、一部の機体はRGM・純RジムIIへ改造される形で活用が図られた。

汎用量産機

MSA-003

ネモ

ジムのコンセプトを継ぐ
新時代の量産機

グリアス戦役期におけるエウーゴの主力MSの1機。当時、エウーゴではRMS-179ジムⅡなどを運用していたが、すでに旧式で、RMS-099リノク・ティアスの量産も生産性が問題視され、配備は基盤にいた。そうした中、性能と生産性の両立を図る新型主力機の実用化は急務だった。本機の開発は、エウーゴの後援組織でもあるアナハイム・エレクトロニクス

ス(AE)社が担当している。コンセプトには「ジム」の方向性を受け継ぐ一方、旧ジオン公団系技術も導入され、ガンダリウム合金や、熱及び型ムーバブル・フレームを採用し、量産機として優れていた。ただ、あくまでコンセプトを踏襲する機体でしかなく、AE社製の旧ジオン系技術が用いられるなど、厳密には「ジム」とは異なる系統の機体である。

【所属】
エウーゴ→連邦軍

【生産年代】
U.C.0087~0096

身長
18.5m

本体質量
36.2t

全質量
55.6t

ジェネレーター出力
1,620kW

スラスター総推力
72,800kg

センサー有効半径
10,020m

【装甲材質】
ガンタリウム合金

【武装】
バルカン砲×2
ビームサーベル
ビームライフル



中距離支援機

MSA-004K

ネモⅢ

ネモの系譜を受け継ぐ
エウーゴの新量産機

MSA-003ネモの系列機体であり、ネモⅢに続くエウーゴの新型量産機として開発され、バランスの取れたネモよりも火力支援に特化した機体として誕生した。肩部に装備されたリム・キャノンやスパイクシールド、大幅に形状の変更されたボリウムの外装もネモから大きな変化を遂げている。

「ダム」の派生企画「Z・MSV」で登場した機体で詳細は設定もないが、宇宙世紀0096年を舞台にする「機動戦士ガンダムUC」では、一部の機体がガンダムUCとして登場。トリントン基地防衛の連邦軍MSとして出撃したが、旧ジオン残党軍のヨナム・カーズが乗るMS-06LザクⅡ・スナイパータイプの狙撃によって、活躍する間もなく破壊されてしまった。

【所属】
エウーゴ→連邦軍

【生産年代】
U.C.0087~0096

身長
18.5m

本体質量
45.4t

全質量
56.1t

ジェネレーター出力
1,620kW

スラスター総推力
68,800kg

センサー有効半径
12,050m

【装甲材質】
ガンタリウム合金

【武装】
バルカン砲×2
ビームサーベル
ビームライフル
ビーム・キャノン



ジムⅢ



「新機」
カラバー連邦軍



「通称名」
U.C.0088~0096

スペック



総高
18.0m



本体重量
38.6t



全長
56.2t



ジェネレーター出力
1,560kw



スラスター総推力
81,200kg



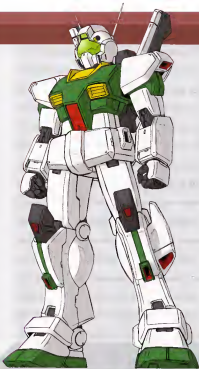
センサー有効半径
10,900m



「装甲」
チタン合金



「武装」
バルカン砲×2
ビーム・サーベル×2
ミサイル・ポッド
ミサイル・ランチャー
機



ジェガン登場まで 連邦軍の主力を担った



デザートカラー

「ガンダムU.C.」で連邦軍の主力として活躍したジムⅢは、その後、連邦軍として活躍の機会がなかった。機体はデザートカラーと改称する。

RGM-86RジムⅢは、U.C.0088年、連邦軍の主力として活躍した。その後、連邦軍として活躍の機会がなかった。機体はデザートカラーと改称する。この機体は、U.C.0088年、連邦軍の主力として活躍した。その後、連邦軍として活躍の機会がなかった。機体はデザートカラーと改称する。この機体は、U.C.0088年、連邦軍の主力として活躍した。その後、連邦軍として活躍の機会がなかった。機体はデザートカラーと改称する。

非 宇宙世紀ガンダムシリーズに見る

ジムっぽいヤツら

ここでは、「機動戦士ガンダム」とは異なる世界観＝宇宙世紀を舞台にしたガンダム作品に登場する、ジムポジションのMSやジムっぽいMSを編集部独自のセクションで紹介しよう。対象作品は「機動戦士ガンダム」から「機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ」までの10作品。基準は作中でMSを兵器として扱っている作品が対象。設定画を継承する機体もあれば、見た目やシルエット、もしくは作中の活躍ぶりなどの雰囲気からジムっぽい機体まで、様々なMSをとくところあれ！



CASE:01 設定編

ここでの設定とは、「ガンダム」作中でアムロさんが暮っていた、ジムに対する「ガンダムの生産タイプ」という評価と向い位置付けの各MSをピックアップ。伝統的なガンダム生産タイプといった風貌のMSから、中には「本物」にガンダムの直系なの？と思うような意外なMSも入り、とてもバラエティーに富んでいます。



GAT-01 ストライクダガー

出自「機動戦士ガンダム SEED」(02年)

新世紀の正統派ジム系MS?

このストライクダガーは連合軍が開発したGAT-X105ストライクガンダムの最終量産型です。機体に合わせて、オリジナルの格闘特装機能(ストライカーパック・システムやPS装甲など)を換した新形態タイプ、というのもジムっぽい。ただ、残念なことに作中では主人公のガンダムと対峙する仲間ではなく、敵対関係というのが惜しい。コレさえなければガンダム史上、もっともジムっぽいMSナンバーワンに輝いていたはずです！

GAT-01A1+A2MS-084 ガンバレルダガー

出自「機動戦士ガンダム SEED MSV」(03年)

ストライクガンダムのストライカーパック・システムを採用しているという点でもストライクダガーより上位機種といえます。MSDは独立連隊の「SEED MSV」で、MSDは「SEED MSV」にカスタム化してTV版と異なりました。



GAT-01D1 デュエルダガー

出自「機動戦士ガンダム SEED MSV」(03年)



イフェルナストラダガー

ゼフトに破壊されたデュエルガンダムのアサルトユニットに似た機構が特徴的なストライクダガーの派生機です。コ・ダグ・キターズとして開発されたロングダガーをナチュラムに改造したMSです。残念ながらTV版には登場しません。

派生機なのにリアルなジムっぽい!!

NRF-M1 M1 アストレイ

出自「機動戦士ガンダム SEED」(02年)

ガンダム顔だけれどもその扱いがジム?

M1アストレイは、オーブ連合軍国でのルゲンレーテ社が開発した量産MSです。ベースとなるガンダムアストレイシリーズは「大西洋連邦のデータを活用して開発された」というデータは背景設定ではありますが、作中における扱いや位置付け、主人公サイドのガンダムタイプとの関係性などは、元のストライクダガーよりも「ジムっぽい」かもしれません。(原はガンダム様です！)。





**GNX-660T
ジungkスII (通称軍カウ)**
初出「機動戦士ガンダム AGE」
1/100スケール (100 年)

アフリカ系国のジungkスII (GNX-660T) とは型式番号が見えるからポイントです。その後もジungkスの名前には受け継がれ、様々な機体や変形機などが開発されています。最新機はジungkスMまで開発されています。

GNX-764F アヘッド

初出「機動戦士ガンダム AGE」
1/100スケール (100 年)

ジungkスの発展型で独立開発された機体アヘッドの登場です。この機体は、機体上部にあるパイロット席にホログラムディスプレイが搭載されています。これは、主としてパイロットのガンダムと対峙する立場に変わります。



GNX-603T ジungkス

初出「機動戦士ガンダム AGE」
1/100スケール (100 年)

**機体だけでなく
設定面は立派なジungkスI?**

機体は機体 (GNX-603T) だけでなく、機体上部にあるパイロット席にホログラムディスプレイが搭載されています。これは、主としてパイロットのガンダムと対峙する立場に変わります。主としてパイロットのガンダムと対峙する立場に変わります。主としてパイロットのガンダムと対峙する立場に変わります。

ガンダムシリーズに ジungkっぽいMSは必要不可欠!?

RGE-G1500 アデルマークII



RGE-G1100C アデルキャノン



**RGE-G1100
アデル
(ディーファカラー)**



RGE-G1100 アデル

初出「機動戦士ガンダム AGE」(100 年)

**真正正統の
ジungk系MS正統派!?**

オリジナルであるガンダムAGE-1と同一の基本フレームを保持した量産MSです。AGEシステムこそ多種多様ですが、作機面では限りなくオリジナリティ (ガンダム) に近い機体といえます。ただひとつ懸念があるといえば、実用配備まで100年の歳月は必要としたところでしょうか。機体各部を連携するウェアシステムは採用しているため、バリエーションが豊富という点もジungkっぽい点。頭部パイザーを上げるとメインアームは短くはなります。

ディーファカラーは海軍軍の宇宙艦隊ディーファと海軍艦隊で、アデルキャノンは宇宙艦隊のウェアシシステムを採用したタイプ。マークIIはアデルの発展型で、ここに追加した機体タイプは他に宇宙艦隊機体も作中に登場しています。

ガンダムが変形するなら、量産タイプだって変形するぞ!



RGE-G2100 クランシェ

初出「機動戦士ガンダム AGE」(100 年)

ガンダムAGE-15をベースに開発された量産型可変MSです。このガンダムAGE-15とアデルのような機体は、やや高身長で、可変機は顕著化され、ウェアシシステムの採用も見受けられます。可変機は機体系統も機体系統は顕著化され、機体的にも高身長と少変形といわれています。



RGE-G2100C クランシェカスタム

初出「機動戦士ガンダム AGE」(100 年)

クランシェの機体向上型で機体系統やウェアシシステムの開発とされています。機体系統の向上とされています。機体系統の向上とされています。機体系統の向上とされています。

CASE:02 シルエット編

ここでいうシルエットとは、まさに見た目！ 鋼が
ブルタイプであったり、全機の色に似る塗装であったり、
時には作中での名前など、様々な要素が揃っている
内容に仕上がっています。中にはガンダムをも模倣してしま
うほど、というガンダムシリーズの
40年の歳月の長さを感にさせて
くれる特製ぬいぐるみ……？



☒ 查字一四九六—五〇三〇



02 圖

1998



JMS-71
ノブツ

初出「戦艦の時代」の巻ノ下ム」(34年)

モビルファイター＝ガンダムを
見事にサポートします！

ネオ・ジャパニコロニー製の量産MSです。機体だけでなく作中における役割は、まさにダムっぴいMSの代名詞。おまけに基幹材の一部にダムニウム合金スーパーセラミック複合材を用いているなど、資金入りのダムっぴいです！ ちなみに対戦機の宇宙戦闘用のブシにはサクリウム合金などが採用されています。

02-07AMS
エアリーズ (統一連合軍団)

原注「西國動植物記」卷之四、五頁（明治三）

ジムボジションを画定する
空戦用の可変MS

尾道駅前2区の開発は不可成。市中にある重要施設マンションのリーオーと比べてみて、フェス部分にマンションがあるわけじゃない。こちらはダグとつながります。主人公たちと密接に関わっているのは、読者パイロットの一人、ルクレティア・ノインさんは流石の主人公サイドに転向し、物語上の裏面キーマンを握るのです。そうした点を鑑みてエニャーリスにジェムとの面談が上げられます。

ドットレスのバリエーション

DT-6000HM
ドートレスHM・
ファイバーケーブル

NRX-018-2
ドートレス・



DT-6800C
ドットレス・コマンド



07-6889W
ドートレス・ウェポン



DT-4803
ドートレス
原田「開戦前世紀のバム文」(1984年)
かつて連邦軍を支えた
ジムボジションの部

DT-6500HMC
ドートレス HMC-
ワイスワラビーDT-6800F
ドートレス
フライヤードートレス・
タンタ

この中で唯一、ドットレス画とは形式番号が異なるドットレス・モデルですが、これは所謂高画質の液晶パネルのため、それと同等の価格が要求されているという点は興味深いところ。ちなみに価格は見違いましたが、ドットレスの液晶製品はJTM7000シリーズと違い、その液晶サイズはJTM7000シリーズと同じになります。

特に平成ガンダムを原作などと呼ばれ、そのトリアを断った「X」における「Neo-DX」もそれがドットレスのものです。かつての両腕系タイプVAMである、バネーションも豊富。一作品にここまで派手な機体や機群が登場するというのは、数回もガンダムシリーズの中で最も妙しいかも知れません。戦場の世界を縦横に動かす機体、一般企業や、戦術部隊の機体としても通用されるなど、意外と活躍します。その意匠はドットレスの両腕機と何種類かの点が特徴的です。

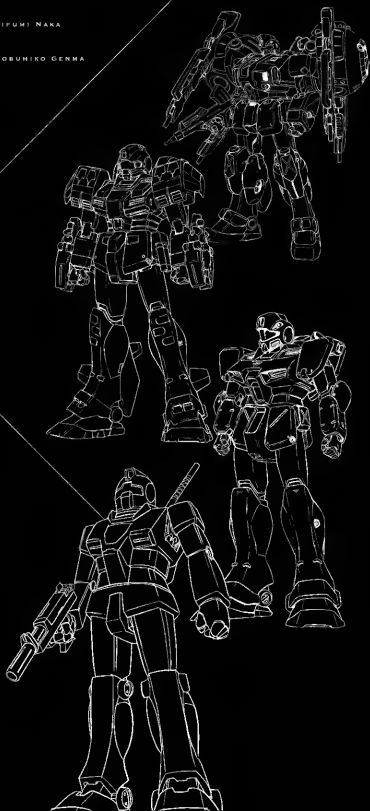
読み物 ／ インタビュー

INTERVIEW

小田雅弘 MASAHIRO ODA

仲盛文 MORIFUMI NAKA

玄馬宣彦 NOBUHIKO GENMA



ビーム・ライフルの対比としてのビーム・スプレーガン

『機動戦士ガンダム』第29話「ジャブローに散る!」において最初に登場したRGM・79ジムの携行していた武装は、RX・78ガンダムのビーム・ライフルと同型だった。このジムは、シャア・アズナブルのMSM・07Sズゴックに一瞬のうちに腹部を貫かれて撃墜されている。

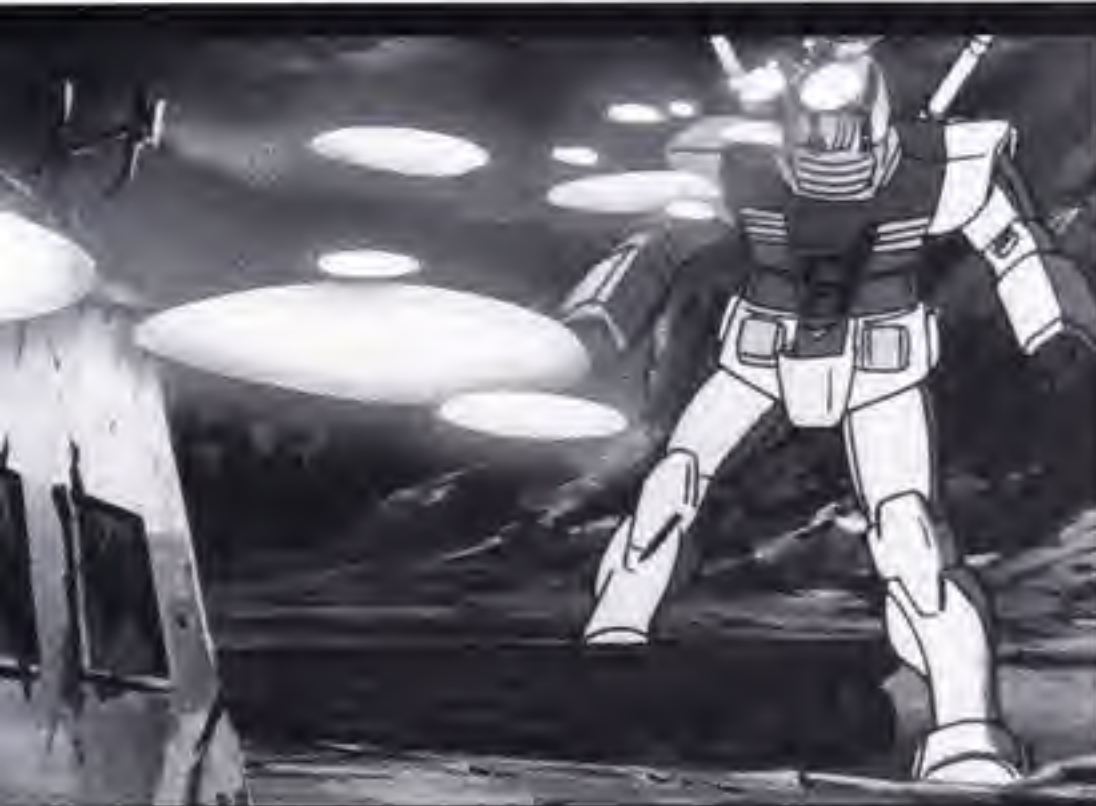
この有名なシーンのジムは、おそらく意識的に「ビーム・ライフル」を持っていたという設定ではなく、むしろ制作スタッフサイドの何らかの間違いのようなものだった、と見ていいだろう。設定におけるジムの武装は、ビーム・スプレーガンで、これは外見的にガンダムのビーム・ライフルよりかなり小型のデザインであり、文字通りライフル（小銃）に対するガン、もしくはピストル（拳銃）のような存在だった。

物語の設定上、ジムはガンダムの生産タイプ（簡易量産型）で、ガンダムより性能も劣るため、武装もビーム・スプレーガンになった、という事になっている。また経験の浅い連邦軍パイロットが扱うので、集団戦を想定しスプレーのようにビームが拡散して命中しやすくなっている、というものであった（諸説あり）。また、ジムはあくまで作中では「やられ役」で数も多く登場するため、そのビーム・スプレーガンも、ビーム・ライフルより線を減らして、か

解説

ガンダムシリーズに見る RGM-79ジムと その系統機の武装

RGM-79ジムといえば、その武装はビーム・スプレーガンというイメージがあるだろう。しかし、それは合っているともいえるし、間違っているともいえる。ジムの持つ武装は、作品や、それらが作られた時代によって様々な変化を遂げているのである。ここでは作品世界観の内外から見えるジムの武装について考えてみたい。



なり描きやすい形になっている。

一方、宇宙世紀の作品世界内に目を向けると、このビーム・スプレーガンは、十分な威力を持っていたと考えられる。むしろガンダムの主武装であるビーム・ライフルは、戦艦や巡洋艦に一撃で甚大なダメージを与えるどころか、時には一発で撃沈できるという凄まじい威力を持っていた。そのため、高威力の引き換えとして弾数が少ないというデメリットがあった。

そもそもRX・78ガンダムは、白兵戦用の機体として開発されている。白兵戦とはすなわち、近距離戦闘による格闘戦であり、この場合、おそらく対モビルスーツ戦、すなわちその標的はジオン公国軍のMS・06ザクIIおよび後継機との戦闘を想定していると思われる。つまり、対艦戦闘などは数の多い自軍の艦艇に任せ、そうした艦艇に襲いかかる敵モビルスーツを駆逐さえできれば、自ずと勝利が転がり込むということだ（もともと、ガンダムの場合、対艦戦闘をこなす場面も少なくなかったが……）。

ザクとジムの 武装の違いとは!?

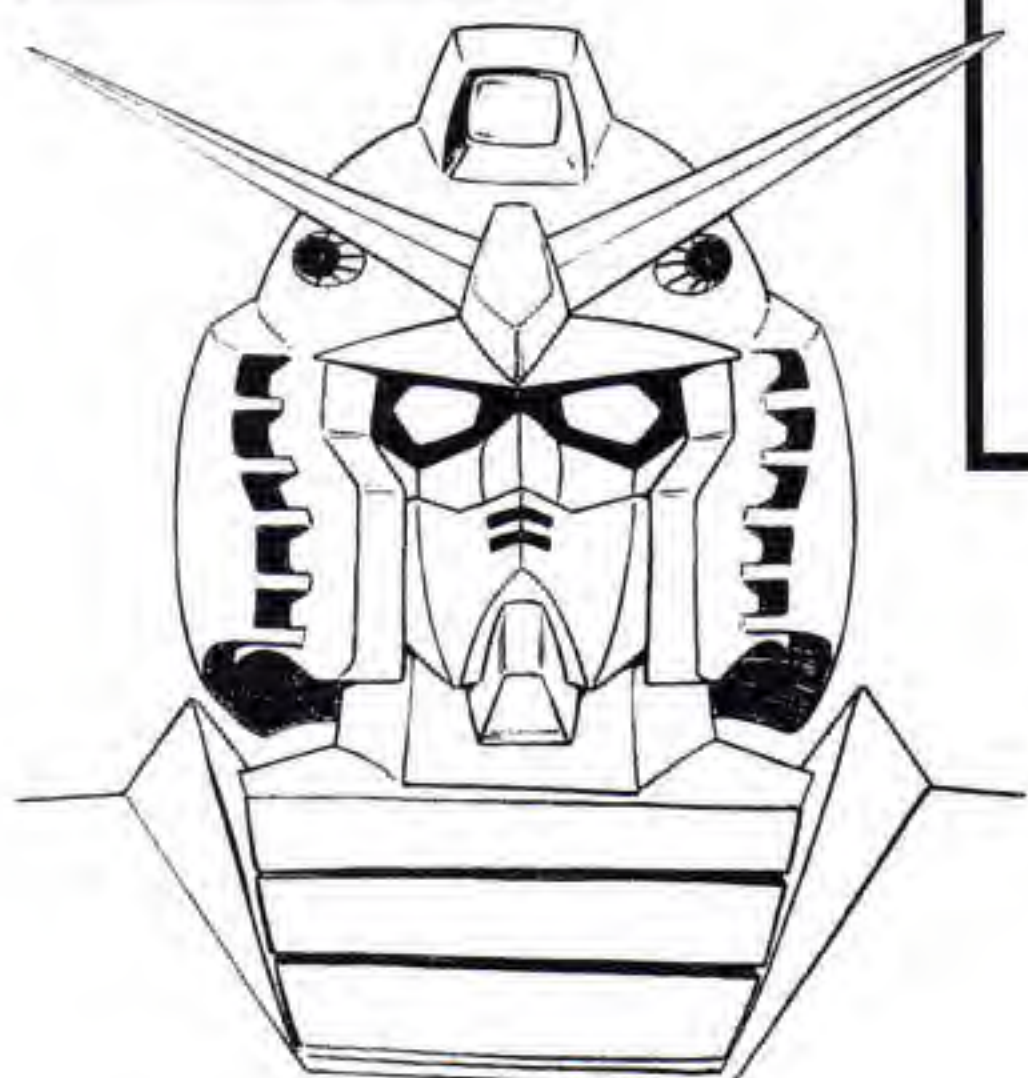
対するジオン公国軍のMS・06ザクIIは、モビルスーツの存在しない時代に開発された機動兵器だ。新兵器のモビルスーツを投入することで、敵艦艇を先んじて撃沈し、これにより敵の艦艇数を減じ、艦隊戦におい

て対等以上の数で当たり勝利を得るという図式だった。つまりザクⅡの想定する敵は、艦艇や宇宙戦闘機で、モビルスーツの高い機動性に対抗する術もなかった（想定していなかった）。このような機動面で圧倒的に有利な戦いを展開できるザクⅡにとって、主要兵装として採用されたのが、ザク・マシンガンとザク・バズーカということになる。

中でもザク・マシンガンは、大戦後期になると、新型のMMP・80マシンガンに更新されている例が見受けられた。これはザク・マシンガンの120ミリという口径よりも小口径の90ミリになっており、威力が下がる代わりに、小型軽量化を果たし、速射性や取り回しにも優れていた。おそらく敵モビルスーツ、すなわちジム相手にはこのMMP・80マシンガンが最適だったということだろう。この武装面だけを見ても、当初のザクⅡは対モビルスーツ戦を考えていなかった、というのが明らかだろう。

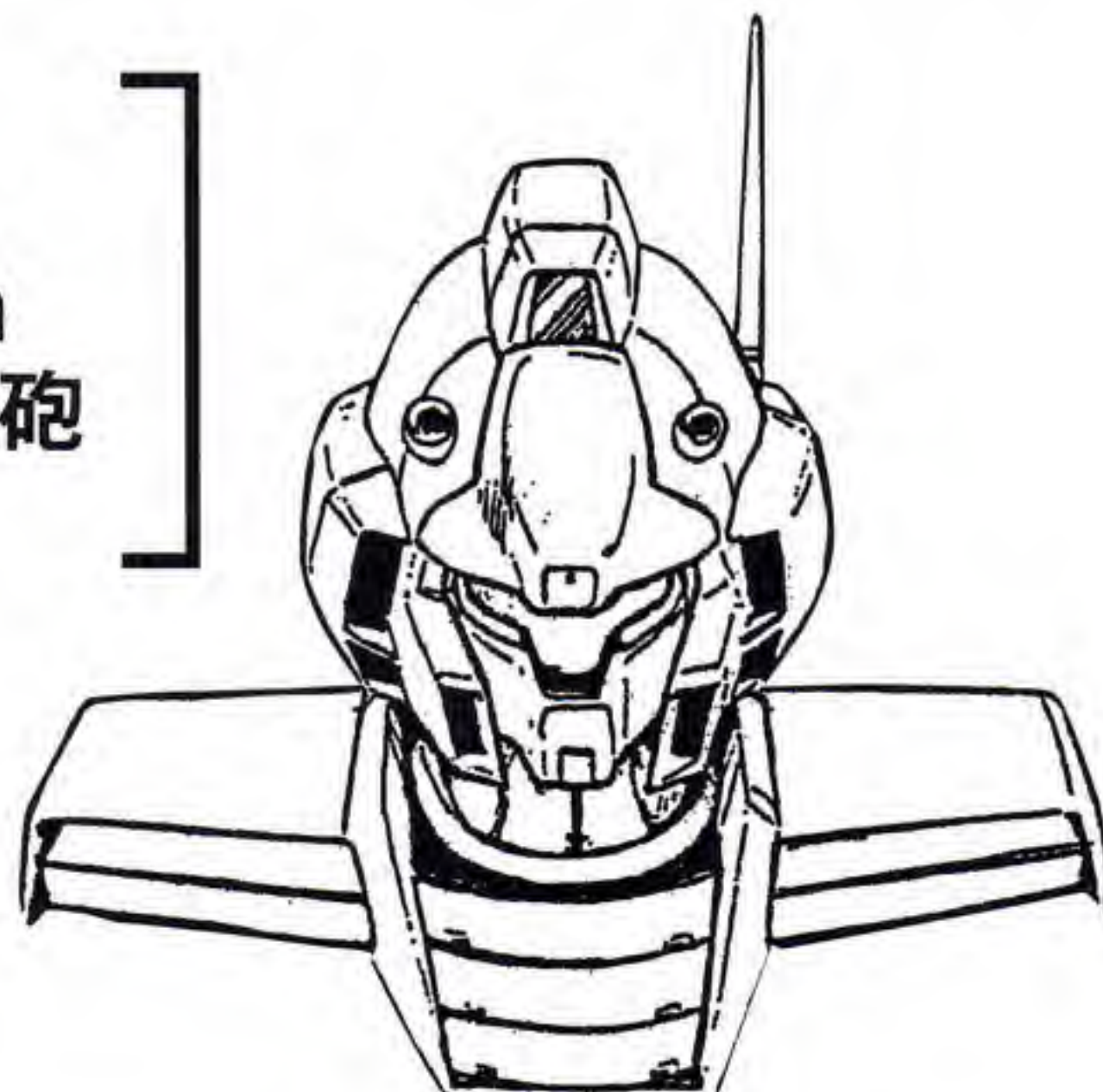
またジオン公国軍は、一年戦争中に格闘戦（対モビルスーツ戦）用のMS・07Bグフを投入しているが、これさえ敵にモビルスーツが存在しない時点での設計開発で、主兵装は電磁ムチともいえるヒート・ロッドと、指状のフィンガー・バルカンという思い切った仕様だった。この実体弾兵器の口径は75ミリと、ザク・マシンガンと比べて口径が小さく、そして砲身長も短い。裏を返すと、この程度の火器で敵モビルスーツに

頭部バルカン砲のちがい



RX-78
ガンダム

ジムの兵装① — 60mm バルカン砲



RGM-79N
ジム・カスタム

対モビルスーツ用というよりは掃射用

ジムの固定武装のひとつである頭部の機関砲は、原型機であるガンダムと同様に頭部の左右に装備されていた。これは60mmバルカン砲（頭部バルカン砲）と解説されている場合が多く、すなわち60mm口径弾を発射する多銃身機関砲（銃身本数は不明）ということである。

その特徴は至近距離において集中的に多くの砲弾を浴びせることが可能であったことだ。さらに頭部内蔵式ゆえ目標に向けて、センサー類を搭載した頭部を動かすだけで、ある程度の精度での射撃が行えた。

ただ、他の火器類と比べて有効射程距離が短く、装弾数そのものが少ないなど、いくつかのデメリットもあった。しかし、至近距離で命中すれば、重モビルスーツでさえ撃墜は可能であり、地上施設や戦闘車両に対する掃射用、もしくは牽制用の補助装備と考えれば、その威力は十分すぎるほど有効な火器といえるだろう。

対応できるとジオン公国軍は考えていたということだ。

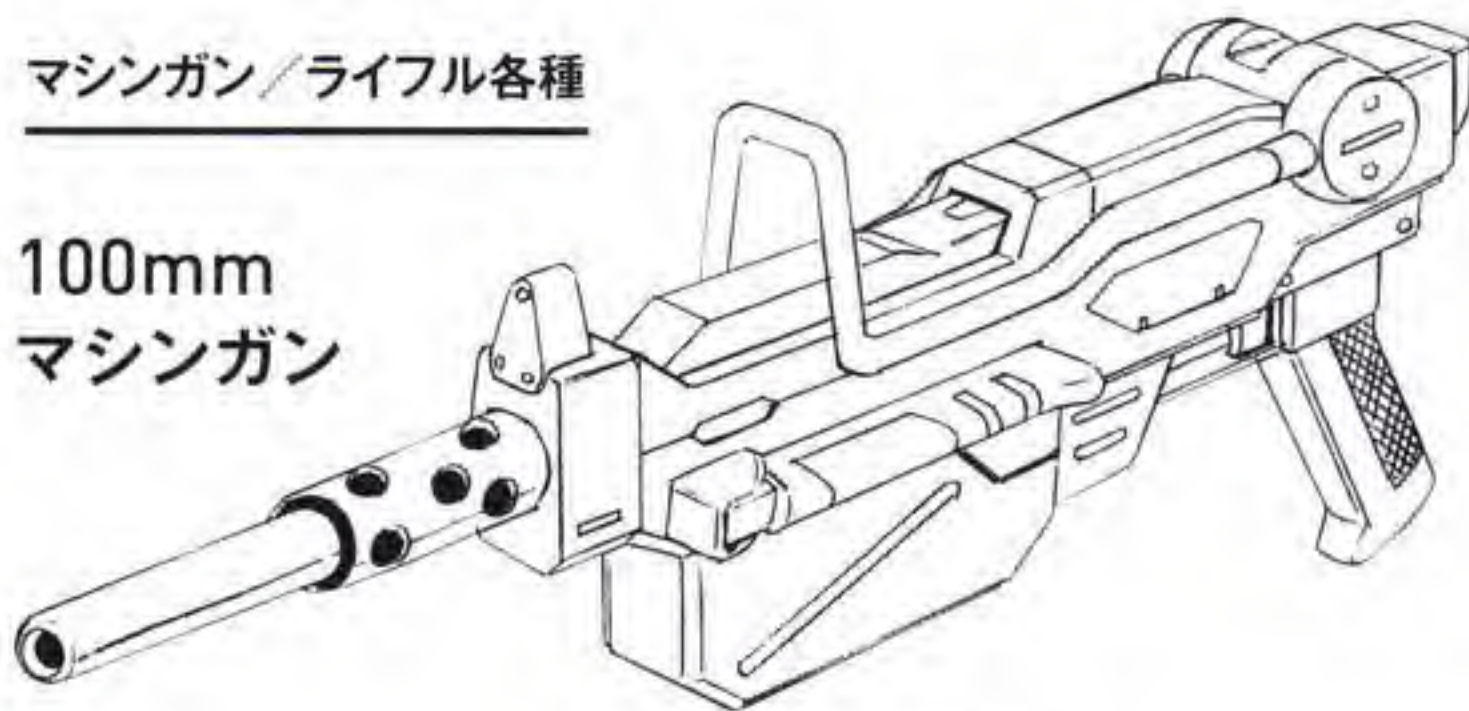
後々、対モビルスーツ戦が本格化した時分に投入されたグフの改修型であるMS・07B3グフ・カスタムが装備する3連装35ミリガトリング砲は先のフィンガー・バルカン（5連装75ミリ機関砲）より小口径ながら、おそらく威力は同等以上だったのだろう。このことから、対モビルスーツ戦におけるジオン公国軍の火器類の威力に対する考え方は、概ね想定通りだったと考えられる。

一方、ジムのビーム・スプレーガンの威力は、対モビルスーツ戦に必要十分であったことは、実戦が証明している。ジムはこのビーム・スプレーガンと、対艦や敵拠点などのより高火力が必要な任務に対しては、ハイパー・バズーカなどを使用する2本立てで、火力構成を考えていたのだ。実際、ジムの原型といえるガンダムでもビーム・ライフルとハイパー・バズーカが用意されていた。しかし、これは本来、ビーム・ライフルの火力でカバーできるもので、むしろ弾速の遅いであろうハイパー・バズーカの意義はあるのか？という疑問も沸く。

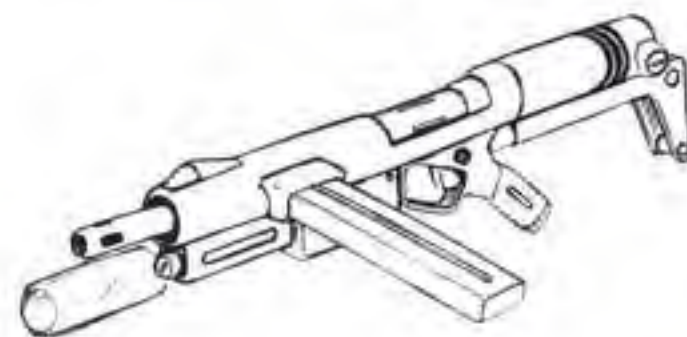
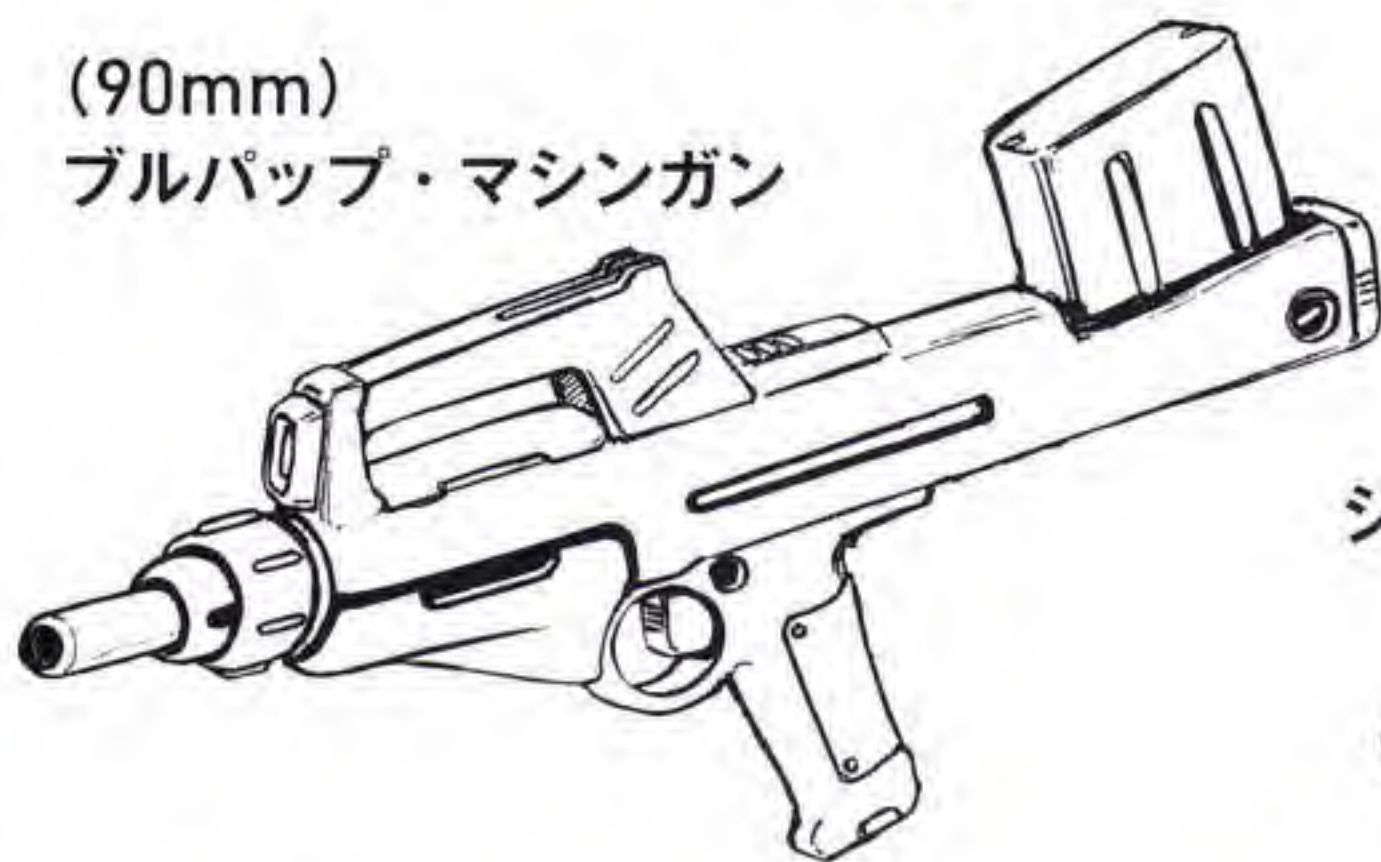
しかし、これはビーム・ライフルの弾数の少なさや、ビーム攪乱幕といった対ビーム兵器への対策という意味もあったはずだ。そうした理由に加えて、おそらく当初から実際に戦場に投入されるジムの武装体系、つまりジムの運用法に沿ったゆえに

マシンガン／ライフル各種

100mm
マシンガン

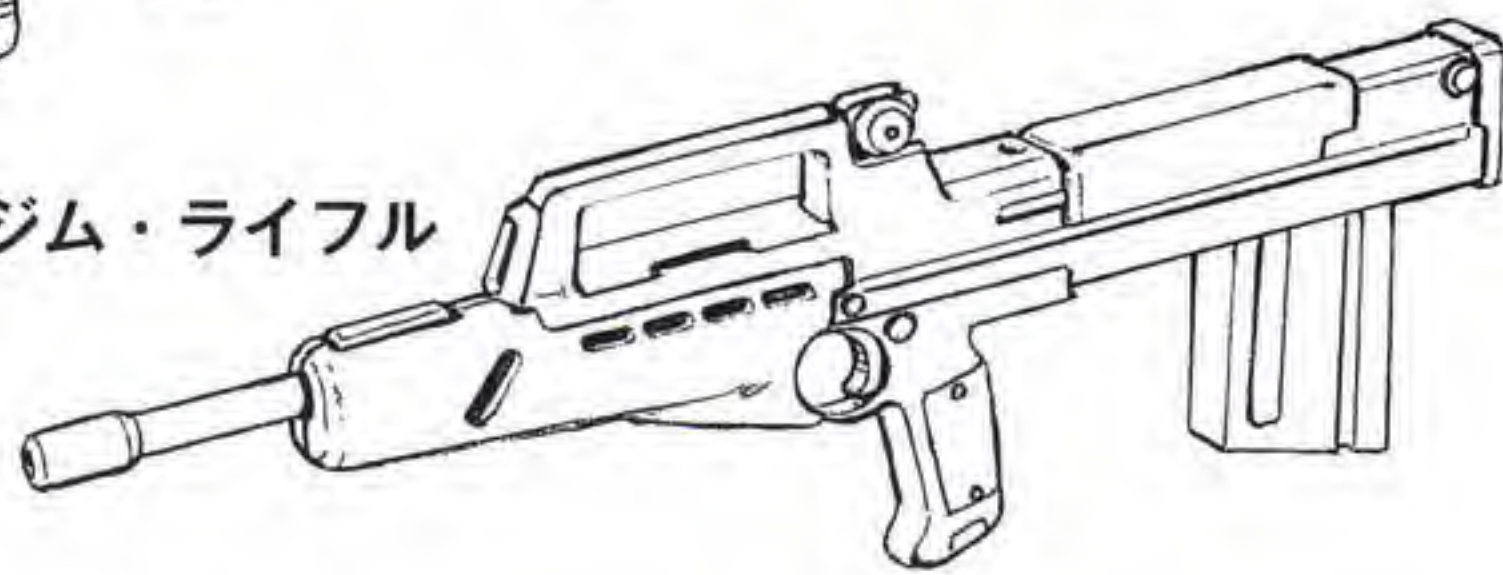


(90mm)
ブルパップ・マシンガン



専用マシンガン
(RGM-79D ジム寒冷地仕様用)

ジム・ライフル



ジムの兵装②
—
マシンガン

使い方次第で極めて汎用性が高かった

モビルスーツ用実弾兵器（ビーム兵器に対して実弾を発射する兵器の総称）としては、各種マシンガンがあった。口径も初期では100mm、後期になると90mmと変化する。これは使用する弾丸の性質や威力の向上により、小型化や装弾数の増加を狙ったものと思われる。こうしたマシンガン系火器類は、ビーム兵器に比べて調達価格も安く生産性に優れる他、使用する弾頭を戦車砲などの従来兵器との共用化を図れば、補給の面でも有利と考えられる。

ビーム兵器と比べて二線級兵器という印象だが、こと一年戦争において、敵モビルスーツの破壊には必要十分な威力で、さらに重く固い弾丸の運動エネルギーは、分厚い耐熱コンクリートといったビーム兵器には不向きな耐熱性の高い物体の破壊に長けていた。また山なりの弾道射撃を行えば（曲射）、例えば地形的に直接照準が不可能でも敵に打撃を加えられるなど、運用次第で極めて汎用性が高かったといえる。



ガンダムにも装備されたと考えるべきだろう。

モビルスーツへのビーム兵器装備は、革新的な出来事であった。ガンダムの装甲材であるルナ・チタニウム合金は、ザク・マシンガンの至近距離からの射撃にも耐えうる堅牢さを持っていた。だが、ビーム兵器の前にはほぼ無力といってよかった。この後、モビルスーツは宇宙世紀0120年代にビーム・シールドが実用化されるまで、攻撃力偏重の機動兵器であり続けた。

一年戦争以降でもジムの武装は小さくあるべき!?

79年の『ガンダム』は、85年に『機動戦士Zガンダム』が製作され、以降、数多くの作品が登場することになるが、このガンダムシリーズの「宇宙世紀」を舞台にした作品内の歴史は、そのまま「ジムの武装」の歴史であるという側面もあるといえるだろう。

一年戦争後を描く『Zガンダム』においては、ジムには近代化改修が施されてRMS-179/RGM-79ジムⅡとして登場した。このジムⅡは、装備火器もビーム・スプレーガンからビーム・ライフルに変更されている。

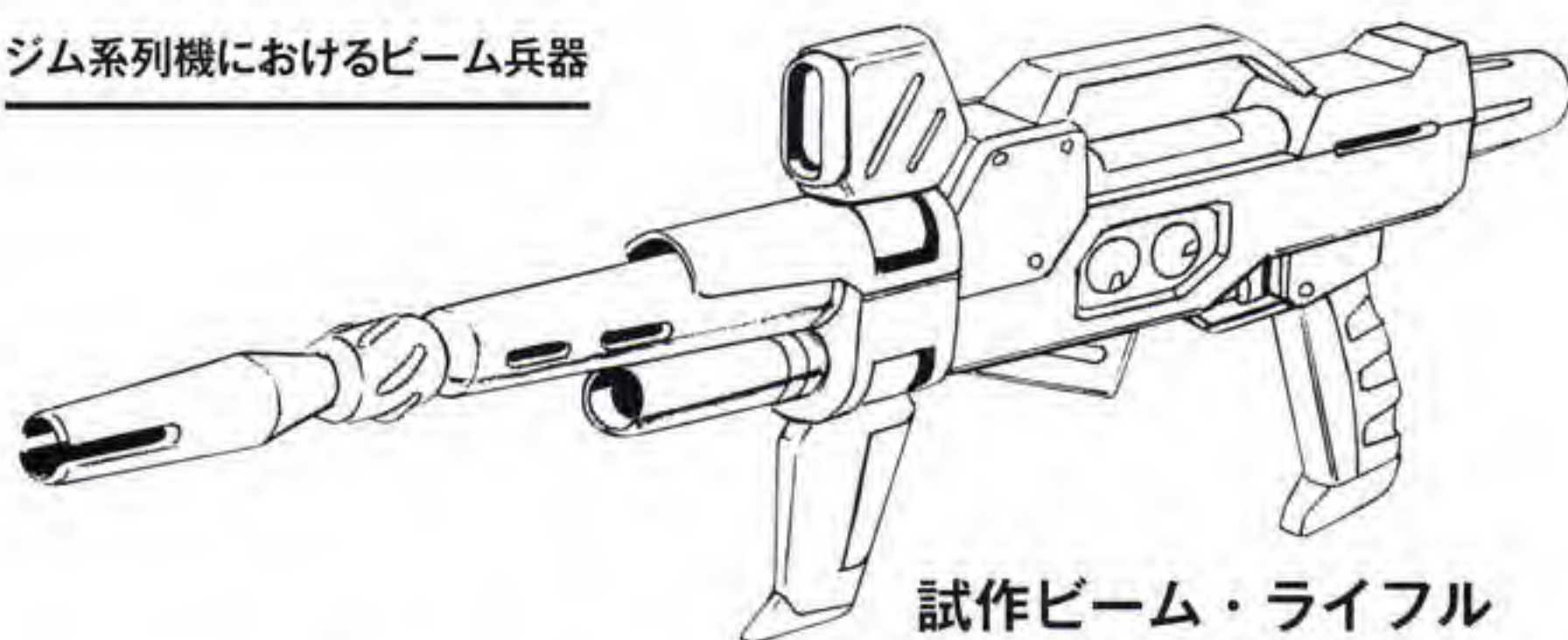
設定的にも、一年戦争から約7年が経過しており、ジムⅡや他のモビルスーツの性能は、一年戦争当時のガンダムを上回っており、ビーム・ライフルの装備は当然ともいえるも

のだった。

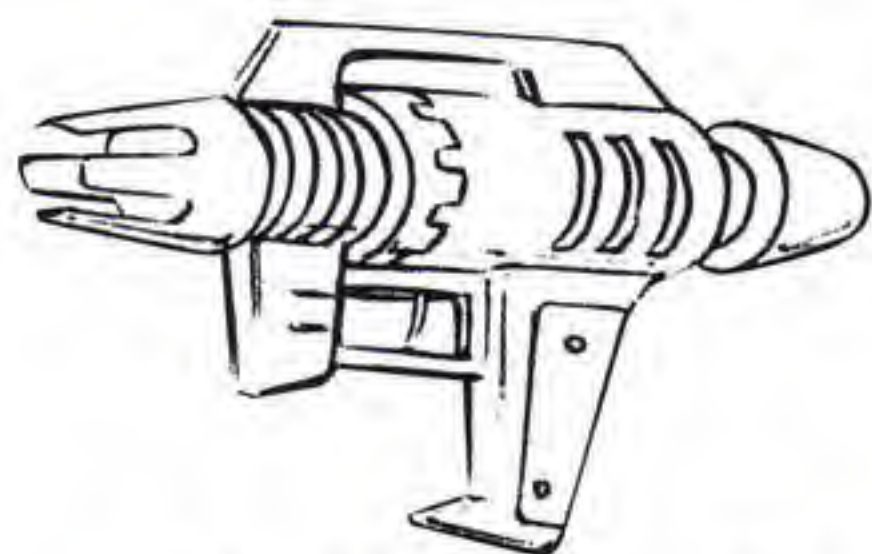
このジムⅡのビーム・ライフルの形状は、大きさはビーム・スプレーガンよりもひと回りほど大きいだけだが、ビーム兵器としての威力は十分なようで、この時代の多くの他機体にも採用されている。作中においても、RX-178ガンダムMKⅡや、MSZ-006Zガンダムといった主役機や、その周りの主要機体の武装が、従来までのビーム・ライフルと同等か、さらに大きく長い武器を扱うのと対照的に、その他の機体が携行する武器類は、映像上の対比を考えると、小型にとどめておくべきということなのだろう。

しかし、ここからが「ガンダム世界」の面白いところ。映像上では「主役と敵」にフォーカスするため、主役メカ周り、背景であるメカたちの間には、シルエットや形状などかなりの差が設けられている。しかし、性能スペック設定などの面では、その差はそれほど顕著ではないのだ。『Zガンダム』の時にはビーム兵器の出力も設定され、ジムⅡのビーム・ライフルは1・9MWであった。ちなみにガンダムMKⅡのそれは2・6MWで、それは戦艦の主砲とほぼ同等の能力とされ、ガンダムMKⅡは、それを状況に応じ出力を変更していたとされる。実際の使用時、ジムⅡのビーム・ライフルと同等の出力で扱うことが多かったと考えられる。

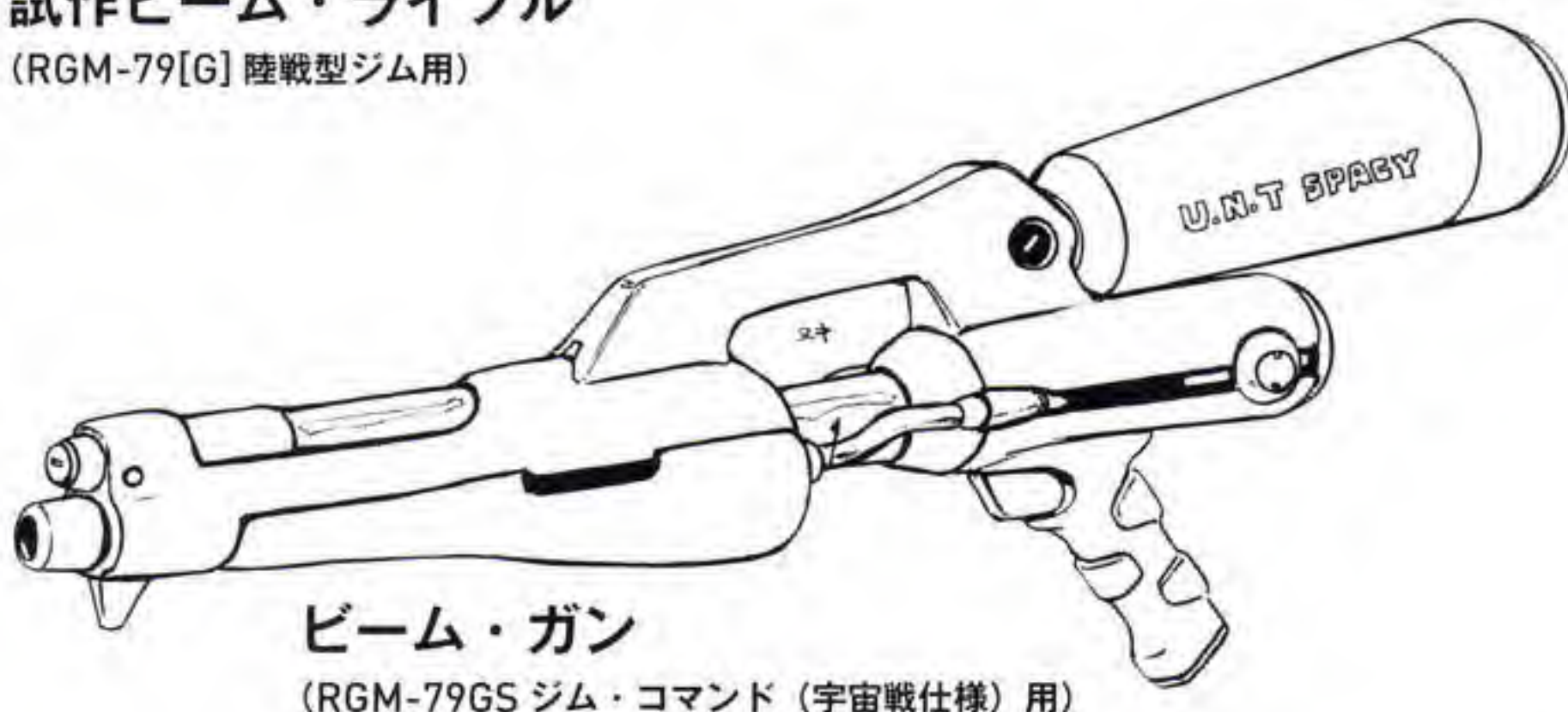
これがさらに『ガンダムZ』に



試作ビーム・ライフル
(RGM-79[G] 陸戦型ジム用)



ビーム・スプレーガン
(RGM-79 ジム用)



ビーム・ガン
(RGM-79GS ジム・コマンド (宇宙戦仕様) 用)

ジムの兵装③
—
ビーム兵器

近距離用装備のビーム・スプレーガン

ガンダム世界における花形の熱線兵器として、圧倒的な高性能を発揮することができた兵器。なおジムでは当初、ビーム・ライフルの装備が考えられていたとされる説もあるが、ガンダム系が使用するフルスペックモデルの量産が、技術及びコスト的に困難だったことを理由に、グレードダウンスペックモデルであるビーム・スプレーガンを装備するに至ったとされる。

これは高精度ビーム収束機能を省略することでビームをある程度の範囲に拡散放出するショットガン的な機能を持たせていた。近接戦闘及び集団突撃などでは相応の効果が期待できたが、敵側に長射程兵器があった場合、アウトレンジ (味方の射程外から狙い撃ちされること) される危険性が常につきまとっていた。この対策として、ジムを補完する兵器として、キャノン砲を装備したRB-79ボールが同時に配備されている。



登場したRGM-86RジムⅢのライフルとなると、ジムⅡとほぼ同型のライフルなのだが、実際の最大出力は2・8MWと、ガンダムMK-Ⅱのそれを上回っている。

実際のジムⅢは、その性能スペックに目を向けると推力重視の機体であることがわかる。機体性格的にも白兵戦主体というより一撃離脱を旨とする火力支援機的な性格の機体とも考えられ、肩部のミサイル・ポッドや腰部の大型ミサイル・ランチャーのように、最大級の火力を装備することに意味があったと思われる。

こうした設定などは、物語上の作劇では触れられるケースはほとんどなく、関連書籍や雑誌媒体で紹介される傾向が強かった。そうした設定面における、モビルスーツの機体ス

ペックなどは、映像作品のように常に主役メカ中心 (偏重) ではなく、一般機 (量産機) との性能差は、さほど乖離がない、というのも特徴といえるだろう。

これは『ガンダム』、そして宇宙世紀という世界観の醍醐味は、ある種のリアリティに準拠している必要がある、ということなのだろう。つまりコアなファン層がそれを求めているということであり、極端に荒唐無稽なものにはできない (『ある程度の論理的根拠が必要』) ということだ。コアなファン層は、映像表現における快感と、各種設定による差を、各々の想像で補完しながら、アレコレ考えるのだ。そういったある種の振れ幅の大きさが、ガンダム世界の魅力であるともいえる。

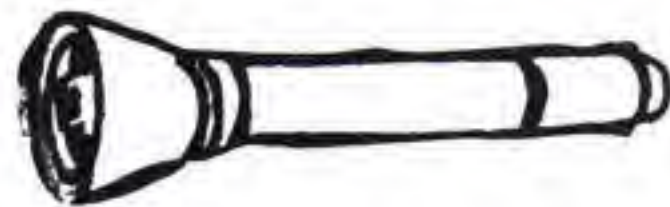
ジムの兵装④ — ビーム・サーベル



陸戦型ガンダム／
陸戦型ジム



ジム改など



ジム・コマンドなど

ガンダム
NT-1 アレックス

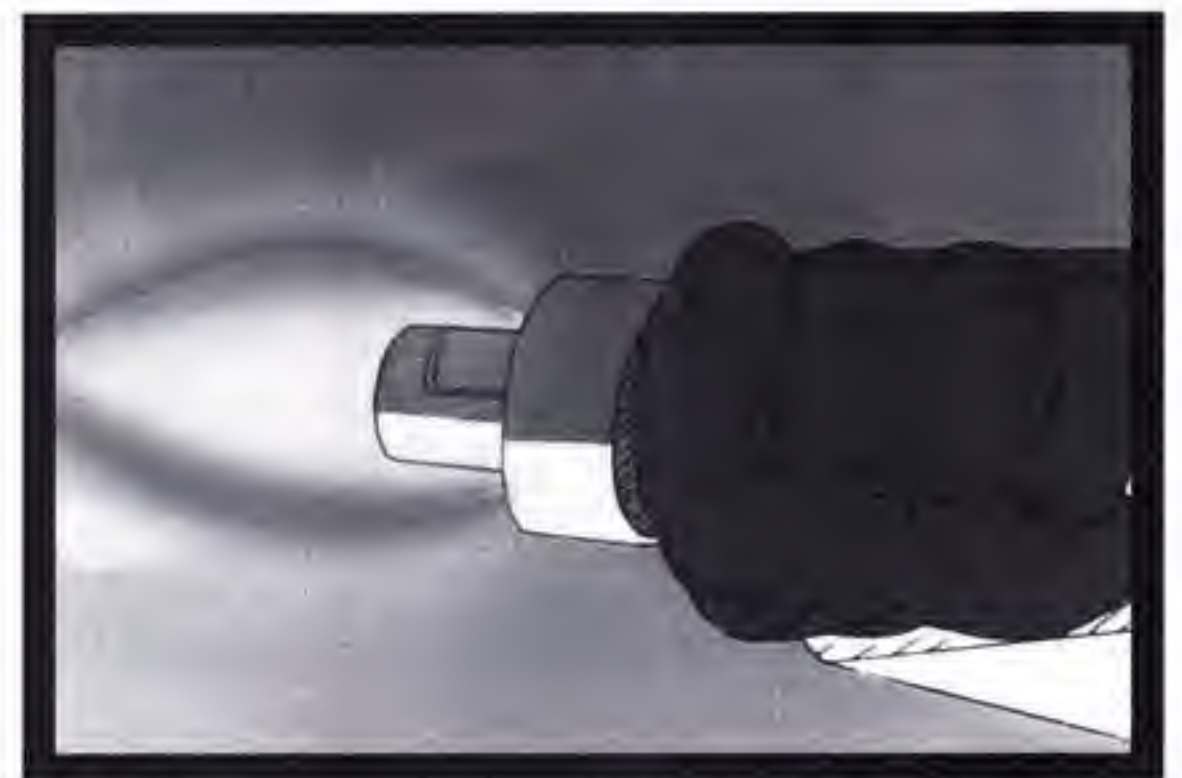


熱に対して強い素材には効果が薄かった!?

白兵戦における格闘用兵器であるビーム・サーベルは、ザクⅡやドムを一刀両断できるほどの圧倒的な破壊力を持っていた。

ジムでの装備数は、2本装備していたガンダムに対し、減じて1本のみ。これは2本を使用する状況がそれほどないこと、機体の軽量化、生産工程の簡易化などの理由があると考えられる（指揮官機と呼ばれるジムや、ジム・コマンドなどの機体では、一部2本装備する例もある）。

なおビーム・サーベルの刀身に相当する部分はあくまでプラズマ、すなわち気体の一種だったことから、対象物がセラミックやコンクリートといった耐熱性の高い構造物に対する効果は、金属ほどには期待できなかったと思われる。通常ならば、同じく敵側が所持する同様の格闘戦用兵器に対して、刀身同士を斬り結ぶといった動作も不可能なはずだが、ガンダム世界においては、そのあたりは少々曖昧に描かれている。



OVA作品で充実するジム武装 時代の変化で必要な存在!

『ガンダム』『Zガンダム』『ガンダムZZ』といった一連の富野由悠季監督作品の放送後、80年代終わり頃から90年代にかけて、「宇宙世紀」と「一年戦争」周辺の時代を描いたOVA作品が、富野監督以外のクリエイターによって映像化されている。それが『機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争』（89年）、『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』（91年）、『機動戦士ガンダム 第08MS小隊』（96年）の3作である。

モビルスーツという視点から、これらの作品を見た時、その作品世界がこれまでと比べてより細密になったという特徴が挙げられる。その嚆



矢は『ポケ戦』とっていいだろう。この作品はオリジナルの『ガンダム』放送から10年経った時点での製作で、その間、世間では「ガンダムブーム」を経て、「リアルロボット」作品が世に溢れたこともあり、オリジナル作品のままのメカ世界観や意匠では、時代の要求に対応できないのは明らかだった。

源流タイトルであるからこそその悩みといえるが、この作品でモビルスーツは、『ガンダム』の物語内でも実はこうだったという考えのもと、アニメロボットのな「リアル」を追求した姿でモビルスーツが描かれた。

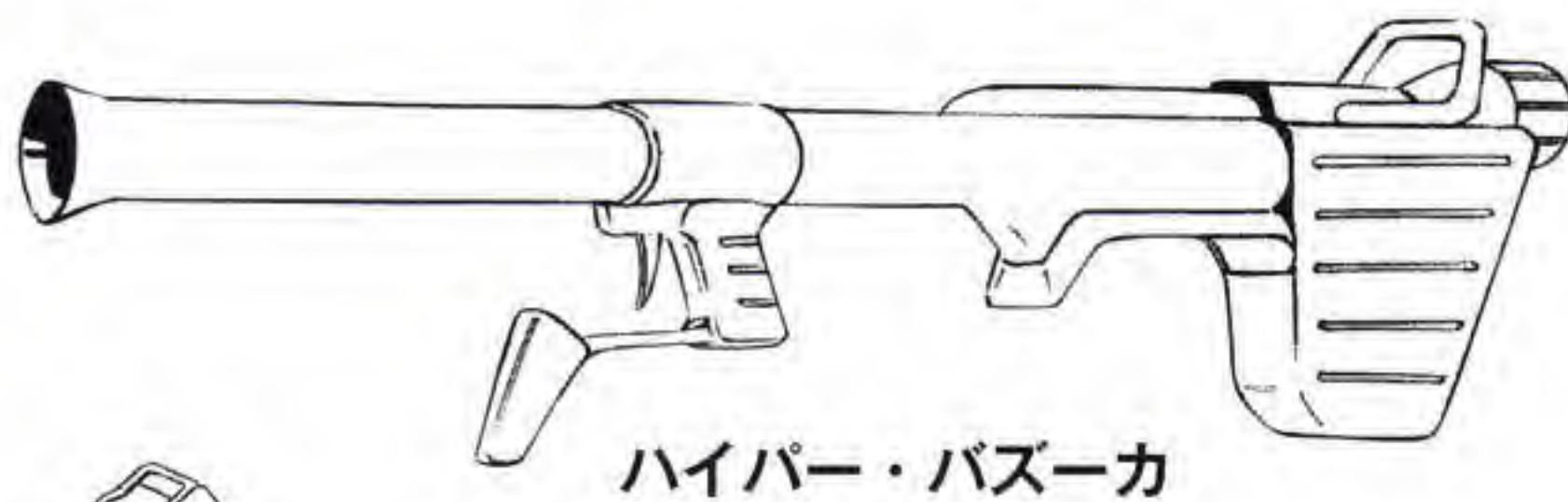
これはある意味、新時代の始まりを意味した。製作的には70年代後半と80年代後半で、アニメーション製作の技術も上がり、その時代に即した映像が必要ということと、『ガンダム』というタイトルが、オリジナル時はキャラクターとドラマが人気の中心にあったのに対し、モビルスーツ（及び戦争IIアクション描写）に人気の比重が移っていったという背景もあった。

ここである意味、もつとも手が入られたのが「ジム」であった。それは、『ガンダム』の世界観を富野監督から離れてリアルさを獲得する」という意味合いにおいても、ジオン公国軍モビルスーツに対し、地球連邦軍側のモビルスーツ、すなわち「ジム」を対立するな存在として確立することは必須ともいえたのだ。

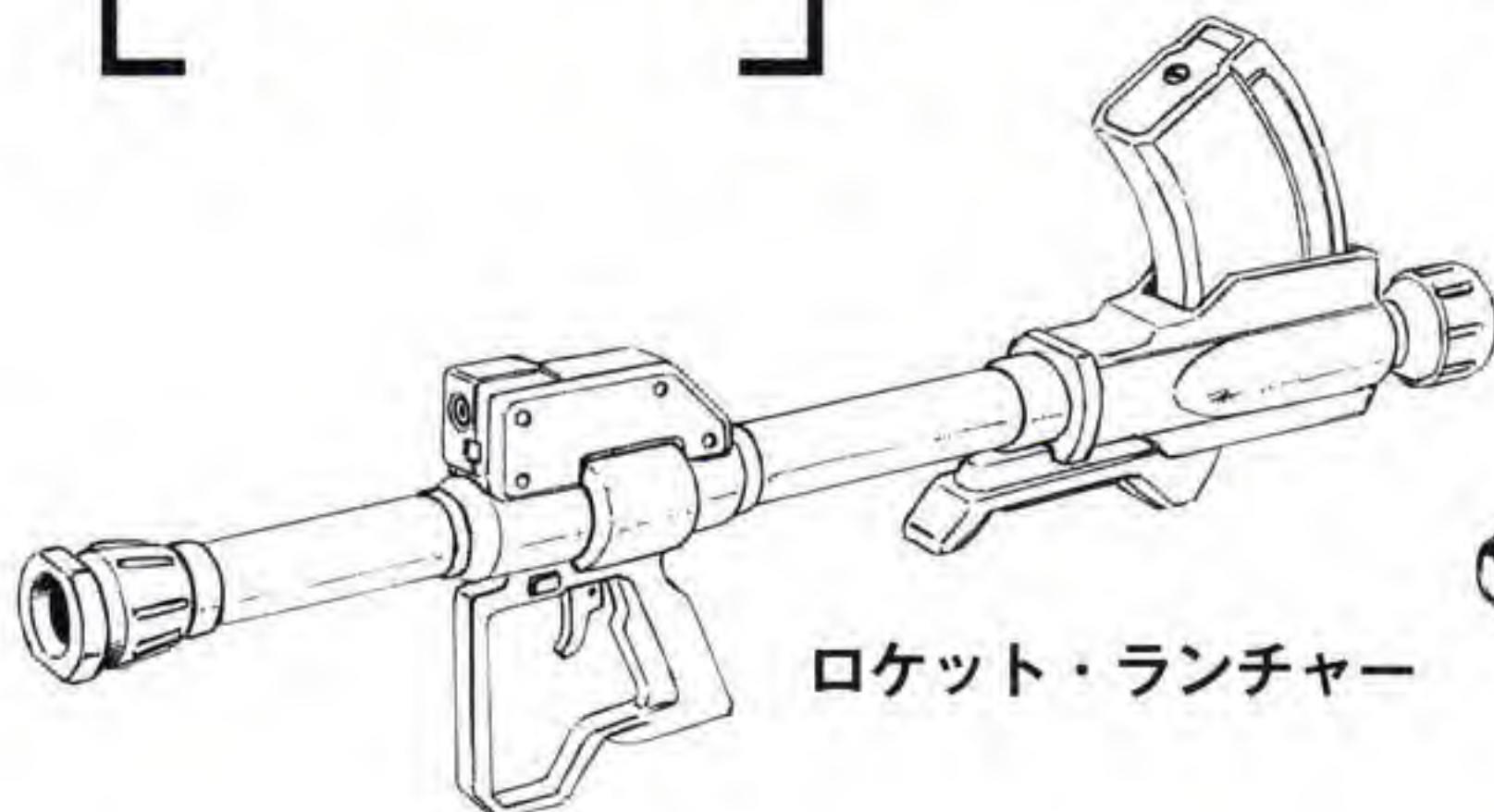
ここで「ジム」には数々のバリエ

ジムの兵装⑤

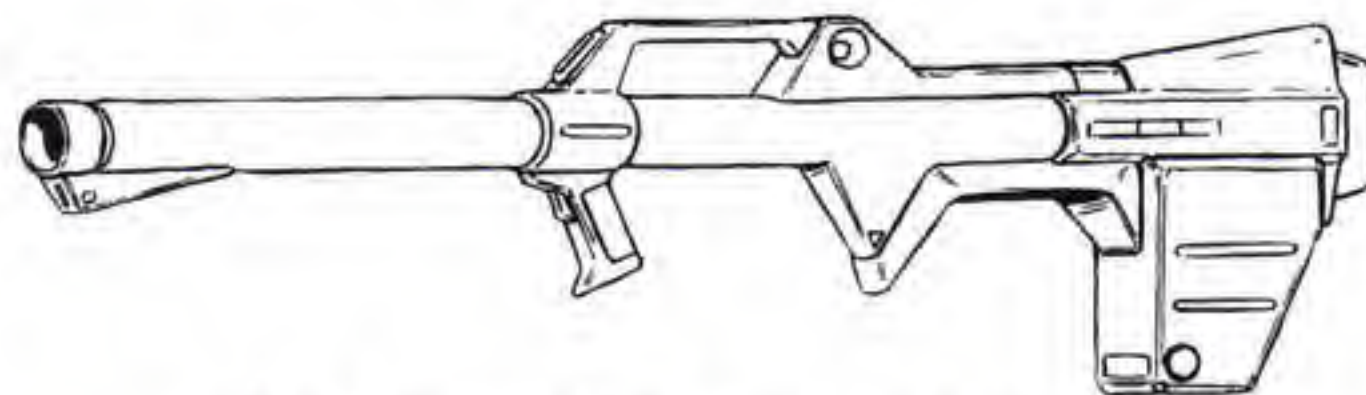
バズーカ／ランチャー類



ハイパー・バズーカ



ロケット・ランチャー



ハイパー・バズーカ (U.C.0083 時)

大型の目標に対して有効だった

ガンダム世界で描かれるバズーカ類は、第二次世界大戦中に使用された携帯式対戦車ロケット砲＝バズーカに似ていたための呼称に過ぎず、メカニズムとしては、携行可能な低圧キャノン砲といえるだろう。

地球連邦軍側のハイパー・バズーカの口径は、320mm（もしくは380mm）と、かつての戦艦の主砲に匹敵する大口径砲で、その威力も相当なもの。むしろ単に敵モビルスーツの装甲を破る、という目的には宝の持ち腐れで、対艦や大規模構造物用の兵器といっていーいだろう。

こうした火器類は安価で製造も容易。破壊力、信頼性も高く、弾種を使い分ければ多彩な戦術への対応が可能という大きなメリットがあった。一方、長射程という意味では、圧倒的な性能を誇るビーム兵器（ビーム・ライフル）が一般化する過程で、次第に使用範囲は制限されていった。だが宇宙世紀0080年代後半以降、ビーム兵器が一般化した戦場でも一定の需要は存在した。



ーションが誕生する。ここで面白いのはどのジム系機体もビーム・スプレーガンを持っていないことだ。これは、やはり、一方の陣営の機体としてピストル状のシルエットをそのまま扱うと、「戦争」をテーマとして描くには、弱く見えかねないという恐れがあったのだろう。RGM-79GSジム・コマンド（宇宙戦仕様）の持つビーム・ガンは、ビーム・スプレーガンの下流にあるデザインといえるが、そのシルエットは大型化されている。また、ジム系列機に実体弾兵装を取り入れたのも新しい試みだった。それは、北極基地の宇宙港などを防衛するRGM-79Dジム寒冷地仕様や、コロニー内で戦うことを想定したRGM-79Gジム・コマンド（コロニー戦仕様）といった機体である。これは「ビームでは十分に威力が発揮できない」、「ビーム兵器では威力が強すぎる」という場面での使用で、運用する環境によって携行火器の換装を行う（選択する）、というリアリティ描写であった。

続く『0083』においては、登場するジム系の機体は、ほとんどが実体弾兵器を持ち、デザインも『ボケ戦』に登場したものを踏襲している。デザインラインとしても作品の繋がりを感じさせる配慮だった。物語設定的にも宇宙世紀0083年は『Zガンダム』に登場した、第二世代機の登場の前時代であり、ビーム兵器よりも技術的信頼性の高い実体弾兵器の方が扱いやすい（＝安定供

給される）、という時代背景を上手く表現している。

ジム系の機体にガンダムと同様の大きさやシルエットを持つ武器を持たせて、ビーム兵器を使用できるガンダムとの差を見せるためには、実体弾兵器を主軸に据えるというのは、いいアイデアであり、また「戦争映画」的なリアリティを持つ映像としてもよくフィットしていたといえる。続く『08小隊』も同様に、実体弾系の兵器が中心となり、ビーム系兵器は限定的な使用に留まっている。

これは本作が『ボケ戦』や『0083』から一転して、基本のメカ設定は微妙に異なり、また物語の舞台が地上におけるジャングル戦を中心に描かれていたことと不可分ではない。主人公機であるRX-79[G]陸戦型ガンダムは、性格的にはガンダムよりもジムに近い機体であり、物語の性質上も実体弾系の兵装が中心であるのはもっとも話である。またモビルスーツを「歩兵的」に描いていることから、使用する武器のシルエットや対比も歩兵的になるのは当然といえた。

今も続く「ガンダムシリーズ」において、宇宙世紀、こと「一年戦争」周辺を舞台とする作品は、作品が製作される時代によって、内容や姿勢などが変化していくものである。それはドラマだけでなく、メカ設定でも同様だ。中でもジムの武装は、そうした時代の変化を色濃く反映した鑑といえるのである。

ジムはなぜ 長期にわたり 主力機として 運用されたのか!?

文・小高正稔

序論

連邦軍唯一の 主力MS ジム

U.C.0079～U.C.0100年代前半までの約20年以上にわたって、地球連邦軍唯一の主力MSとして活躍したのは、RGM・79ジムとその発展型である、RMS・179 RGM・79RジムII、RGM・86RジムIII、要するに「ジム」だった。もちろん一年戦争期以降から第二次ネオ・ジオン戦争期までの間、地球連邦軍は多数の「量産MS」を開発し、実際に運用しているから、ジムをもって「唯一の主力MS」というのは極端だという批判はあるだろう。

だが現実問題として、一年戦争後のグリプス戦役や第一次ネオ・ジオン戦争時にかけて開発されたMSA・003ネモ、MSA・007ネロ、RMS・154バーザムといった機体は、ジム系列機にとつてかわるほどの規模で普及することなく、ヘタをすれば性能的に劣位のジム系列機より先に退役が進められた可能性さえある。

結果的に地球連邦軍がジムに変わる主力機を得るのは、U.C.0090年代にRGM・89ジェガンの部隊配備が始まって以降のことであり、そうした状況にあつてもジェガンが部隊に行き渡るまで、ジム系列機は

地球連邦軍のMS戦力の一翼を担い続けたことは否定できない。本稿では、多数の高性能量産機が存在しながら、なぜジム系列機が20年以上にわたって主力機であり続けたのかを考察してみたい。

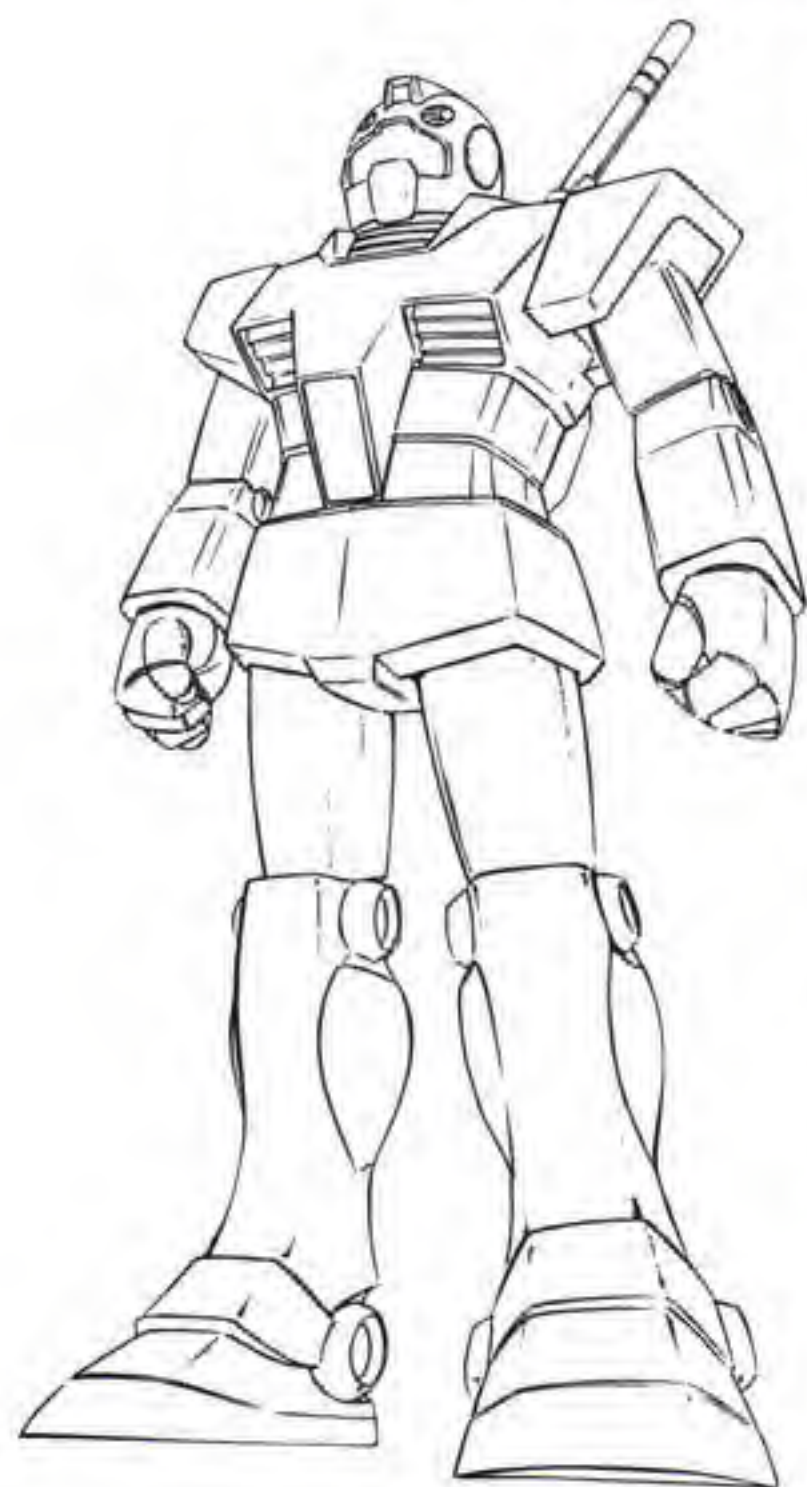
本論

ガンダムのコンセプトを受け継いだジム

周知のようにRGM・79ジムは、RX・78-2ガンダムの量産タイプである。したがってジムを語ることは、ある程度までガンダムを語ることもでもある。その上で、MSとしてのガンダムの特徴を語るとすれば、



ジオン公国軍と地球連邦軍におけるMSコンセプトの違い



地球連邦軍

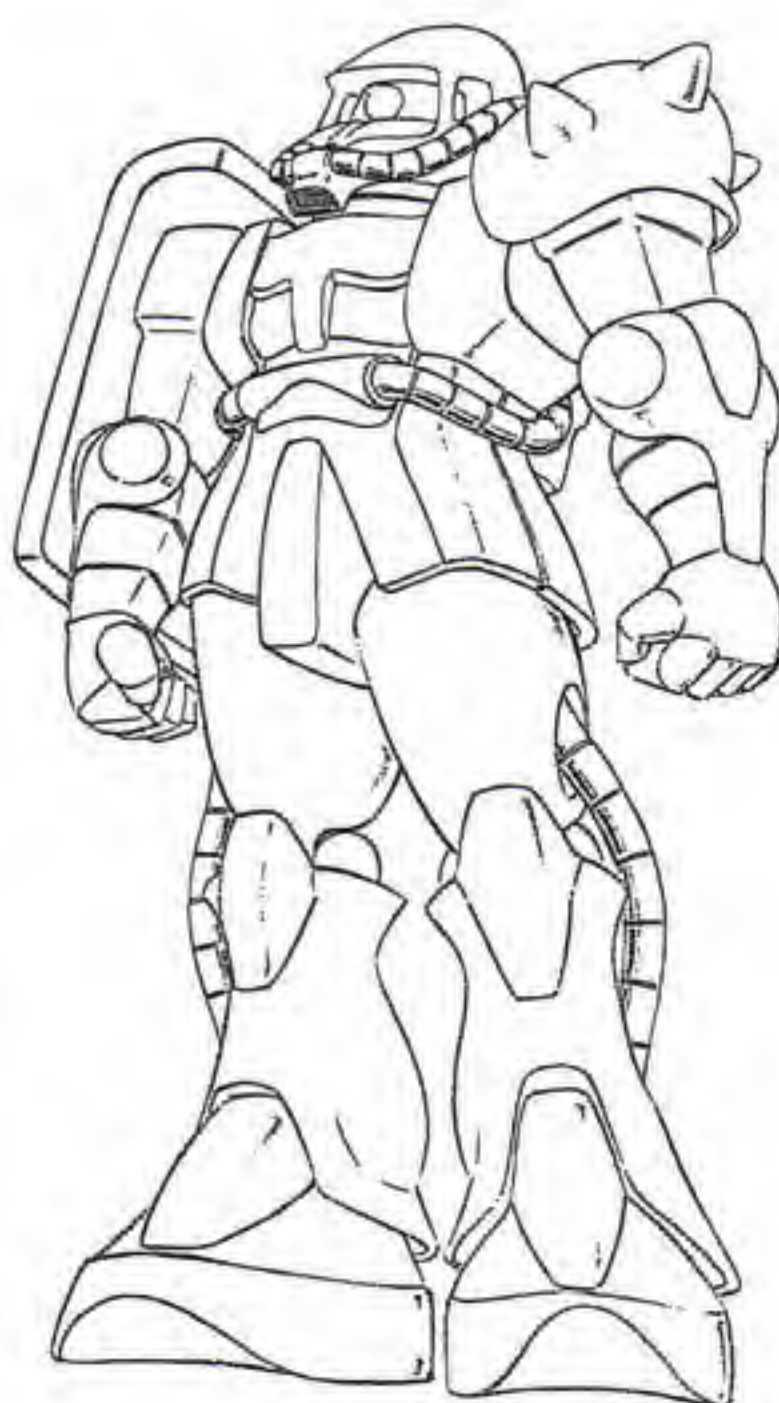
RGM-79

ジム

コンセプト

- 対MS戦を主眼にした機動性の確保。
- 対MS戦＝白兵戦での防御装備の導入。
- 携行式メガ粒子砲の実用化と円滑な運用。
- MSの機能性の維持。

そもそも陣営内では当初、MS自体の有用性に懐疑的だった連邦軍。だが、一年戦争緒戦の敗北を経たことで、180度方針転換をするに至った。MS開発でのアドバンテージは低いながらも、当初から想定する敵を確実に設定してあることがジムの強さの秘密といえるだろう。



ジオン公国軍

MS-06

ザクⅡ

コンセプト

- ミノフスキー粒子下の環境においての有視界戦闘に対応。
- 対象となる敵は基本的に宇宙艦艇や宇宙戦闘機。
- 携行火器の換装による柔軟な運用性（戦術面）。
- コロニー内での活動（コロニーのインフラに抵触しない）。

戦力的に乏しいジオン公国軍が数的な不利を解消するために導入した新型機動兵器のひとつがMSである。当然ながら、前提条件として敵対勢力がMSを実用化していた場合、こうしたコンセプトそのものが成立しない。本来の新型兵器というのは、ミノフスキー粒子が該当する。

端的に言って「史上初めて、対MS戦闘を念頭において計画、設計されたMS」ということになるだろう。この基本コンセプトは、明確にガンダム以前のMSと一線を画している。ジオン公国軍のMS・06ザクⅡは、史上初の本格的軍用MSであるが、その基本コンセプトは「特殊な環境下において有視界戦闘で戦う対艦攻撃機」に近いものであり、本質的には対MS戦闘を考慮した機体ではなく、地球連邦軍のV作戦における開発MS群の中でもRX-77・2ガンキャノン以前の機体では、対MS戦（「白兵戦」というコンセプトは実現できていない（そもそも各機で運用コンセプトをわけているので、当然ともいえるが）。

もっともザクⅡが対MS戦を十分に考慮していない点を、ジオン公国の見通しの甘さだというのはアンフェアだろう。そもそもジオン公国における、ザクⅡMSの開発動機は、戦争の非対称化が狙いで、つまりミノフスキー粒子散布下の有視界戦闘という、従来の戦術的常識にない局面において、従来型装備の地球連邦軍艦隊の撃破を目的とするものだからだ。これが地球連邦軍サイドに連邦製MSが十分に整備されている状況であれば、MSを主兵力とするジオン公国軍の対地球連邦戦略は成立しないのである。

それはさておき、ガンダムの機体コンセプトが対MS戦であると理解すれば、その性能的な優位性も理解



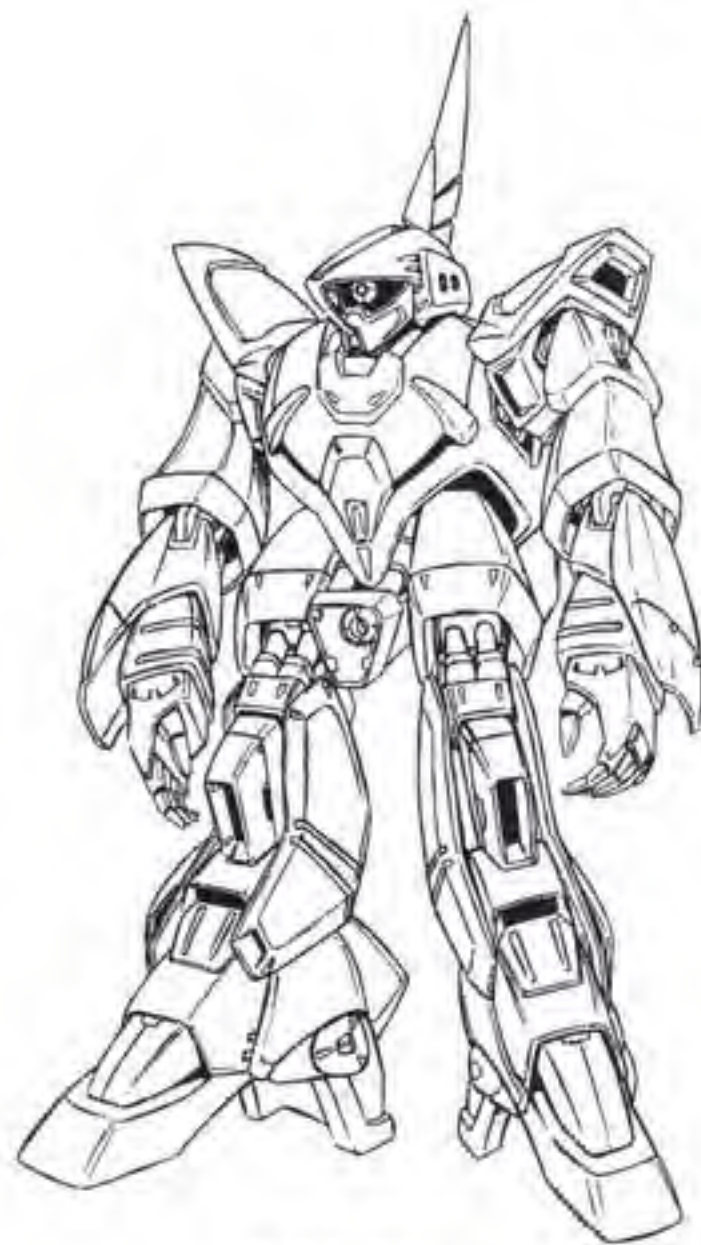
できるだろう。確かにガンダムには、高性能な自己学習をする教育型コンピュータや、パイロット（および戦闘データ）の生存性を高めるコア・ブロック・システム、強靱なルナ・チタニウム合金による新型装甲、強力な携行ビーム兵器（小型メガ粒子砲）といった、地球連邦軍の技術面での優位性をアピールする特長があるが、こうした要素のいくつかが欠けていたとしても、ザクに対峙したガンダムは、優位に戦闘を進めることができたはずだ。なぜならガンダムは、その機体性能を「18メートル級の人型機動兵器の撃破」に特化させていたからだ。ある意味、ガンダムとザクの対決は、「新型戦闘機」と「多少は空戦力のある攻撃機」の戦いのようなものである。

サイド7での初の実戦以降、ガンダムの記録した戦果は、この基本的コンセプトの正しさを証明している。MSの存在が当たり前になった戦場では、MSはまずMSと戦うのがセオリーとなり、MS同士の戦闘は頻発する。そうした状況でガンダムはザクを圧倒したのである。

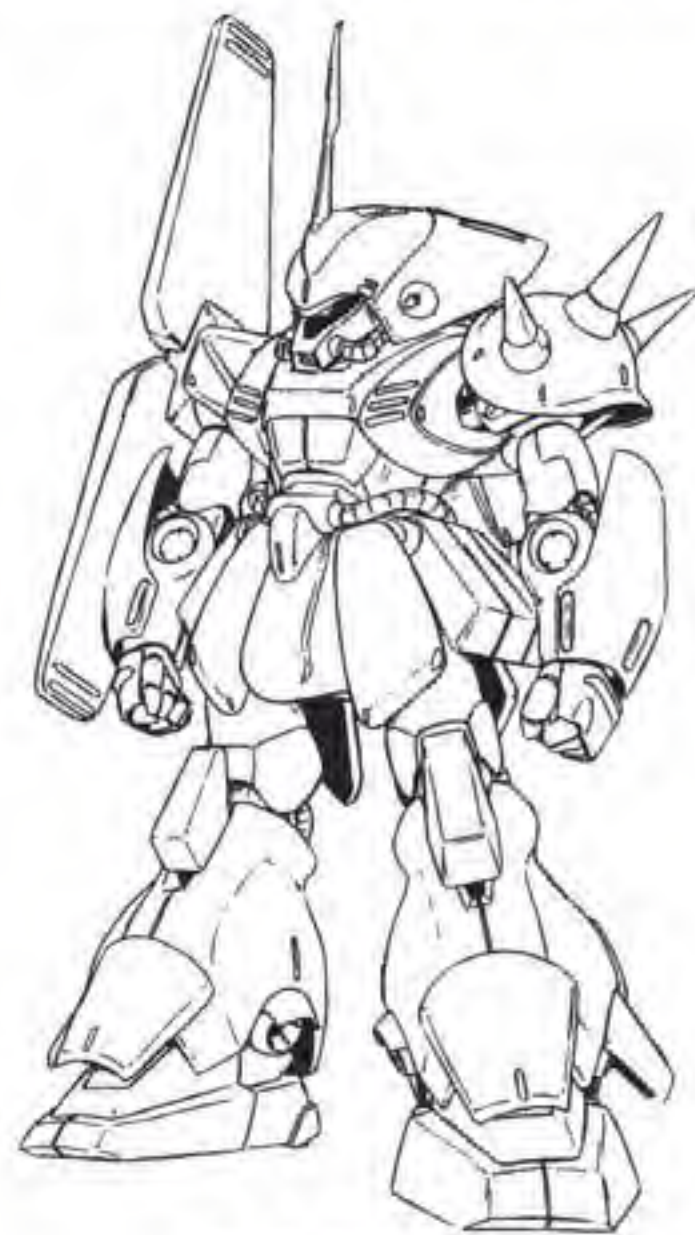
こうした状況は、史実における戦車戦を想起させる。戦間期の日本陸軍は、戦闘力が高いが高価な戦車は、戦場において攻勢中心に投入されると予想した。要するに、やたらめったに両軍の戦車同士が交戦することはないだろう、と考えていたのである。だが昭和14（1939）年のノモンハン事件では、機動力のある戦車は攻防共に有力な兵器であるため、戦前の想定を超える頻度で戦車戦が発生した。日本戦車の低火力、弱装甲が批判されがちなノモンハンの戦いであるが、実際の日本陸軍はこうした点を極端に致命的な問題として見ておらず（現実問題として、ノモンハンの戦いに投入された戦車の中でもっとも装甲が厚いのは九七式中戦車である）、むしろ予想以上の頻度で発生する戦車戦にショックを受けている。

ガンダムは対MS戦闘の戦場における重要性を正しく理解した上で基本コンセプトが設定されており、ガンダムの量産機であるジムにもこれは当然として継承されていた。ジムはガンダムの戦時量産機ではあったが、ガンダムの設計を基本的な部分

グリップス戦役期にみるジム系列機以外の量産 MS



RMS-154
バーザム



RMS-108
マラサイ



MSA-003
ネモ

ネモはエウーゴで、マラサイ、バーザムはティターンズで運用されていた機体だ。マラサイはエウーゴの後援組織であるアナハイム・エレクトロニクス社が開発した汎用MSだが、政治取引に利用される形でティターンズに譲渡された。バーザムはニューギニアの工廠で開発が行われている。ただ、いずれの機体もジム系列機にとってかわる存在にはなりえなかった。ただU.C.0090年代後半に、ネモなどは、地球連邦軍の機体として制式採用されている。



で受け継ぎ、その機体性能は、第一に対MS戦に置かれていた。ジム系列機が長期間にわたって命脈を保ったのは、このためである。対するザクⅡもまた一年戦争を代表する傑作機であり、相当数の機体が生産され、戦後、地球連邦軍に接收された数も少なくないと思われるが、同軍における再利用の例が少ないのは、ザクⅡが本来対MS用兵器でないからだ。戦後の地球連邦軍は、予算上の問題や技術習熟のため、旧ジオン公国軍MSの再利用も行っている（終戦時の新鋭機MS・11「アクト・ザク」や地球連邦軍に類似コンセプトのないMS・07H「グフ飛行試験型」、MS・17「ガルバルディア」の再設計機、RMS・117「ガルバルディアβ」の制式化など）にも関

わらず、ザクⅡの再利用は、派生機の水陸両用型や訓練部隊での運用に限定される。こうした面からも、コンセプトの古いザクⅡの系列機は、地球連邦軍にとって価値のない機体だったのだろう。MSの存在が前提の戦場では、ジムは生き残っても、ザクⅡでは生き残ることができなかった。それは単純にジェネレーター出力や装甲厚、携行兵器の性能ではなく、機体の基本的なコンセプトに起因したのである。ジムは一年戦争後の戦場に立つ、最低限の基準をクリアした最初の量産機だったのだ。

外観の差異と互換性 「規格」としてのジム

ジムはガンダムの量産型として計画された機体だが、戦時下に各地の生産拠点で量産が進められたこともあり、外観にはかなりのバリエーションがある。これは異なる生産拠点で同時に生産立ち上げを行ったためだろう。平時にくらべて準備期間の少ない戦時の大規模生産では、生産拠点ごとに調達できる資材や加工技術の差異などによって、外観も含めた仕様違いが生じることは珍しくない。これは史実でも、短期間に大量の生産が行われた米国のM4シャーマンやソ連のT-34などで確認できる。シャーマンの例では、生産メーカーの大型製造能力の有無などによって、铸造車体と溶接車体、铸造と溶接を併用したハイブリッド車体が混在しているが、これは複数の工場

生産を立ち上げるために必要な措置として許容された。車体がどうであれ、装備する砲やエンジン、トランスミッション、足回りや無線機などが共通化され、互換性が担保されていれば、補給や修理、あるいは乗員の教育といった運用コストでの負担は生じない。外観が異なっても、運用面では2種類の戦車がある、というわけではないのだ。

またこれとは逆のアプローチとして、実現はしなかったが、ドイツではパンターとティーガーの発展型で、転輪などの部品共通化が計画されていた。この場合は、車体（装甲）や搭載砲は異なるが、足回りなどの消耗品を共通化することで、生産や補給の負担を軽減する計画である（例えるならジオン公国軍の統合整備計画だろう）。

こうした例からもわかるように、RGM・79[G]陸戦型ジムやRGM・79Gジム・コマンド、RGM・79[E]ジム初期型などは、ジャブロー工廠で生産されたジムとはかなり外観が異なるが、主要部分のフレームに共通性があるのだろう。主要部品の互換性に問題がなければ運用上は問題ない。ホワイト・デインゴ隊をはじめとして、ジャブロー生産型のジムとジム・スナイパーⅡなどのジム・コマンド系の機体が同一部隊内で同時運用されている例は複数あり、少なくともこの2系統の間では、外観の差異にも関わらず、高い互換性が維持されていたと思われる。

高い互換性を保ったまま大規模生産が実現し、外観の差異に関わらず「ジム」が地球連邦軍において、ある種のMS規格として機能したことは注目に値する。時代的に見て、ベース機体が必ずしも高性能でないに関わらず、RGM-86Rという新規の型式番号を与えてまでジムⅢが生産された（ジムⅢは既存機の改修以外に、新造機Ⅱヌーベル・ジムⅢも存在する）理由は、同一規格で運用可能、かつ予備部品や兵装オプションが豊富といったメリットがあったからだろう。ジムⅢの登場した第一次ネオ・ジオン戦争時、ジム系列機の性能は、陣営内における新鋭機と比較して見劣りしたものとなっていたが、10年近い蓄積に支えられた「ジムという規格」の信頼性やコスト面での優位性は、多少の性能差を超えるものがあつたのである。

ジムの基準にして 改装された地球連邦軍艦艇

ジムは一年戦争後の戦争に耐えられるコンセプトで設計された機体であつたが、同時に地球連邦軍におけるMS運用の規格を決定した機体でもあつた。地球連邦軍におけるMS研究は一年戦争前から開始されていたが、その量産や運用プラットフォームとなる各種艦艇や基地設備は、戦争中に用意されたもので、基本的にはジムの運用を目的として設計されていた。要するに一年戦争中に地球連邦軍が建造した多数のコロンブ

ス級空母や、サラミス級巡洋艦やマゼラン級戦艦へのMS運用能力の付与は、ジムの基準にして実施されたものであつた。

一般的にMSより耐用年数が長いと思われる艦艇へのMS運用能力の付与は、その基準をある程度の将来に置くべきである。しかし誕生直後のMSの性能向上を正確に見積ることはできず、戦時における拙速さで当面の主力機であるジムに、MS運用能力の基準を求めたのは止むを得ない策ではあつた。しかし戦時ゆえの膨大な予算によって一度に整備したMS運用能力の基準を変更することは困難だつたはずだ。グリプス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争にかけてMSの大火力化、大型化が進むが、一年戦争時にMS搭載能力を付与された艦艇で、そうした艦載MSの大型化に対応できた艦は、そう多くなかっただろう。20メートルを大きく超えるまでに大型化したMSを、



18メートル級の機体に対応した格納庫で運用するには困難を伴つたはずだ。高さや幅が不足するのだ。またサイココミュなどの、ニュータイプあるいは強化人間用のデバイスを搭載した機体は、専用の調整能力のある艦でなければ、充分な能力を発揮できなかつた可能性もある。

実質的に制約なく大型MS、MA

やニュータイプ専用機を運用できたのは、一年戦争後に設計・起工された新造艦艇のみで、一年戦争前から

戦中にかけて竣工した艦艇は、竣工時と変わらない18メートル級のMSを運用していたと考えるのが合理的であるし、実際にそうした事例を歴史の中に見つけることは可能である。

例えば米海軍のミッドウェー級空母は、1945年の竣工であつたために、戦後に数次にわたる改修を実施したにも関わらず、最後までF-14トムキャットの運用能力を持たず、F-4ファントムⅡあるいはF/A-18ホーネットを艦載戦闘機として運用していた。一方で英海軍は、新造空母計画がキャンセルされたために、アークロイヤル（三代目）でファントムⅡやバツカニアといった大型艦載機を搭載したが、艦上での取り回しには苦労しており、バツカニアはエレベーターで機体を上げ下げする際に、機首、主翼を折り曲げた上に、尾部エアブレイキを展開して全長、全幅を小さくする必要があつたほどである。

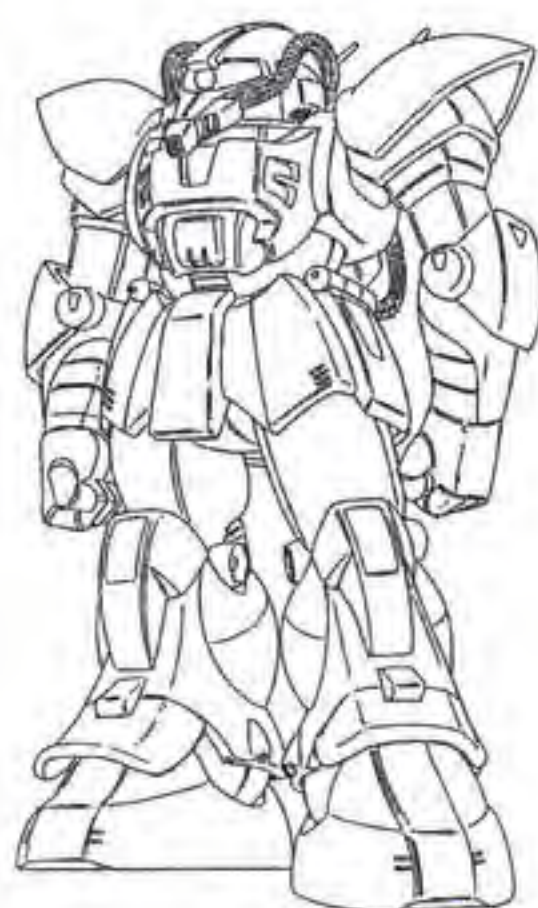
母艦という言葉に反して、航空母

艦とは艦載航空機に仕える存在である。空母の攻防能力の源泉が搭載航空機にある以上、それは当然のことであり、艦載機が大型化すれば母艦もまた大型化するべきなのだ。だが現実には、艦載機の進化のスピードに対し母艦側が追い付けず、予算等の関係で新造艦への更新ができないことも多々ある。

一年戦争後の地球連邦軍艦隊が直面した状況は、こうしたものであつたのだろう。グリプス戦役以降、テ

イターンスやエウーゴといった連邦軍系の軍事組織では、しばしば新造艦に最新鋭MSを集約するような運用が見られる。これは最新鋭艦載機を搭載する新鋭艦に旗艦を設定し、決戦兵力と位置付け、組織の象徴とするものであると同時に、そうした新造艦でしか、特殊な可変機や大型MSを安定して運用できなかったという見方もできる。後付けでMS運用能力を付与されたサラミス改級では、例えばMSZ-010ZZガ

戦後利用されるジオン公国軍製MSたち



MS-11
アクト・ザク



RMS-117
ガルバルディβ

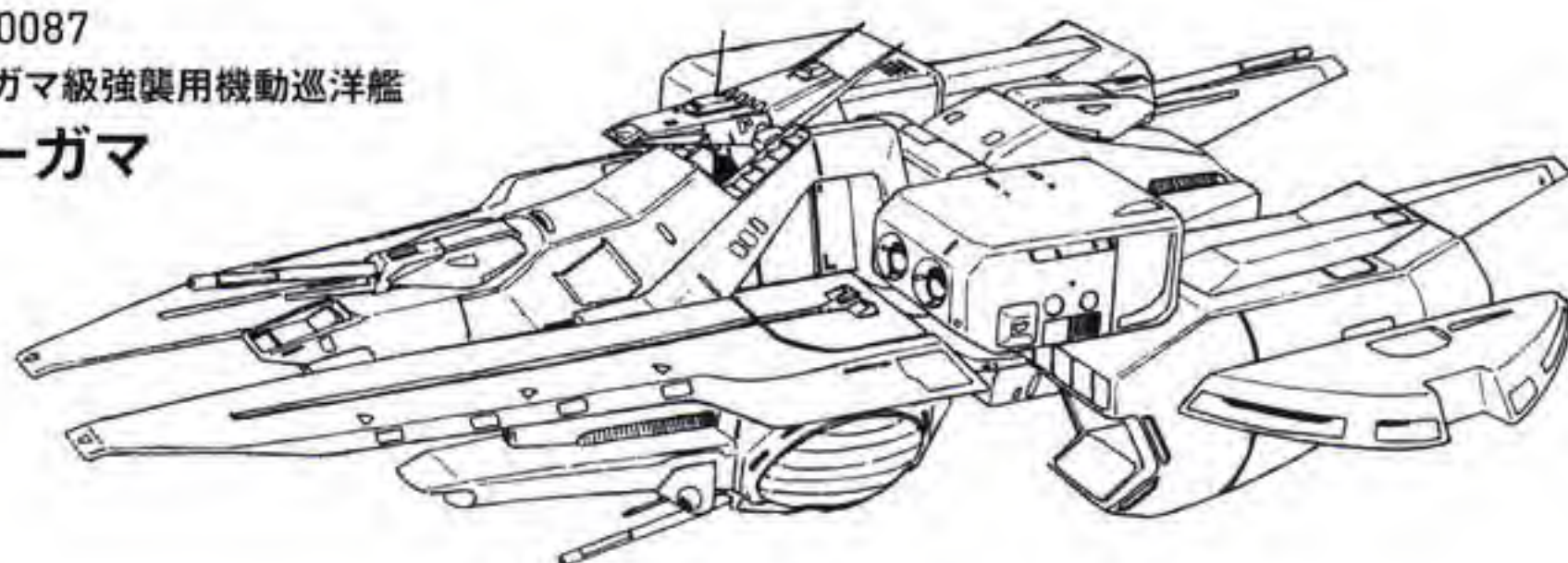
一年戦争による被害は、全人口の半数を失うという壮絶な戦いであつた。当然、連邦政府は戦後復興に全力を傾けるはずである。それは軍事面に割ける予算の減少＝軍縮傾向を招き、MS開発も戦時ほど活発にはならない。そうすると、敵性勢力の優れた技術力を転用しようという傾向が強まっても不思議ではない。

地球連邦軍の宇宙艦艇にみる MS 運用能力

U.C.0087

アーガマ級強襲用機動巡洋艦

アーガマ

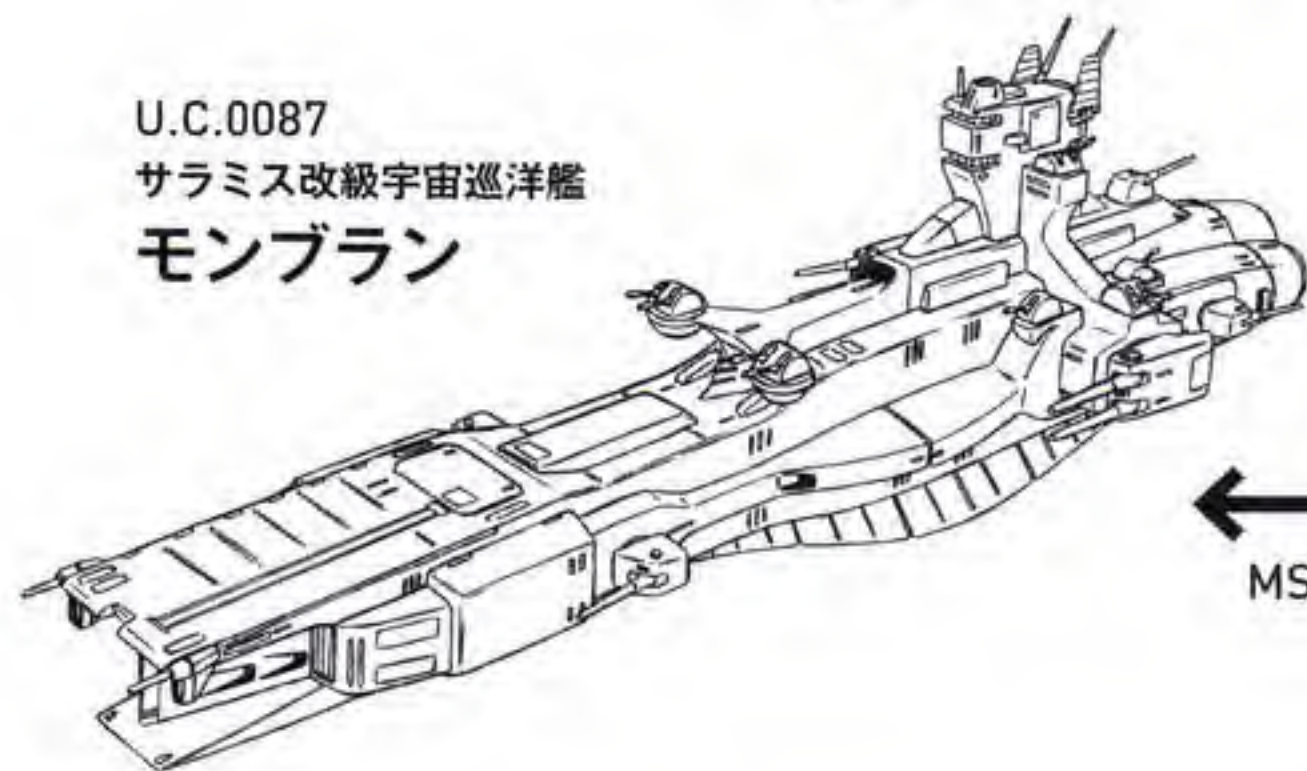


一年戦争前から運用されていたと思われるサラミス級やマゼラン級といった宇宙艦艇に新兵器であるMSの運用能力を付与するのは容易ではなかったはず。そもそも開発時期が異なるのだから、これは当然の結果だろう。しかし、サラミス改などは戦闘能力を下げてでもMS運用設備の拡充を図っている。これは、それだけMSの重要性を意識していた証左といえる。ただし、アーガマのように予めMS運用を想定している艦艇では、そうした兵器の関係性の齟齬は少ない。

U.C.0087

サラミス改級宇宙巡洋艦

モンブラン

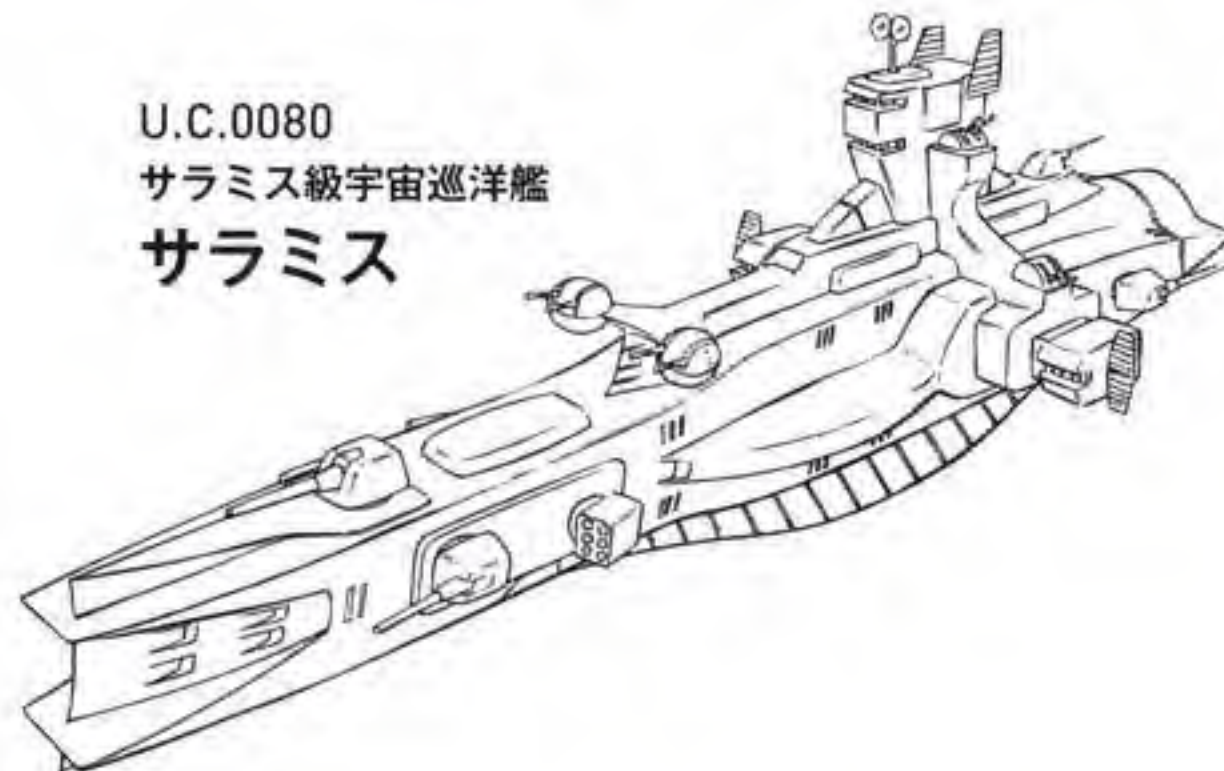


MS 運用能力の強化

U.C.0080

サラミス級宇宙巡洋艦

サラミス



ジムⅡ、ジムⅢと 高性能量産機

ンダムといった高性能大型可変機の運用は不可能であっただろう。一年戦争から一連のネオ・ジオン戦争期の地球連邦艦隊は、ジムという機体の運用にその母艦能力を縛られていた。U.C.0090年前後までの地球連邦艦隊は、ジムの艦隊であったのであり、地球連邦軍がジム系列機を捨てる、ということは、主力となるMS搭載艦の一新を意味したのである。

最初に書いたように、ジムからジムⅢが運用された約20年間に、地球連邦軍は多くの量産機を開発し運用した。にもかかわらず、それらの機体は比較的狭い範囲での配備に終始し、ジェガンによって置き換えられるまで、地球連邦軍からジム系列機の姿が消えることはなかった。

その理由としては、すでに見てきたように、ジムが機体コンセプトとして一年戦争後の戦争にも耐えうるものであったこと、機体そのものが、ある種の規格化をされていたことでアップデート用の設計が比較的容易であったこと、戦時に整備された地球連邦軍艦艇のMS運用環境そのものがジム用に設計されており、その抜本的な更新が難しかったことが大きかっただろう。大量生産によって、事実上のMS規格となっていたジムに対し、軍工廠、民間メーカーからアップデート用パーツの提案がなさ

れたことは容易に予想できる。

こうした例は、現在の兵器でもよく見られ、ベストセラーとなり、多くの国をユーザーに持つ兵器に対しては開発メーカーのみならず、開発に直接関与していないメーカーによる、近代化改修キットの開発や提案が頻繁になされている。「イスラエルのメーカーがMig-21の近代化パッケージをユーザーに提案する」といったことが、現実の兵器マーケットでは珍しくない事例なのである。

一年戦争のジムは、最終的に部分的にムーバブル・フレームを導入しつつ、センサーや主機を換装したジムⅡに換装されることになるが、こうしたアップデートによる戦闘力向上は現実にも多く見られる。航空自衛隊では保有するF-15イーグルを段階的に改修して戦闘能力向上を行っている（ただし予算的な問題から進捗は遅い）が、ジムも予算的問題から一気にジムⅡ規格への機能向上（改修）を行わず、センサーのみの換装による第一段階能力向上、機体のフレームを改修しムーバブル・フレームを導入する大規模な第二段階性能向上といった、段階的なプロセスが踏まれた可能性もあるだろう。

では、ジムの改修と並行して進められた高性能量産機の位置付けはどのようなものとなるのだろうか。一つはジム系列機の改修では対応できない、特殊な用途の機体を一定規模整備すること。MSZ-006A1「C1の「Zプラス」登場以降、

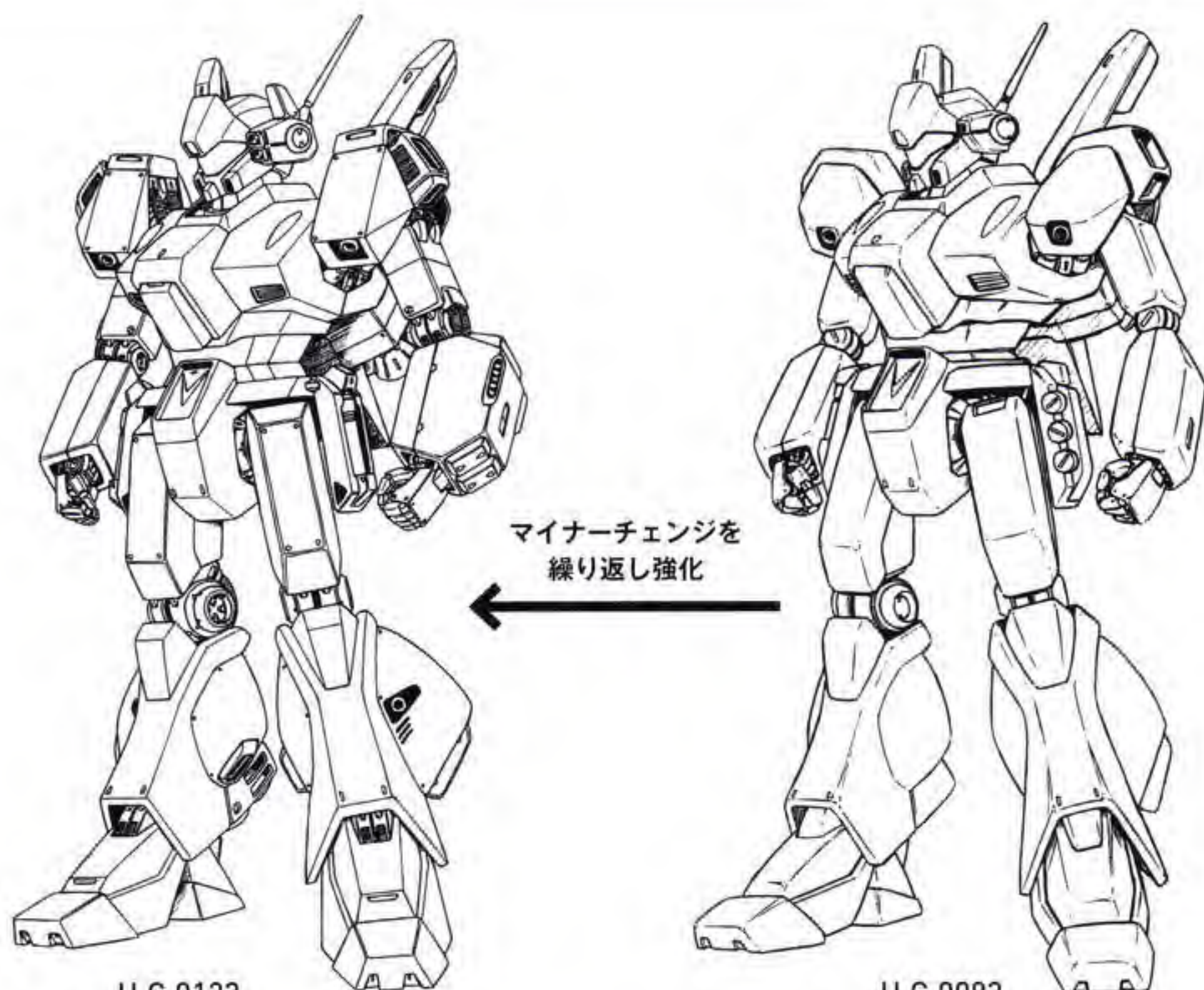
それなりの数が生産されているように見える可変機は、即応部隊や軍直轄の精鋭部隊用の機体とみることができるだろう。

一方で技術実証機、あるいは組織のフラッグシップマシンとしての性格を強くもった、ガンダムタイプの開発に付随して計画される「量産型〇〇ガンダム」といった機体は、高性能機の純粋な量産化というより、軍工廠やメーカーに「仕事を与える」目的で計画されている可能性もある。それは平時における軍工廠、兵器メーカーの抱える最大の問題といえる、生産ラインや、設計、製造に携わる高度な技能をもつ社員の維持である。戦時とくらべ、軍からの発注が激減する平時にあつて、経営規模に合わせて社員のリストラや設備の整



ジム系列機に代わる 主力機、 ジェガンの登場

地球連邦軍のMS運用の根幹は、すべてジムを中心に考えられていたといつて過言ではない。戦時中ならば敵対勢力への即応力が必要で妥当な路線といえる。しかし、中長期的な観点から見れば、それは必ずしも良策とはいえないだろう。ジェガンの登場により戦時開発機のジムを中心とした考えから脱却できたといえる。ただ、歴史は繰り返すとはよくいったもので、ジェガンも後にくる「MSの小型化」というブレイクスルーからは取り残されることになる。



U.C.0123
RGM-89R
ジェガン A TYPE

U.C.0093
RGM-89
ジェガン

備を行う場合、開発・生産能力そのものを喪失する可能性があり、技術的なノウハウ継承の断絶を招くのだ。太平洋戦争以前の日本において、呉海軍工廠製鋼部は、ほぼ唯一の戦艦用極厚装甲鋼の製造拠点であった。このためワシントン海軍軍縮条約による長期の主力艦建造の停止により製鋼技術の継承が断絶することを避けるために、海軍は主力艦や巡洋艦の改装などによって鋼製製造能力の維持を図っている。また「赤トンボ」の愛称で知られる日本海軍の九三式中間練習機は、多くの海軍機メーカーが生産を経験しているという点で特異な機体だが、これは海軍がメーカーの経営支援として、必要に応じて生産メーカーを変更していったからである。この場合は、直接の技術維持というよりもメーカーの存続による設計・生産能力の維持を目的としている。

唯一の例外はRX-178ガンダムMK-IIの量産型として計画されたバーザムで、この機体は特異な外見の割に、ティターンズ系組織の次世代主力機として体系的な開発が試みられた形跡がある。ガンダムMK-IIのコンポーネントはジムIIといったジム系列機にも採用されており、ティターンズが地球連邦内で主導権を握ることに成功した場合、バーザム系の機体がジム系の機体設計を一部包摂する形で、ジム系の後継主力機になる可能性もあったかもしれない。だがこれもティターンズが軍事的、政治的に組織が瓦解した結果、幻に終わった。

ジムの退役と ジェガンの登場

登場したのは、ジェガンである。ジェガンは外観上、非常にブレンな機体であり、ジムと並行して運用された高性能な（あるいは奇抜な）各種の量産機と比較して、いかにも低コスト然としているが、それは一面で、技術的な洗練が進んでいたことの表れであり、充分な拡張性が確保されていたことでも反映でもある。低廉なことは低性能と同義ではない。ジェガンよりも高性能な機体は同時に存在したが、性能とコストを高いレベルで実現できた機体は少なかった。そしてジェガンはその後、長期間にわたって地球連邦軍の主戦力として宇宙世紀の歴史にその足跡を刻むことになる。最強であることと、その機体が軍の主力機であることは必ずしもイコールではない。主力機とはまず、それを装備する国家や軍の身の丈にあった能力を有することが必要なのであり、その範囲の中で性能を追求するべきなのである。そしてジェガンの持つこうした特徴は、明らかに地球連邦軍の主力機であったジムの基本的な性格を継承している。必要十分な性能で量産されたからこそ、ジムは地球連邦軍の主力機として地球連邦軍内におけるMSのメルクマールとなり、長期にわたって運用されたのである。そうした意味においても、ジェガンはジムにかわる地球連邦軍の主力MSであると同時に、正しくジムの後継者であり、地球連邦軍における「新しいジム」であったといえるだろう。

ジムのバリエーションを考える時、
難しいのが期間の短さです

THE GM
INTERVIEW

Part.

1

MASAHIRO ODA

小田雅弘 インタビュー

ジムバリエーションの伝説は ここから始まった

MSVの展開に深く関わった人物といえば、当時の模型集団「ストリームベース」で活躍されていた小田雅弘氏だ。MSVの主軸がザクバリエーションとして展開される中で、ジムのバリエーションはどのように誕生したのだろうか？

PROFILE

●おだ・まさひろ

1980年代に高橋昌也氏、川口克己氏とともに模型集団「ストリームベース」で活動。ガンブラ登場以前、ストリームベースの作ったフルスクラッチのMS群がガンブラ誕生の発端となった。その後は『MSV』をはじめとした雑誌企画や模型企画などで幅広い活躍し、ガンブラブームを牽引した。

——アメリカ軍のB29やP51ムスタングなどに近い感じですね。無塗装でキラキラ光って発見されやすい可能性もあるけど、それでも構わないという。

小田 ジムは太平洋上をムスタングの大群が飛んでいるイメージと重なりますね。

——まさかジムまでMSVで手掛けるとは、思ってもいなかった、ということですね。

小田 そうですね。ただ、連邦軍側が実験部隊だけで、ガンダムとガンキャノンとガンタンク、そしてコア・ブリスターだけでは、あまりにも役者が乏しい。

バンダイさんの「連邦軍も何とかして欲しい」という気持ちは分かれますから。こちらでも便利屋なんて頼まれればやりますからね。

——どんな量産を行ったのか、という点についても興味でした。

小田 技術的な点にしても、コア・ブロック・システムを採用しているかは、本編では触れていませんよね。ですからコア・ブロック・システムをはじめとする操縦系統については、MSVでも一切触れていないんです。まあ富野（由悠季）監督は、実はメカの細かい部分まで相当考えていましたからね。富野監督に聞くとジムにコア・ブロック・システムが付いているかは、明確な答えを返してくれると思いますよ。

——現在でこそ模型などを経てジムには少なくともコア・ファイターは

運ばれて来たかは、詳しくは描かれていません。

——実際にジムという機体には、どんなイメージをお持ちでしたか？

小田 なにしろ短時間に大量生産が行われたもので、しかも訓練時間が短いパイロットが乗るわけじゃないですか？ そこからイメージできるのはアメリカ軍ですよ。多くの若いパイロットが、シミュレーターだけの訓練を受けて、実戦に参加するという。MSの導入がちょっと早かったジオン公国軍は、わずかな戦闘経験がアドバンテージだったのですが、連邦軍は物量と補給面に長けていて圧倒するという感じですね。やはり連邦軍のMSには、枢軸の匂いがしないんですよ。ジオン公国側はドイツやロシア、連邦軍はアメリカというイメージがしっくりきます。

——そう考えると、バリエーション機体が生産される時間的な余裕はないように感じますね。

小田 最終局面でジオン公国本国に攻め込むとして、その前にア・バオア・クーでの決戦があつて、そこから逆算するわけです。そして「どれだけの期間で機体数を揃えられるか？」ということですからね。つまりバリエーションはほとんどあり得ない（笑）。

まあ多少ならいいか、というレベルです。真剣に考えるというよりは、妥協の産物という側面はあるでしょうね。だから子どもが見てもわかるような、ハッキリとした特徴や色を打ち出したんです。しかも物量戦に優れている側だったら、別に迷彩などは考えなくてもいい。こういう風に割り切ったんです。

期間を考えれば バリエーションは難しい？

——ジムの発展という流れを紐解いていくと、その根幹にはやはり小田さんたちが作られたMSVという文化に行き着くと思います。

小田 さんたちはMSVでは最初にザクからバリエーションを考えられたと思うのですが、ジムへのアプローチをお聞かせください。

小田 「連邦軍でMSVをやってほしい」という依頼が来たとき、扱いが非常に難しいと思ったのが正直な気持ちでした。何が問題かといえば、ジムが実戦配備されてから終戦に至るまでの時間の短さですね。連邦軍はジャブローから戦艦を宇宙に上げて、ティターン艦隊が編成されていきますが、果たしてジムがどこから

入っていないということになっていきますが、それも長い歴史の産物ともいえますしね。

小田 設定を真剣に掘り下げていくと、疑問が生じるのは仕方がないところですよ。例えばガンダムが搭載していた教育型コンピュータの、ジムへの戦闘データのフィードバックはどうなっているんだって考えますよね。マグネット・コーティングも確立されているでしょうし、そう考えるとパイロットの練度が低くても、すごい性能を発揮できたかもしれない。「ジムは短期間で数を揃えるために、急場ごしらえで大量生産した」という設定は、こちらの都合で決めただけですからね。

派手なカラーリングは 連邦軍の色という割り切り

——だいたいジム1機は、いくらくらいで作られていたと考えますか？

小田 単座の戦闘機くらいは最低はするでしょう。逆にとてもお金がかかっている試作機がガンダム。ありとあらゆる技術的なものを詰め込んでいて、そこからどこを切り取り量産機に残していくのか……、そんなことを検討するための機体だったはずですよ。普通に考えれば、ジムが短期間で大量に投入できたとなると、「クオリティは低くて機能も絞つていたんじゃないか？」という捉え方をしていましたね。

——ガンダムについてはものすごく高価なので本当は実戦で戦って欲しい……という気持ちも連邦軍上層部にはあったかもしれませんね。

小田 ガンダムですごいことは、格闘戦ができる試作機ということですよ。ぶつかったり、つかみ合ったりしても、まったく壊れないほどの強度を持っている。試作機でそんな強度を持っているケースは、他のミリ

ジオン公国側はドイツやロシア、 連邦軍はアメリカというイメージがしつくりきます

タリーではちょっと考えられないことです。

——実際にMSVで各機体が誕生するプロセスは？

小田 こちらでラフを描いて大河原（邦男）さんにお送りして……という流れですね。実はラフと清書されたデザインは、ほとんど変わっていないですよ。そのあたりは大河原さんも非常に意図を汲んでくださったので、スムーズだったと思います。

また、大河原さんのデザイナーとしての余力も、実感しましたね。例えばジム・スナイパーカスタムのバイザーを、僕は開ける方向で考えていたのですが、大河原さんは閉じる方向で仕上げられて、むしろバイザー

を下ろした方が完成形といえる形でした。「さすが大河原さんだなあ」と感心した記憶があります。

——連邦軍サイドのMSVで、特にポイントとなった部分は？

小田 連邦軍で困ったのは、ガンダムの色です。もともとガンダムのトリコロールカラーの白に当たる部分は金属の銀ですけど、そこはアニメの都合で白ということで解釈されました。一方で、あのトリコロールはデモフライトカラーとしか考えられないのですが、戦場に送られてくるジムも、トリコロールのバリエーションのような赤とグレーの配色でしたからね。よく考えなくてもおかしいことなんですけど、「これが連邦軍

のカラーリングだ」と捉えてしまうしかないかと。

ジムのバリエーションを作った時もこの考え方を踏まえていて、オレンジと赤と緑で色分解したんです。簡単に言うと「トリプルファイター」(72年、円谷プロダクション製作の特撮番組)なわけですが(笑)。ただ、「トリプルファイター」のキャラクターそのものにはなかったわけではなく、明確にジオン公国軍と差別化した、という意図ですね。

スナイパーカスタムは 実は狙撃型じゃない？

——個々のジムバリエーションについて伺います。まずは当時、一番人気だったジム・スナイパーカスタムからですね。振り返ってみると、「強いジム」の始まりは、この機体からだったかもしれません。

小田 ジム・スナイパーカスタムは、もともとフルアーマーガンダムが登場するMSVのCMを板野一郎さんが手掛けることが予定されていて、それに釣り合うジムとして用意したものです。設定の絵と、ライフルのデザインも作って急遽準備したのですが、結局はフィルムになりませんでした。

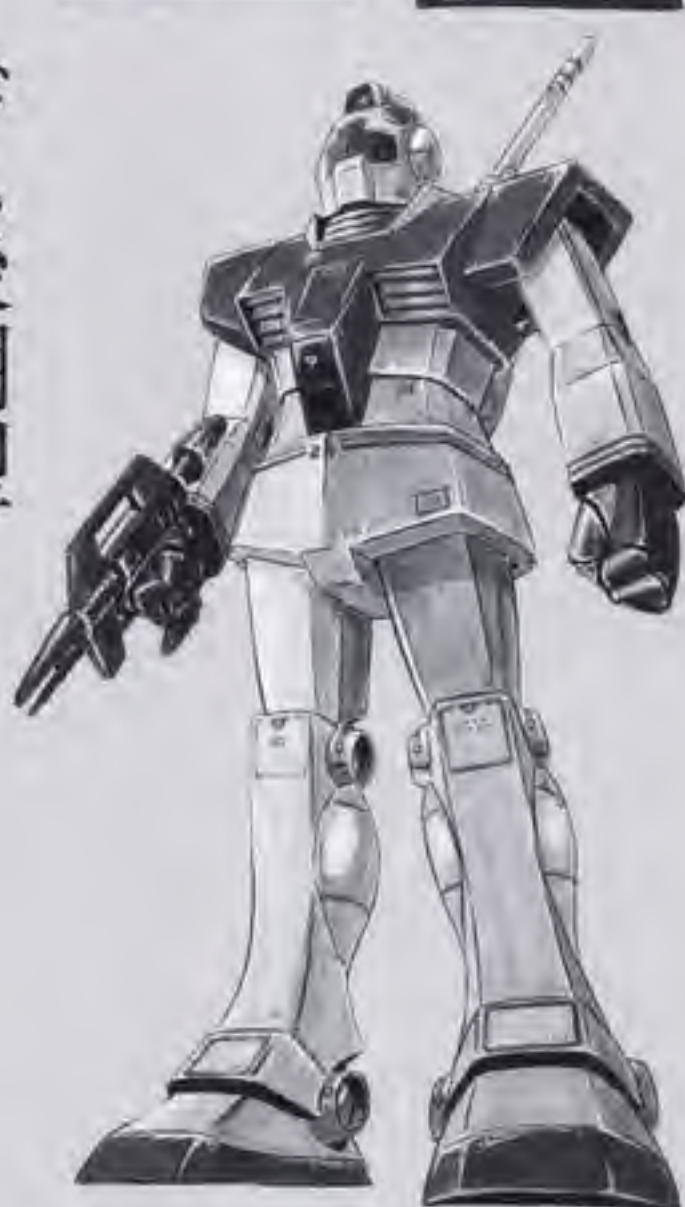
——コンセプトとしては、どのよう

当時のイラストで振り返る ジム&ジムバリエーション

ジム前期型



ジム後期型



今回の本インタビューにおいて、企画参加当時の話を伺っているが、その際、「機動戦士ガンダムMSVモビルスーツバリエーション」(講談社ポケット百科)などに掲載されていたジム前期型、後期型についても言及がされた(上イラスト2点)。そこで、小田さんの言う「大河原(邦男)さんが描いたイラストが前提で、あるものはすべて使う」という方針によって、上がってきたジムのイラスト2点は、前期型、後期型として世に出たことが判明。オーダーありきではなく、イラストが先にあるパターンで作られた設定というわけだ。

よく誤解されますが、「スナイパーカスタム」といつても狙撃兵ではありません

なイメージだったのでしょか？

小田 スナイパー自体は、戦闘に特化したバリエーションです。ジムは頭数合わせ的にいるMSというイメージがありますが、こちらはそれなりに戦えるイメージでした。実は設定画としては1種類しか起こしていませんが、異なるカスタムタイプの3機種編成で考えていたんです。

元ネタはアメリカンフットボールのフォーメーションで、ガードがいて、インターセプターがいて、スナイパーがいるという編成ですね。

——狙撃型と思われる方も多いですよね。

小田 よく誤解されますが、「スナイパーカスタム」といつても狙撃兵で

はありません。僕の言ってるスナイ

パーとは、コンバットコマンダーカスタムなんですね。ジムのコルト・ガバメントだと考えていただくとかかりやすいかもしれません。ジムのバリエーションというのは、当時のウエスタンアームズのモデルガン、コンバットコマンダーカスタムそのものなんです。マズルにコンペンセイター（マズル・ブレーキの1種）が付いていたとか、様々なアタッチメントのバリエーションがあったのですが、あれをジム・スナイパーカスタムに置き換えただけです。

——だからビーム・サーベルが腕に付いていたり、重装甲だったり、狙撃兵には不要と思える装備も付いて

いるわけですね。

小田 あの頃、MGCとウエスタンアームズのモデルガンは、CPプロバックタイプのモデルが結構出ていて、カートリッジが閉鎖系なのでしっかりと爆発力があり、作動が非常にスムーズだったんですよ。当時面白くて、僕らもよく遊んでました。なぜMGCのガバメントじゃなくて、ウエスタンアームズのコンバットコマンダーなのかといえば、ちゃんと金型を起していたからです。実際に製品を手にとって見ると、とてもきれいでシャープな仕上がりだったのには驚きました。

実際にウエスタンアームズの社長さんがプラクティカル・ポリス・コースで学んだコンバットカスタムを投影していて、ラバーグリップをはじめ、安全装置が左右どちらからでも使えるようになっていた点など、非常にカスタム志向が強いモデルガンを発売していました。様々な仕様にもカスタムできるとい点は、まさにジム・スナイパーカスタムでイメージしたものです。

——当時はモデルガンが流行っていましたね。

小田 エアガンが登場する以前で、非常に流行っていましたね。僕も当時はハマっていて、カスタムパーツをどんどん変換していくと、オリジナルのモデルガンが出来上がるのが

面白かった。ジム・スナイパーカスタムの設定を分解すると、どんなパーツをどのように捉えて、形を変えていったかということが、分かてもらえると思います。

——続いてジム・ライトアーマーです。これも軽量化の系譜という意味では、原点の1つと言えるかもしれません。

小田 スナイパーカスタムと違って、銃器に頼らないタイプですね。装甲も軽くして、ビーム・スプレーガンとビーム・サーベルだけで戦うのがライトアーマー。

余談ですが、ライトアーマーのビーム・サーベルには、網目模様が付いていますよね。でも、僕が最初に出したラフでは、フィンガー・チャネル（銃器などのグリップにある、指がはまるくぼみ）が付いていたんです。最終的に大河原さんの清書で、網目模様になっていますが、そこは解釈の違いですね。実はこのフィンガーチャネルは、コクサイのモデルガンのもので（笑）。スナイパーカスタムもそうですが、そのような遊びを盛り込んでいたわけです。

「何でもあり」でも 考え抜かれていたMSV

——ジム・トレーナーは訓練用機体という特殊な機体ですね。これも同時に進められたものでしょうか？

小田 ジムのバリエーションは、ほ

ぼ同時進行で考えていましたね。トレーナーなんて、本ならシミュレーターでいいんですよ。でも実際にMSの形で見せないと、ビジュアルとして面白くないですね。だから（コクピットを）タンデム型で、教官と一緒に乗るとい形にしたんです。

——ジム・キャノンも人気でした。

小田 ジム・キャノンは、当初からガンキャノンの簡易量産型という考え方ではありません。ジムは簡易型のMSで、それを活かしたまま中距離支援のMSを何とかできないかというスタンスです。そうすると絵的に足が弱く見えてしまう。これは物理的とか機能的なものではなく、あくまで絵的なものです。また、ガンキャノンはガンダムよりも前の世代の機体で、それに対してジムは後発の機体ということもあって、デザイン的にも少し洗練されたところがあります。

——キャノン系のバリエーションも、ポピュラーな存在になりましたね。

小田 ジム・キャノンはザクタンクとほとんど一緒のノリですね。現場のノリでできちゃったMSですが、ただし大河原さんの料理の仕方が抜群に上手かった。だから非常にしっくりくるデザインなんです。

——MSVはある意味、すごく高級な「ごっこ遊び」といいますか、ファンも送り手も同じ知識や距離感の



プロトタイプ ガンダム

◆元々のアイデアソースとして、安彦良和氏によるガンダムのデザインラフ画があったというプロトタイプガンダム。本来ならば、機体の出自を鑑みると、もう少し太目のラインでデザイン作業の指示を行うことも検討されていたという。

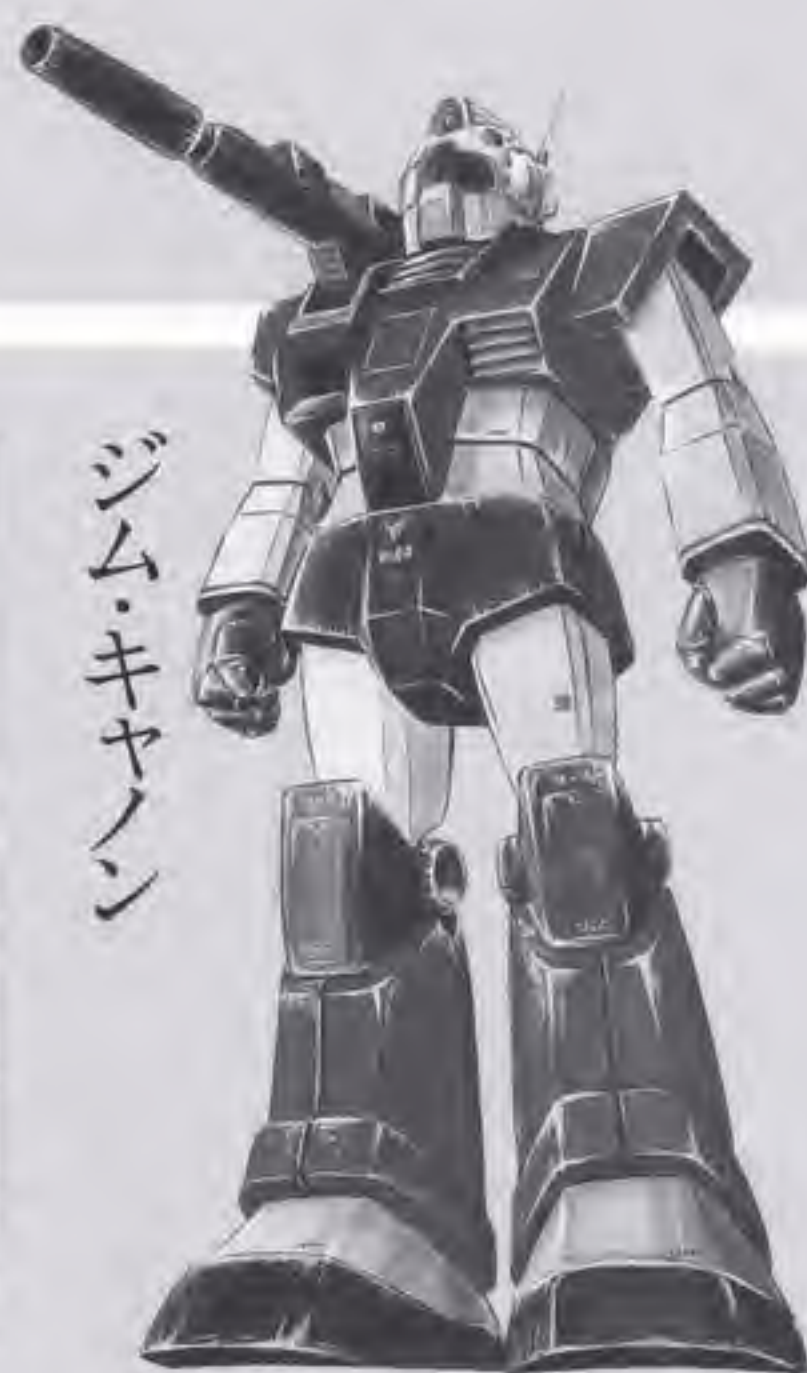
ジム・キャノン 北アメリカ戦線機

あくまで連邦軍の機体は、ジオン公国軍のように、第二次大戦中のドイツなどの枢軸国の雰囲気ではなく、アメリカやイギリスといった連合国サイドに近い印象をモチーフに、機体のデザインやイメージの落とし込みがされている。それゆえ、MSVの地球連邦軍の機体の多くはエースパイロットをクローズアップするよりも、配備機体のエンブレムなどの設定などを起こす作業が中心に行われていた。



↑機体に指さしでサインを送るジム・キャノンの姿が印象深いバンダイの『1/144ジムキャノン』の箱絵。描き手はフルアーマーガンダムなどのイラストで知られる石橋謙一氏。

ジム・キャノン



↑機体の設定として、ガンキャノンの量産化を目指していたのがジム・キャノンだ。ジムにキャノン砲を搭載しただけのシンプルな案を考えていた小田さんだったが、上がってきたイラストは想像以上にカッコいい仕上がりだったという。

中で遊んでいたような思いがあります。その点は時代を感じますね。

小田 基本的には「好きにやっついんじゃない？」と思いますが、あまりに野放図になってしまおうと訳が分からなくなってしまう。当時、僕がやっていた仕事は、どちらかというとパイアスを調整するのに近い仕事だったかもしれない。結局、全部混ぜていきますから、『ガンダム』であるなら、小説版も映画版もTVシリーズも、すべて情報を一緒にしてしまっています。MSVの中ではクスコ・アルも存在していますからね。ただ、当時の小学生とは年齢差がありすぎて、付いてこれなかったところもあるみたいですが（笑）。

——ジムのMSV展開は、この4機でひとまず終了になります。

小田 文字設定として残したものもありますが、MSVの絵としての展開はここで止めていますね。それは広げようがなかったからです。だって戦争が終わっちゃうんだもの（笑）。後は有事に備えて、軍備を整えるだけですからね。その後の『機動戦士Zガンダム』の時代の話なんて、富野監督の頭の中にしかないものだから、僕らも知りようがありません。ティターンズやエウーゴの存在なんて、『Zガンダム』で知られるまでは、

想像も及びませんでしたから。

——文字情報は、どんなことが残されていたんですか？

小田 たとえばガンダムが8号機までであるという設定は、僕が文字で残しておいた設定からですね。当時サンライズの井上（幸一）さんが「ガンダム4号機ってあるのかな？」というところで悩んでいたもので、「ありますよ、ガンダムは8号機まで存在します」って答えなんです。ラフは描きませんでした、そこから文字設定で残しておきました。

なぜガンダムが8号機までであるかという、試作機それぞれによって部位の大きさが若干違うことってよくあるんですよ。装甲の厚さや仕様が違ったり、外板とフレームの兼ね合いが違っていたり、色々なケースを試す構造試験機のような方法論ですね。それを踏まえて考えると、8号機ぐらいまでであるのがしっくりくるんです。

——実際に立体化されたものでは、プロトタイプガンダムでしょうか。

小田 最初にイメージしていたプロトタイプガンダムは、ちよつと違うんですよ。実は『機動戦士ガンダム』企画の初期に、安彦（良和）さんが描いた少し太めのガンダム……足の甲にスリットがあるヤツですね。そ

れを立体でやりました。ただ、これは大河原さんと意思の疎通がうまくいなくて、結果的に色が違う程度のもになってしまった。本当は安彦さんプロポーションの、セル作画で描かれた太目ガンダムを手に入れることが目的だったんです。

——時間があればさらにバリエーションを広げること考えましたか？

小田 いやいや、これ以上増やすつもりはまったくなかったです。ジムについてあれ以上やりようがなかったというのが正直なところですよ。

パイロットの練度の違いで多少の性能差は出るかもしれませんが、マーカーキングなどで違いを出せるぐらいでしょうね。

——ボールはどうでしたか？

小田 ボールについては興味なかったです。だってあれは浮いてる砲台みたいなものじゃないですか？ スケール感もさっぱり見えてきませんでしたから。

若者たちの情熱が 世の中に届いた時代

——当時は、どこまで製品化がされるところというお話があったのですか？

小田 特に決まっていなかったと思います。とにかく最初の内は偶然出来上がったイラストに、注釈を付け加えていくという積み重ねだったんですが、商品が出てからは、もの凄いいスピードで展開しましたね。月に最低2種類が発売されて、最終的には32種類になったでしょうか。

ジムについてあれ以上やりようがなかったというのが正直なところですよ

——とても短い期間に、集中して作業をされた感じですね。

小田 2〜3年の間ででしょうか。82年から『Zガンダム』が始まる前あたりまで（MSVの主要商品展開は83年4月〜84年9月）。ものすごい量をやったと思います。

——その当時、小田さんはどんな生活を送っていたのでしょうか？

小田 相当忙しくて、いつも時間のない中で書いていましたね。スタジオの片隅や移動中の新幹線で仕事をしていることも、珍しくはありませんでした。当時はワープロも持っていませんから、当然すべて手書き、そして誤字脱字の嵐でした（笑）。校正している時間もないくらいでしたからね。ラフも追いまくられるように描きまくっていました。ただ、せっかく大河原さんにカラーイラストを起こしていただいたのに、製品化に至らなかったものがあつたのは残念でした。

念でした。——それは子ども心にも残念に思いました。

小田 まあラインナップにならなかったものは、チョコボール（森永ガンダムチョコスナック）や食玩のミニガンプラに押し込みました（笑）。

——かなりマニアックなメカもラインナップされていましたね。

小田 スケールの紐付けとラインナップの選出は僕の方でやりました。だってシーランスとか欲しいじゃないですか？

——たしかに（笑）。

小田 こちらでだいたいの寸法を割り出して、「これは何分の一」、「こっちは何分の一ね」ってバンダイの静岡工場に送るんです。すると設計室で意図を汲み取ってくれるので、スムーズでした。デキもよかったですし、コレクション的にも楽しいアイテムでした。まあそういうイタズラは

仕込んでいたんです（笑）。

——そういう細部への配慮が、当時のムーブメントを支えたような気がしますね。

小田 やりやすかったのは、僕たちのバックに講談社が付いてくれたこと。先行して小学館が『月刊コロコロコミック』を出していて、それに追従する形で講談社が『月刊コミックボンボン』を出した。『コミックボンボン』は最高（発行部数）では50万部ぐらいだったんじゃないのかな？ 後発雑誌でそこまで行くのは、今だったら考えられないことです。その原動力になったのは、かなりの割合でガンプラの力でした。

——今思うと大胆な記事も多かったですよ。『これ小学生にはムリ！』というものも（笑）。

小田 商品にならないものでも、作例としてバンバン載っけてしまつた。ものすごい無謀な話なんですよ。

『コミックボンボン』に

みんな集まるわけですから、

自然と情報も集まってくるんです

——そこまで踏み込めたのは、どんな要因でしょうか？

小田 作り手側としては、講談社の体制がすごかったということにつきま。模型雑誌などに比べて、講談社は写真撮影の規模が半端じゃない体制でしたからね。社内に専門のスタジオと専門のカメラマンがいて、そこで一日中撮影できるんですよ。当時はいろんな人が出入りしていたんですが、僕たちが撮影をしていると、バンダイさんも来るし、海洋堂さんも来る。模型誌のライターやモデラーなどもほとんど集まってくる。だから情報のやりとりが濃いですよ。一時期『コミックボンボン』の方が『ホ

ビージャパン』よりも、情報量が厚かった時代があったほどですからね。みんな集まるので、自然と情報も集まってくるんです。

みんな情報が知りたくて、鵜の目の目で来てますからね。「あそこに情報が集まっている」とわかっていくから、最後まで帰らないヤツもいましたね（笑）。

——今ほど管理ということが厳しくなかった時代の良さですね。

小田 当時の読者は、バンダイの『模型情報』と『コミックボンボン』で、かなりの情報を取れていたでしょうね。当時は『ホビージャパン』は読んでいたけれど、『コミックボンボン』は知らないという世代と、『コミックボンボン』は読んでいたけれど、『ホビージャパン』は知らないという2つの世代に分かれていたことも、よかったのかもしれない。

確かに高校生くらいでは、『ホビージャパン』は読めても、『コミックボンボン』はちょっと買い難いですよね。でも本当は子供向けの『コミックボンボン』の方が、情報の量でも質でも優れていたんですよ。まあ、のほほんとして良い時代でした。そして大人がちゃんと堀を埋めてくれました。ましたし、若者がやることを、全部バックアップしてくれましたからね。

当時のイラストで振り返る
ジム&ジムバリエーション

ジム・スナイパー
カスタム



ジム・
ライトアーマー



ジム・
トレーナー





THE GM
INTERVIEW

Part.
2

MORIFUMI NAKA

仲 盛 文 インタビュー

——
本当のジムは
強くなければ意味がない

メカアニメーターである仲盛文氏は、『機動戦士Zガンダム』に始まり、昨今では『機動戦士ガンダム サンダーボルト』など、多くの『ガンダム』作品に参加している。その視点からジムはどのようなMSに映るのだろうか？

PROFILE

●なか・もりふみ

アニメーター。本格的な原画デビューとなった『機動戦士Zガンダム』を皮切りに『機動戦士ガンダムZZ』『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』『機動戦士ガンダムUC』『機動戦士ガンダム サンダーボルト』など、数多くの作品に参加。

あの強いガンダムを量産化しているのに、
なぜ弱い状態でジムを量産するのかが疑問でした

ジムに抱いていた
理想のイメージ

——仲さんとジムとの出会いは、どのようなものだったのでしょうか？
仲 実は僕自身、『機動戦士ガンダム』の直撃世代ではないんです。はじめてTVシリーズを全部見た『ガンダム』……というか、仕事として関わったのがTVシリーズの『機動戦士Zガンダム』からでしたね。『ガンダム』の本放送時、僕は高校3年生だったんですが、実家が鹿児島だっ

たこともあって、放送されなかったんです（笑）。そして東京に出てきた時には、すでに放送が終わっていたと。それから仕事を始めると、そういうアニメを見る時間も取れませんが、再放送をやっていたとしても、仕事で見ることができません。ですからジムに対しては、少し俯瞰した視点で見えてしまうのかもしれない。

——原点として『ガンダム』に触れずに、アニメーションの仕事を始められたのは意外ですね。

仲 僕は沖縄で生まれて、その後、小学生の時に徳之島という鹿児島県の離島に引っ越したんです。しかも引っ越しの時期が、ちょうど特撮の『ジャイアントロボ』が放送開始された時。第1話のラストでジャイアントロボが大作少年のところに飛んできて、怪獣（ダコラー）が出てくるところで終わり。「次回はいいよいよロボの活躍が見られるんだ！」ってところでした。徳之島でも続きを見ようと思ってTVをつけたんですが、なぜか映らない。それで母親に

「テレビ壊れてるよ」って言ったら、「あきらめなさい」と言われまして……。沖縄では民放も放送していたのですが、徳之島はNHKしか映らなかったんです（笑）。

——ああ……。

仲 引っ越すまでは、ずっとテレビっ子。だったんですよ。夕方のアニメは全部見てましたし、中でも『鉄腕アトム』、『鉄人28号』、そして『エイトマン』は本当に好きでした。親戚のおばちゃんの家で家族で遊びに行く用事があったても、「アニメがあるから行かない」と言うほど。4、5歳の頃に、1人でアニメを見るために留守番するような子供でしたからね。それがいきなりアニメが見られなくなった。その反動で、今はこうなったわけです（笑）。

——実際にジムというMSについては、どんな印象をお持ちですか？

仲 ジムを語るときに、まず疑問が思い浮かぶんです。TVシリーズ『ガンダム』の劇中におけるジムって、限りなく弱い存在じゃないですか？

あの強いガンダムを量産化しているのに、なぜ弱い状態で量産するのだろうか。『ガンダム』って、いわゆるリアルロボットって言われますが、ガンダム自体はジムが弱く描かれていることによって、スーパーロボットのなタイトルになってしまっうんですね。

——活躍度合いから見れば、両者にはあまりつながりがないようにすら感じてしまいますね。



仲 ガンダムを量産化したなら、ガンダムと匹敵するほどの強さがある

のが自然です。それが大量に量産されるから、ジオン側を圧倒できるというのがリアルでしょうね。でもガンダムだけが強いままだから、スーパーロボットの印象が残ってしま

うんです。あくまでガンダムだけがスペシャルで、ジムはとても弱いMSというのなら理解できるんですが、細かい設定的なことは抜きにして、そこはリアルにやってほしかった、というのが正直な気持ちです。

——ガンダムとジムの関係は、一般的な試作機と量産型には当てはまらない部分もありますが、それでも試作型よりは完成度が高くあつてほしいという気持ちがありますね。

仲 ジムは作画的に「楽に描けるようにしました」という点は理解できます。ただ見た目は弱そうでも、兵器として考えるなら強くなければ存在が矛盾しますよね。かたやジオン公国軍のザクは、量産型で連邦軍を窮地に追いやるくらい恐るべき存在になつていないじゃないですか？ ガンダムを量産化したなら、「ザクを相手にしないほど、強力な兵器になつてほしい」というのが正直な気持ちですね。

リアルというものを意識するなら、兵器として意味があるものじゃないといけないと思うんです。ジムがある程度強くないと、連邦軍が勝つた理由に説得力がない。逆に連邦軍が勝つたのではなく、「ジオン公国軍

『機動戦士ガンダム』って、リアルロボットって言われますが、ジムが弱く描かれていることによって、スーパーロボットのなタイトルになつてしまふんですよ

が自滅した」ということであれば、ガンダムやジムはどうでもいい存在になつてしまいますから。

リアルを突き詰めれば強いジムが見えてくる

——スペック的にはジムもガンダムに劣らない存在ではあるのですが、アニメの後に作られた設定ですからね。演出の意図と、ファンの理想とはどうしても離れてしまいますね。

仲 アムロのパイロットとしての練度が低い状態でも、ガンダムはあれだけ強かつたじゃないですか？ 一年戦争も後半に行くにしたがつてアムロはニュータイプに目覚めていくので、一概に基準にするのは難しいですが、本来は訓練を積んだパイロット+量産化したジムのほうが強くなければ意味がない。『機動戦士ガンダムⅢ めぐりあい宇宙』でジムがリック・ドムを斬るシーンがあるじゃないですか？ 本来はすべてのシチュエーションで、ジムが圧倒しているべきなんじゃないですか？

——あのジムの強さこそが、本来の性能だと思う人も多かったでしょうね。以後のシリーズでも作品を重ねるごとに、ジム像が変化していくのは「本当は強い」と思っている人が多かったからかもしれません。特に

OVAでバリエーションが登場したことは大きかったと思います。

仲 そうですね。『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』の時に、ようやく強いジムが描かれたじゃないですか？ 「こうだよな」と思つたんです。ジムがこれぐらい強くなければ、一年戦争をリアルに考えると違和感が生じるんです。

——『0083』は現在の視点で見ても圧倒的なクオリティで作られた作品であることも、ジムの印象を深くしていますね。

仲 『0083』の時は、アニメーターの中心（総メカニカル作画監督）に佐野浩敏さんがいたことが大きかつたです。作画のキーマンがいれば、後は周り（メカアニメーター）が盛り上がり上がつていくというか……、結局みんな張り合つちゃうんですよ（笑）。いろいろな作監がいて、原画マンがいる中で、「絶対あいつに負けたくねえ！」というノリが生まれてエスカレートしていく。そして気づいたときには大変なことになつていくわけです。みんな真面目にやり過ぎちゃうから、結局は体を壊してしまうんです。僕みたいに、不真面目なぐら

いがちょうどいいんですよ（笑）。——仲さんとしては、一年戦争後のジムが格好よくなった理由はどんな

点だと考えていますか？

仲 やはりカトキ（ハジメ）さんの影響でしょう。パワード・ジムのデザインをはじめ見た時に、「カトキハジメ」という名前だけは知つていたのですが、「すごいデザインを上げてきた人がいる！」と驚いたんですよ。やっぱり「ガンダムの量産型だから、弱いわけがない」という思いはみんな持つていたんだなと。それを実際に形にして完成させてきたデザイナーがいるということは驚きでした。

——お仕事の流れとして、最初に『ガンダム』に関わられたのは、TVシリーズの『Zガンダム』ということですが。

仲 そうですね。仕事としても、全話見たのも『Zガンダム』が初でした。上京後、『ガンダム』の再放送をビデオ録画したこともあったのですが、最初に見たのが第15話「ククルス・ドアン」の島。「あれ、何かこれ違うな……」って（笑）。あの話を最初に見ると、「これがあのガンダムなの？」って思ふんですよ。

——『Zガンダム』にもジムⅡが登場しますが、位置づけ的にはあまり変わっていません。

仲 ええ、ジムⅡもやっぱり「弱いジム」になつてしまつていないじゃないですか？ その点はとても残念で



した。デザインのリアルにするために、姿勢制御ノズルを付けたり、センサーも付いていたりする。でも、僕個人として、それで強くないのなら、潔くない感じがしてしまうんです。結局弱いままなら、昔のジムのままの方がよかつたなあ、と。

なんでも「格好いい」ばかりではNGな理由

——『Zガンダム』は、MSの種類も多く、あまりジム系の出番もありませんでした。

仲 ジムのなMSといえば、『Zガンダム』ではネモのデザインは格好いいと思ったんですよ。味方側の量産型だし、活躍するんだろーと思っ
ていたんですが、やっぱりあまり活躍しない。新型機のメリットもあまり活かせていないし、しかも緑色。「なんで緑色なんだ!」と思うじゃないですか。ネモもガンダムに対するジムのもののイメージの呪縛から逃れられないのかと思いました。

——仲さんは『機動戦士Zガンダム』劇場版にも参加されていますね。
仲 『Zガンダム』劇場版の時は、あまりジム系の記憶はないですね。覚えてるのは、富野(由悠季)監督に怒られたことでしょうか(笑)。僕

は格好いい物が好きなので、必然的にメカも格好いい方向性で攻めるわけです。その原点を探っていくと、やっぱり『エイトマン』になるんだなと感じます。ややマイナーな作品だったのですが、桑田次郎先生のシャープで格好いい絵が大好きでした。『Zガンダム』劇場版の時にも、「とにかく格好いいこと」を貫いたら、富野監督に「仲くんは格好よく描きすぎるから、かつこ悪く描くことを覚えなさい!」と言われまして(笑)。思わず「TVシリーズが格好悪かったから、格好よくしてるんです」と言ってしまったら、監督は「そうなんだ」と啞然とされたんです。

モブのようなやられメカが格好よかつたら、意味がありません。主役級のZガンダムに関しても、かつこ悪く描いた上で「表現の幅を広げろ」という監督のご指摘だったと思うんです。Zガンダムでもポロポロになつてかつこ悪いシチュエーションがあつて、それはポロポロにかつこ悪く描くべきなんです。

——難しいところですね。プラモデルなどセールズを目的として考えると、ポロポロでも格好よい方がいいと感じますし。

仲 そこは悩ましいところでしょう

ね。ただ演出に従うのであれば、劇場版のラストシーンのポロポロになつていてZガンダムは、もつとかつこ悪くてもよかつたんじゃないかとも思います。かつこ悪く描かれていくけど、逆にそこから復活するっていう感じが伝わってくる。そう描くことで、描き手側の表現の幅も広がって、受け手側もちよつと意外な感じを受けられると思うんです。あのZガンダムのガッツポーズなんて、富野監督の演出としては今までにないことでした。「やらないことをやっただ」監督もおっしゃっているわけで、僕個人の「格好よくしたい」ということを押し付けたら、それは失敗になつてしまいますからね。

ディテールの豊富さがリアルな理由ではない

——他に『Zガンダム』劇場版では、どんなことを覚えていますか?

仲 感想としてよく言われたことで覚えてるのが、「プラモデルを見ながら描いている」ということなのですが、実際には違うんですよ。プラモデルをそのまま見て描くと、アニメーターはプラモデルサイズのものを書いてしまうから、そのまま使うわけがありません。僕らはちゃんと

意図して、全長18メートルの巨大兵器を描いているんです。

例えば、実際の機械に当てはめてみるとわかりますが、アップになつた時は意外と線が少なくていいんですよ。プラモデルのディテールのように、大量に線が入っているわけではありせん。そんなに分割線が入っていると外装が簡単にバラバラになつてしまいますからね。意味がある線って、せいぜいメンテナンスハッチのディテールぐらいじゃないですか? そんなことを考えていくと、意味のないディテールはそれほど増えませんが、ですから線に頼らず、面の変化で立体的に見えるということも意識しています。

——どうしても密度感を埋めたいために、ディテールを増やしたいという気持ちもあるでしょうね。特に立体物だと空間に存在するわけですから、間を持たせたくなるのも理解できます。ただ、映像表現になるとまた考えることは変わるでしょうね。

仲 大きさを表すために、手前にディテールの密度を求めるのはちよつと違うと思うんです。奥行きに感じ、逆で後方に密度が上がっていくって、逆に手前は広く描くという方が、人の目で見えることを意識していくと、理にかなっている。「手前にあつて目に入りやすいからディテールを描き込む」というのは、映像表現的にはちよつと違うでしょうね。

——たしかに近くにある物は大きく感じるわけですから、細かいディテ

『機動戦士ガンダム0083 STARDUST』
ようやく強いジムが描かれたじゃないですか?
「こうだよな」と思ったんです

MEMORY』の時に、



ールがあるのは妙な感じがあります。
仲（手前にある）大きなもののほど線は減っていくでしょうね。そんなに分割線があったら、強度は維持できないでしょうし。ただアニメと現実にあるものと違うのは、やっぱり「線が少なくと寂しい」という気持ちを抱いてしまうことでしょうね（笑）。

そこは考えながら線を足してみたり、引いてみたり。設定上では意味の分からない凹みがあるけれど、実はここにルーバーが切つてあつて、排気口があるとか。意味を考えていけば、無駄と思えたディテールにも存在理由は見えてくるんです。

——リアルに考えていくと、宇宙で作る18メートルのロボットって、ほぼすべての部品は一発抜きであるべきなんでしょうね。でも、そうなる と本当にジムの腰アーマーのように、一枚板のままになってしまつて。

仲 ジムをはじめ、特に一年戦争のMSに関しては、素のロールアウト状態では、むしろのっぺりしている方が正しいわけです。装甲にディテールを加えるにしても、「壊れたからパッチを当てている」「そのパッチの上からペイントをやり直している」という感じで変化を加えるディテールは合っているでしょうね。でも実際にアニメでやろうとすると、仕上げの方たちから、「ふざけるな！」と言われてしまいますが（笑）。

——実際にそのようなディテールを実現するのは、CGの方が適していると感じますね。

『機動戦士ガンダム サンダーボルト』のデザインワークスでは、ガンダムは本当に強そうで、ジムとはまったく異なる存在という線引きをしたんです

仲 ただCGの整理されたディテールには、こういうアバウトなディテールは合わないかもしれません。パネルごとの塗り分けに関しては、『スター・トレック』のエンタープライズ号のアズテックパターンなどが典拠型例ですが、装甲の補修やレタッチしたカラーというのは、もっとランダムなものです。

色合いに関しても、同じ方向性の色でも塗装された時期によって、退色具合も違ってくる方が面白いでしょう。手描きならその風合いは出せると思いますが、CGは「そういうパターン」だと思われてしまう危険性があるかもしれません。格好いいんですけど、手間的に手描きアニメでは無理でしょうね。

——一概にディテールが多ければリアル、という考え方はちょっと違うんじゃないでしょうか。

仲 ええ、プラモデルでも、過剰なウェザリングは微妙に感じてしまうんです。例えば戦車をウェザリングで汚しまくるのは、ちょっと違うんじゃないかなと。これが「戦後30年ぐらい経って朽ちている状態」を表現するなら構いません。でも使用中の戦車が錆はかりの状態って、「整備が行き届いていないんじゃないの？」

と思えるじゃないですか？ 車にしてもバイクにしても、キレイにしておくことで、トラブルを未然に防げますから。汚れていると、たとえばオイル漏れも気づかないし、故障も分からないですからね。

——塗装も基本の目的は表面材質の保護がもっとも重要で、本来ハゲチヨロは避けるべきですものね。

漫画ならではの表現を魅力として落とし込む

——仲さんとジムとの関わりという意味では、『機動戦士ガンダム サンダーボルト』は重要な作品です。これも一年戦争を舞台にしていますが、ジムの位置づけはちょっと変わっていると感じます。

仲 この作品ではジムが活躍するじゃないですか。そこはとても好きなところですね。

——プロデューサーの小形尚弘さんにお話を伺った時に、「サンダーボルト」は仲さんがやろうと言ったからスタートした」という趣旨の話を聞いたのですが。

仲 僕は「やりたい」と言ったのではなく、「見たい」と言ったんです（笑）。「この作品、アニメで見たいな。メカはCGでいいんじゃない？」と。

僕自身が見ただけで、そこは手描きじゃなければいけないとは思っていませんでした。でも言い出しつべなので、「責任を取ってくださいね」という形になってしまったんです。

——漫画原作を描かれている太田垣（康男）さんが描かれるジムは、アニメとして描く場合にはどんな点が難しかったのでしょうか？

仲 一年戦争のMSということもあって、結局は箱で構成されているんです。例えばまっすぐな面を見ても、人間の目には歪んで見えるじゃないですか？ 作画する際に、本来は四角く描かれている設定画を変換して描かなければならないんです。でもアニメーターは設定画に囚われている人が結構いるので、そのまま四角く描かれるリスクが高くなるんです。自分も最初に設定を描いた時は、本当に四角くなってしまつて、これはマズイと感じて。そこからかなり線を減らしていったのですが、減らしすぎて松尾衡監督に怒られてしまつて（笑）。描きやすさと、漫画MSの魅力を両立するバランスは相当苦労しました。

——漫画のイメージを、そのままアニメに落とし込むというのは難しいことなのではないか？



作画の労力や、
やられメカとしての量産型としては、
本当に良いデザインだし、
意味のある存在だと思うんです

仲 それはもちろん。特に太田垣先生の描き方は、ペンの強弱の出し方によって、一枚絵としての完成度を高めているんですよ。メカ自体も、そのタッチで描かれた世界観に沿ったデザインがされている。そもそものデザインの方向性としては、一年戦争のMSがベースですから、昨今の派手なMSに比べれば素っ気なく感じるかもしれません。でも圧倒的なペンタッチで、力感や躍動感を感じさせてくれるんです。

——単純にデザインだけでは語れない部分があるんですね。

仲 ただ、残念ながらペンタッチの再現という点については、アニメは適していないんです。もしそれを実現するなら、動画のセクシオンを強化しなくては いけません。でも動画のセクシオンは日本では壊滅状態で、海外ではそういうニュアンスは拾ってもらえないんですよ。昔はそれでも「メカが好きな動画マン」がいて、喜んでやってくれていたんです。

——アニメ版の『サンダーボルト』に関しては、メカの周辺を緻密に描くことで、リアルさを出しているような印象でした。

仲 それはありますね。例えばデブリに関しては、思った以上に密度感が出てよかったと感じました。デブリという邪魔なゴミに動きが付いただけで、こんなに画がよくなるんだと感じたんです。デブリについては松尾監督の指示ですが、この判断は正しかったと思いました。

——こうした細かい描写ができるのも、今の時代ならではですね。

仲 デブリはCGで描写しましたが、本当にありがたかったですね。CGはちゃんと「建物はこういう感じになっている」と説明すると、ちゃんとそのように作ってくれる。構造がしっかりした建物が漂流物として流れてくると、作品の密度感が上がるんです。

CGは無機物の密度感を出すことを得意とするツールですから、手描きのメカとの相性がいいんですよ。漫画も非常に描き込まれて、素晴らしい表現をしています。アニメは動きと色を出せますからね。太田垣先生も「動く勝てない」とおっしゃっていたのですが、そこは表現方法が違う、アニメならではの密度感が出せたのではないかなと。

ジムから受ける印象は カメラの形状で決まる？

——『サンダーボルト』で、ジムとフルアーマー・ガンダムが登場しましたが、その方法論の違いみたいなものはありますか。

仲 デザインワークスの担当はきっぱりと分けていまして、僕はガンダムを担当し、ジムは玄馬（宣彦）さんが手掛けています。ガンダムは本当に強そうで、ジムとはまったく異なる存在という線引きをしたんです。フルアーマー・ガンダム自体のデザインを見ると、ツイン・ビーム・ライフルにランドセルの大型ビーム砲、

ミサイル・ポッドがセットになっていて、どうしても線は豊富になってしまします。持っているものが違うから、どう描いても強そうなんですね。そこは両者の関係は意識せずに、ガンダムはガンダム、強いものだという意識で描きました。

ですからデザインを分担したこと、意識的にガンダムとジムのアプローチへの区分けができたのではないかと思います。みなさんもご存じのとおり、玄馬さんは『ガンダム』に関しては相当強いこだわりを持っている人ですからね（笑）。こちらが言わずとも、正しいデザインが上がってくるわけです。

——仲さんが関わられてきた作品の中で、印象に残っているジムは？

仲 『0083』で一画面にジムが15体ぐらい出てくるシーンがありまして、止め画のスライドなんですけど、本当に大変でした。「量産型だから線を少なくする」という点については、RGM-79ジムのデザインは納得できます。自分で満足できるジムを描けた……という記憶はないですね……。ジムを描く機会に恵まれなかったことや、原画を担当していたのが短かったこともあり。なにより『ガンダム』以降の作品では、ジムが出てくるのが意外に少ないんです。『Zガンダム』でも、ジムIIはほとんど出てきませんし、活躍もしませんから。結局ガンダムを描く機会の方が、多くなってしまうんです。

カメラアイは目線が取りづらく、キャラクター性を出しにくいという話をよくお聞きします。仲さんはどのように感じていますか？

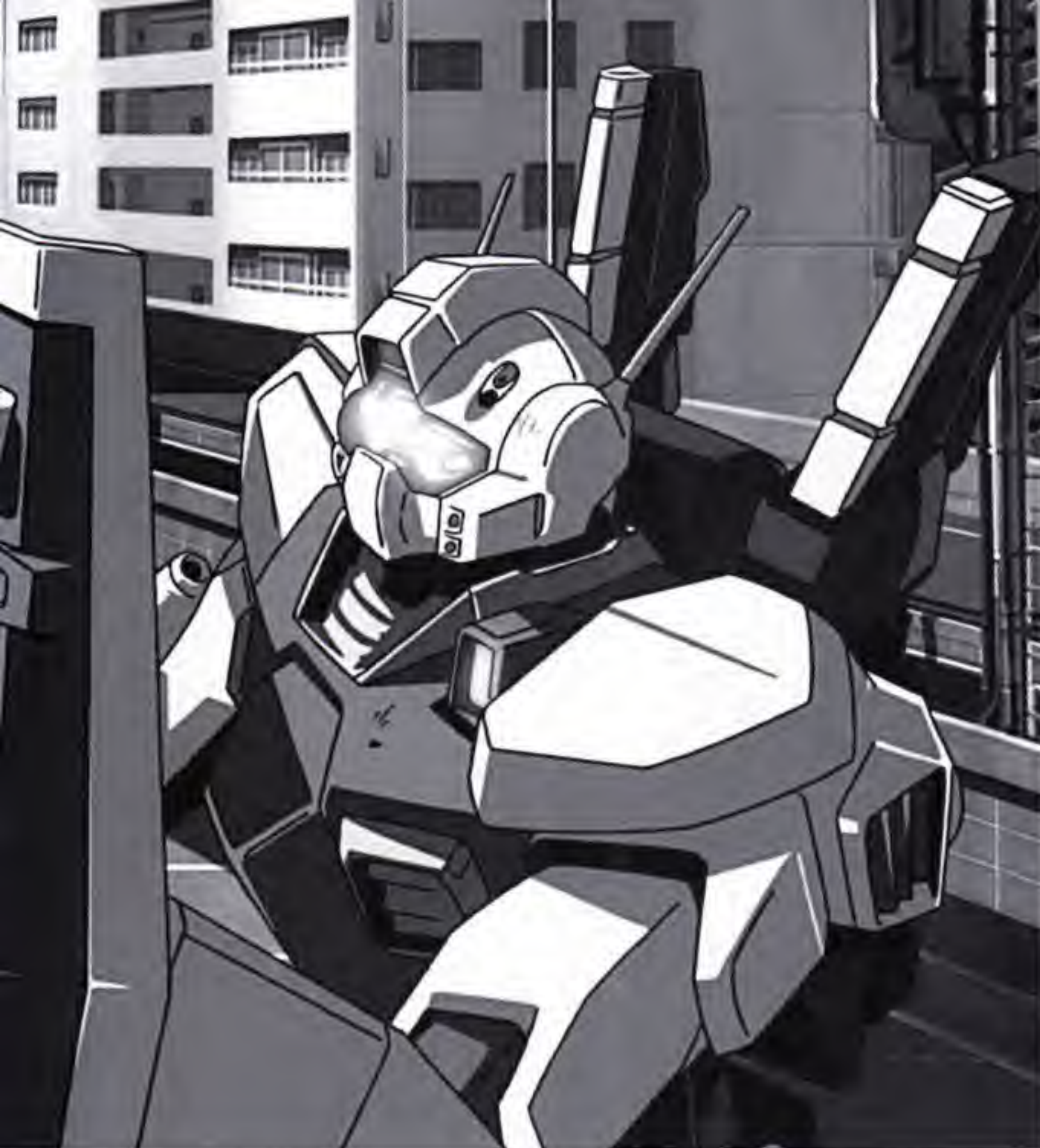
仲 たしかにそれはあるでしょうね。特にセンサーの上がポツと（凸）出てるじゃないですか。あれが弱く見えてしまう最大の要因ですよ（笑）。だからセンサー部分にひさしのあるタイプのジムは格好よく見えるんでしょう。

MSVでも、バイザーでセンサー部分を隠したジム・スナイパーカスタムが飛び抜けて人気があるじゃないですか？ また『サンダーボルト』のジム改陸戦型も、主役が乗っても様になるぐらいのデザインになっている。RGM-79のままイオ・フレミングが乗るとしたら、メカよりもイオの存在の方が勝ってしまったでしょう。

——デザイナーさんとしても、あの凸の部分処理したくなってしまうんでしょうね。でもあの部分がアイデンティティーでもありますし。

仲 そうでしょうね。カッコよくするのなら、あの部分（凸）をデザイナーさんが隠したくなってしまう気持ちも理解できます。繰り返しになりますが、作画の労力や、やられメカとしての量産型としては、本当に良いデザインだし、意味のある存在だと思っ

たんです。ただ、かつこよさや量産型の意味を突き詰めると、僕個人としては「もっと強いジムが見たい」という気持ちになりますね（笑）。



THE GM
INTERVIEW

Part.

3

NOBUHIKO GENMA

玄馬 宣彦

インタビュー

現代にジムを描く 伝道師のジム観とは

『機動戦士ガンダムUC』や『機動戦士ガンダム サンダーボルト』など、現在でも宇宙世紀を舞台とした作品が多く作られている。それらの作画スタッフでもある玄馬宣彦氏は、特にメカ作画において中心的な役割を務め、モビルスーツ（ジム）を現代的に描く上で欠かすべからざる人物といえる。その玄馬氏は、本書のテーマでもあるジムというモビルスーツについて、どのように捉えているのだろうか？ 思い入れとジム像を語っていただいた。

PROFILE

●げんま・のぶひこ

『機動戦士ガンダム第08MS小隊』や『ガサラキ』などで原画を務め、『機動戦士ガンダムUC』ではメカニカルデザイン、メカ総作画監督などを兼務、『機動戦士ガンダム サンダーボルト』ではデザインワークスなどで参加、緻密なメカ描写の描き手として知られるアニメーター。

味方側の量産機ジム
その存在自体がこれまでの
アニメとは違う驚きでした

戦争をするのならば 味方機も沢山あるはず

玄馬 私は6歳上と3歳上の兄がいたので、よく一緒にあってTVを見ていたんですよ。特撮作品やロボットモノも見えていました。そのせいか私より少し上、兄たちの世代くらいの人たちと話をすると、当時見ている作品が同じなので話が合います。だから作品も『無敵超人ザンボット3』に『無敵鋼人ダイターン3』を見て、特撮作品でも『秘密戦隊ゴレンジャー』などを見ていました。

そうした流れで『機動戦士ガンダム』に至るわけです。『ガンダム』では、最初にジムじゃなくてザクが出ましたよね。あれを最初に見た時に、子供ながらに感じたのは「同じ

デザインが使いまわされている」ということです。『仮面ライダー』のショッカーの戦闘員のように見えました。『ザンボット3』でも『仮面ライダー』のメイン怪人でも、毎回新しい敵が出てきましたよね。

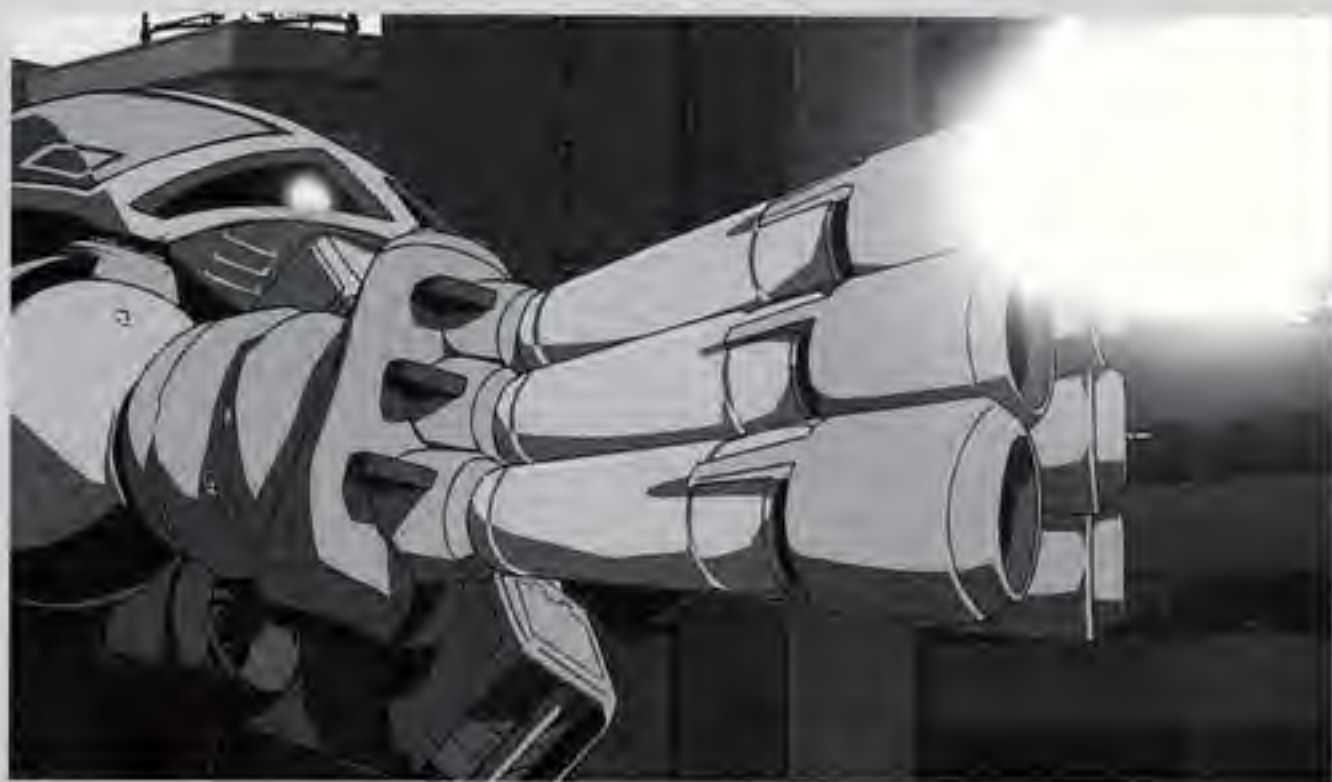
それが「このアニメ作品にはザクとかいう同じ敵しか出ないのか」と。でも実際には、その一体をものすごく掘り下げている。そのザクがあつて、一方には一体だけのガンダムやガンキャノンがいる。

でも、『ガンダム』で描かれていることを戦争として見た時に、ホワイトベース隊以外の状況はどうだったのだろうというと、最初は何も見えないわけです。子供心にもホワイトベース隊は「イヤな任務ばかりを実験的にやらされているんだ」とい



うことはわかる。ガンダムだけがど
んどん最前線で戦っていたところで、
ジャブローに到着する。そこに「ジ
ム」という、今までのロボットアニ
メや特撮になかった味方のメカがた
くさん出てくる、というのがすごく
衝撃だった。ガンダムがいない地域
には、ガンダムの代わりにこういう
メカがいっぱいいるなら、確かに戦争
ができるじゃないかと。なんという
か目からウロコでした。

う面でも、ザクじゃ勝てないとなる
とグフが替わって出て、それもダメ
ならドムが出てくる。でもジャブロ
ーくらいまでいくと、そのグフもド
ムも量産されて、わんさか出てくる。
その一方、連邦軍ではジムが導入さ
れている。これで勝てるのかという
くらい、ジムは弱いんですけど、後
発で登場したからビームも使えたり
して、ア・バオア・クーに行くとし
ツク・ドムを斬ったりしている。「あ、
これは結構強いんだ」と。そういう
「量産機」が最初に出てくるのが『ガ
ンダム』の凄さでしたね。



ろだと81年に放送された『超時空要
塞マクロス』で出てくる。あれはも
っと量産型を突き詰めて、感覚的に
顔が違っただけで全部同じ機体とい
うところまで進めた。ここまでいくと
バルキリーがもっているポテンシャ
ルだけで引つ張るという感じでした
ね。私は『マクロス』ではデストロ
イド系が好きなんです。そういう
ものも含めて、メカとしてリアルだ
った。『ガンダム』とは関係なく『マ
クロス』の企画は動いていたという
話かもしれませんが、初めて量産型
を見た起点としては、やっぱり『ガ
ンダム』なんです。ガンダムもス
ーパードットの流れを汲んで生ま
れてはいます。でも、ザンボット3
やダイターン3の兜のクワガタ（前
立て）部分をガンダムでは白く塗っ
てアンテナとして理由をつけている。
そういうリアルがありましたね。今
はまた黄色くなっていますけど。

そんなわけで、ジムというのは最
初に投下された量産機としてすごく
エポックなものと私は思っている
んですが、ちょっと今の人たちはジ
ムを軽んじているというか、「ジム？
ああ、劣化したガンダムだよな」み
たいな風潮がありますよね（笑）。
若い人は最初からジムのメカが登
場する作品に触れているから、なか
なか私の思いが届かないというか、
なぜこの凄さをわかってくれないん
だって（笑）。ジオン公国軍にはザ
クがあつてグフがあつて、それをパ
ワーアップさせる方向で色々なモビ
ルスーツが登場した。ガンダムとジ
ムというのはそれとは逆で、一番ス
ゴいものを最初に作って、それを最
適化してもっと安いものが登場する。
どっちも「リアルだな」と子供なが
ら、考えさせられましたね。

今の子供たちは、それを知らずに
量産メカがいるアニメをいきなり与
えられて、「可哀想だな」と思います。
ただ、自分もこんなこと言っていま
すが、仲盛文さんに「こんなSFの
面白い映画があつた」と言うのと、「あ
あ、それは『スター・トレック』が
元ネタだね」とよく言われる。大概
のキテレツ映画の元が『スター・
トレック』にあつて、きつと仲さん
世代から私などを見ると「ああ、『ス
ター・トレック』を知らずに見てい
るんだな」と思われているんだろう
と、悔しくもあります。それで悔し
さのあまり『スター・トレック』宇
宙大作戦』のDVDボックスを買っ
てしまいました（笑）。よくあるフ
ォーマットだけど、オリジナルだと
こういうものなんだ、と発見が色々
とありました。ジムとは話がだいぶ
それてしまいましたが。

**枝分かれした流派が
共存できる世界に**

——やはり玄馬さんの中ではジムは
特別なモビルスーツなのですか？
玄馬 そうだと思います。アニメの
放送が終わった後、作品が動いてな
い間は、ユーザーはモノを欲するん
ですけど何もない。だから『プラモ

「GM」は「GUNDAM」の略だと
駄菓子屋で納得したんですが……

狂四郎』とかに走るわけですけど（笑）、『プラモ狂四郎』の相棒の健（※丸山健）がジム・キャノンに乗って出てきた時は燃えましたね。なんとか自分で作れないかとプラモデルを改造しましたよ。ジム・キャノンっていうのも微妙な機体で、ガンキャノンやガンタンクがすでにいるんだから、ガンキャノンの量産型を作ればいいように見える。でもジムに砲を着ける方がメリットもあるような、そういうリアルなせめぎあいがある。そういう物を与えてくれましたね。

ザクもすごかったけど、お話したように、私としてはザクというのは最初の印象が、手抜き。だった。だからザクのインパクトよりもジムのインパクトが強かったかなと。

——『ガンダム』の作中ではジャブローで、ガンダムとジムの関連性が解説されたりしているのも、今までにないものでした。

玄馬 ジムっていう名前も「なるほどな」と思ったんですよ。小学校の高学年頃だったか、10円を入れたら光るルーレットみたいなのが駄菓子屋にあったんです。当たるとオマケがもらえるヤツ。その『ガンダム』のパチもんがあったんですよ（笑）。イカロスってロゴが書いてあって、

そこにアンテナだけ曲がつて加工してあるガンダムが（笑）。ライフルを構えた絵が描いてある。イカロスって書いてあるのに、その後ろにGUNDAMってロゴも入っていて、それがガンダムの絵で隠れてGとMしか見えない。それを見て「ああ、GUNDAMを省略してGM（ジム）になったんだな」と。デザインと名前が一致して納得したんですけど、実際は、ガンダムマスプロダクツの略だって聞いて「何だ違うのか……」って（笑）。

——玄馬さんイチオシのジムがやっぱりあるんですか？

玄馬 基本のジムがいいですね。腰の装甲版はもちろん1枚。プラモデルの1/144スケールのHGUCでジムが出た時に、「こういう手があったか」と思ったんですよ。

昔『機動戦士ガンダム外伝 コロニーの落ちた地で……』というゲームがあつて、それに登場するジムは腰の装甲が2つに別れていたんですが、あれだと私としてはやっぱりシルエットがよくなくて、ポーズを取るとルックスが崩れてしまう。「うーん、コレは違うな」と思っていたら、HGUCで1枚になっていた。ジム系のプラモデルは大抵真ん中に腰の



ブロックがあるか、1枚のように見えているけれど、2枚に別れている、という構造だったから、自分としてはやっぱりコレだよな、と思いたね。まあ好き好きですから「腰板は1枚」とことさら主張する気はないんですが……。

——現在の実物のロボットはアシモのように腰から釣る脚が多いから、意外と合理的に見える気もします。

玄馬 80年代後半に入ると、一瞬アニメも時代が変わる。それはメカもののアニメ全般で起きていて、例えば劇場版の『超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか』（84年）になると、それまでのバルキリーの丸い指から、まさにマニピュレータリィアルな指になる。それはスーパーロボットからリアルロボットにさらに変化していく起点なんだと思いますが、ガンダムでも『機動戦士ガンダム0080 ポケットの中の戦争』では、そういった波があった。ジム・コマンドはこれまでのジムとはプロポーションも違えば、ディテールも違う。それは79年に作られた『ガンダム』の頃の作画の解像度では、ジムはこうだったけど、実はこれだけのディテールがあつたんですよ、ということを示したものでした。ハイゴッグやズゴックEになるともう、まったくデザインラインそのものが違う。

それは自分が見ていたものの解像度を上げるとこうなる、ということを表す一方、リアルな押し売り、と

いうこともできた。その解像度革命に付いていった人と、付いていかなかった人が枝分かれして、どんどん違う方向に進んでいくことになる。それが90年代に入ると噴出してくるわけです。プラモデルのマスターグレード（MG）では、リアル志向になって、ガンダムのダクトの黄色い部分は、ガンダムMk-IIのように外側に出てくるし、その他にも色々なりリアルを詰め込んで「これがリアルで格好いい」という。

でもそれは、枝分かれした時に付いていかなかった人が見たら「違う」と感じてしまうものでもあったと思います。2000年代に入った頃は一番そういうケースが多かったんじゃないでしょうか？ MGのガンダムver. ONE YEAR WAR 0079とか、可動もすごくて、デキがよくて、マーキングもすごくオシャレなんだけど、「あれ、オレはゲームでこんなガンダムに乗ってたんだっけ？」と思った（笑）。オレが乗っていたジムは、もっとシヨボかったんじゃないのか、と。もちろん全否定じゃなくて、ああいうハイディテールでオシャレなものイイと思うんですけど、ただ自分が乗るんだったら、あくまで腰の装甲は1枚のツルツとしたジムがいいなと（笑）。その後はそういう揺り返しもあって、HGUCが、あれだけディテールは足しているのに全体としてはアニメ版に近いデザインに戻っていく。

じゃあ、その流れの中でジム・コマンドはどうなるのか。なかったことになるのか、パラレルなのか、あるいは……という時に、共存するという道をとった。ジャブローのジムもジム・コマンドもその他のジムも工場が違ったり、時期がちよっと違ったりただけで、同じジムとして共存できる世界になった。

それはすごくありがたかったですね。なかったことにして、ファンを減らすことをしなかったのは素晴らしいな、と思います。

——『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』ではC型（ジム改）が出てきました。それは『0080』がないと成り立たないデザインだから、ということと多少なし崩し的に行われたことかもしれないですが、結果的によかったですよね。アニメを作りながら微調整しているんだと思います。

玄馬 『0083』のジム・カスタムは、ちよっとガンダムっぽくなってるパーツとか、よりジムがパワーアップしている感じがありますよね。「平和な時代にそんなものがあるのか？」という話はあるかもしれませんが、これだけ。作画の解像度が上がっているから「こうなんだ」という点も設定上の年代が進んでいるから『0080』より受け入れやすかった。あとは細かい話ですが、実体弾のマシンガンがよかったですよね。あれは『0080』で出たものですけど、コムサイを撃ち落とす時にガン

ダム試作1号機があのマシンガンを使っていて、個人的には「おお!?」って思ったんです。けれど周りの人の反応はあまり……。

ガンダムが実体弾使うっていいと思うんですけど。

人目を引くためのアバンで選ばれたジュアッグとジム

——『機動戦士ガンダムUC』の時に、色々な過去作品に登場したモビルスーツを出したというのも、何かメッセージがあつたのですか？

玄馬 あれはどちらかというと、デルタプラスといったカトキハジメさんの格好いいデザインの機体が全面に推し出されすぎると、さっき言ったような古い人、枝分かれで付いてこなかった人には「こんなモビルスーツ見たことない」と、そっぽを向かれてしまうので、あえて古いものはそのまま出したい、ということですね。ズゴックも色を変えただけでそのまま出しています。

——ストーリーとは直接関係ない部分ですが、『ガンダムUC』ep4の、冒頭のジュアッグ対ジムⅢには驚かされました。

玄馬 今思うと、してやったりという感じはちよっとあります。あれがなかったら誰も今ジュアッグのプラモデルなんて作ってくれなかったんだろうなあと（笑）。ジュアッグに特別な思い入れがあつたわけではないんですけど。あの一連のシーンはアバンの引きですよ。『機動新世



紀ガンダムX』は後半、視聴率の巻き返しのため、アバンでは秘密になっている部分を描いたり、本編と関係ないこぼれ話とかを入れたり、みんなが知りたい情報を入れていた。それと同じです。冒頭で作品への興味を引くために、ジュアッグを入れ込んで見せているんです。

その対戦相手がジムⅢというのは単純に私の趣味です（笑）。ジムⅢはもうちよっと私の中では「活躍の場を与えられてもいいはず」という機体でしたから。いやいやジムⅢは強いんだぞ、と。ジムⅢのバックパックや肩のスラスタールとかは、ガンダムMk・Ⅱ寄りなんです。ジムⅢはガンダムMk・Ⅱベースなんだと思います。あんな見た目ですけど（笑）。今後、プラモデルになる時は、是非ジムⅢはガンダムMk・Ⅱのフレームを意識した製品にしてほしいです。

——設定的にはスラスタール類をジムⅡに後付けして、推力周りを強引に強化した機体と思っていましたが。

玄馬 いや、脚のスラスタールの造りを見ると、かなりガンダムMk・Ⅱを意識していますよ。そこはちゃんと意識してプラモデルは作ってほしい。仮にジムⅡを改修している

んだったら、補強を入れている感覚はほしいですね。今は「ジムフレーム」を使ったMGのジムⅡがありませんね（MGジムⅡでは、MGジムⅡ ver. 2.0の内部フレームを流用している）。

自分も買いましたけど、プレミアムバンダイで、せっかく定価で買っているんだから「内部フレームもちゃんと作り込んでくれよ」みたいな（笑）。いや、製品が出ているだけありがたいかな。

『機動戦士Zガンダム』のジムⅡと、その後に作られたけれど、設定的にはジムⅡよりも古い『0080』のジム・コマンドとでは、明らかにデザインに時代性が出ている。そういう部分が今まで引かかる部分ではあつたんです。『ガンダムUC』もそうですが、古いジムのラインを引いているものと共存できる世界ができてよかったと思いますね。

——『ガンダムUC』のように同じ世界観で両者を描く時に、何かデザイン上の溝を埋める工夫があつたりするのですか？

玄馬 特徴的なレトロフューチャーの部分を消してしまうと、勝手に今風に解釈しているようになってしまふので、プロポーションにしろ、レ

ジムとジム・コマンドが共存できる世界になったことは素晴らしいです

トロフューチャーのところは実はあえて泥臭さは残さないといけないんだと思うんですよ。ただ『ガンダムUC』は、カトキさんのプロポーションで統一されていたので、プロポーションはそこに寄せているけれど、昔流行ったデザイン……例えば『Zガンダム』の機体なら、あえて蛍光グリーンやイエローだった箇所はそのままの色を極力使って、といった工夫はあります。色のイメージって強いですから。デザインも今のデザインだと使われていないようなものなるべく拾っていつてます。

——『機動戦士ガンダム サンダーボルト』では、玄馬さんが中心となつて作中のジムを作り上げていったとお聞きしました。

玄馬 私が、というよりは皆でやりとりしながら作りしました。あの作品は機体の影の付け方も『ガンダムUC』とは違うんですよ。『サンダーボルト』の影の付け方は、ざっくりなんですけど、設定画には実線がとっても多い。実線が多いと塗り間違いが多くなつて手間になるのですが、その分、思い切った影の付け方をしています。ここからここは普通に描くけど、こっちは全部影にする、とか。アニメが面白くなるような、大胆な影の着け方がしてあつて作りが違ふんですよ。『ガンダムUC』はカトキさんの描いた線画に合わせるためにより洗練した感じが出るようにデザイン影を発明したり、実線を減らして影で表現していたりします。

——デザインとしては、太田垣康男先生のコミック版のジムよりも、少し昔風ですよ。

玄馬 あれこそ仲盛文さんが陣頭指揮していましたね。昔のジムの感じが出るように、意識してやっていたようです。

ジムのなモビルスーツは今後どう生き残るのか？

——やはりジムも人によって色々な「流派」があつて当然だと思っています。今でも大河原邦男さんは一見すると一種、大らかなMSVを描かれ続けている。ダブル、あるいはトリブルスタンダードがあるから、ガンダムの世界は、とても面白いとも思っています。

玄馬 その大河原さんの描いたメカを今風に模型で作つたりする人もいますしね。

——「機械でバイザーはいらないだろ、はじめから内蔵しておけ」つていうツッコミもあったりしますが、大河原さんが描く絵だと、やっぱりバイザーが付いてないと、というのはありますね。

玄馬 それを言ったら、ガンダムのビーム・ライフルに付いている照準器もおかしくなつてしまいます。でも、そういう話じゃあないでしょう。そこを否定し出したら、面白さがなくなつてしまう。

——20代や30代が見たら「それはリアルじゃない」と言うかもしれないけど、それは大河原さんなら「大河



ジム・キャノンで戦い続けたかったのに
ジム・スナイパーⅡに乗るなんて!!

原さんらしさ」といったものが出てくる部分ですから。ある意味リアルなんだと思います。

玄馬 これまではジオン公国軍側の記号がモノアイ、連邦軍側がバイザーでしたが、そういうのもちゃんと系譜として残っている。でも『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』までいくと、アナハイム・エレクトロニクス社がモビルスーツ開発を一手に抑えてしまつて、ジェガンやゴッグも実は中身がモノアイだったりする。ふくらはぎの付き方も、結構ザクと同じ付き方をしているんですよ。カラーリングはジム系の匂いを持ちつつ、旧ジオンの系譜を継ぐ意匠もある。ただ、そういった部分を突き詰めていくとその後の作品は、『ガンダム』の頃ほど明確に分けられないというのか、混ざつていて、どっちにどの機体があつても構わない状況になつていく。なかなかやり難かつたりはするんですけど、そのあたりはやはり『ガンダム』には最初にあった人のアドバンテージというのか、強みがあるなと思います。作り手としてはちよつと羨ましいですね。

——新しいことを忍び込ませることなかなか難しいですね。ゲームやコミックだといろんな機体がドンド

ン作られている印象ですが。

玄馬 そのゲームに登場した機体から、今度は熱心なファンが生まれることもありますよね。イフリートはそうですね。あれは8機しかないらしいですけど、『ガンダムUC』ではカトキさんと「うちで1機使っちゃいましょう」といつて使つてしまいました。名前はなんだつたかな……？

——イフリート・シュナイドですね。玄馬さん、ジムじゃないと実は覚えてない!!

玄馬 ああ、そうそうソレです。イフリート・シュナイドは設定協力の関西リョウジさんが「出してくれ！」つて推していた機体なんです。関西さんは結構ヒロイックなものが好きなんですよ。きつとジムとかはクライですよ(笑)。

——そういうところをとつても、やはり人によってモビルスーツの「流派」の違いは面白いですよ。そういう風に色々と違う人が集まつて、でも個人個人には熱量がある、という人たちが作つていけば「ガンダムシリーズ」が混沌としてくるというのわかります。

玄馬 さっきも少し話した「コロニーの落ちた地で……」は、ラストでは

ジム・スナイパーⅡしか乗れないのがすごくイヤだったんですよ。これまでジム・キャノンですっとプレイしてきたのに最後だけジム・スナイパーⅡに乗せられて、えらいヒロイックになってしまった。もうテンションだだ下がりですよ(笑)。「ジム・キャノンに乗せてくれ」って。これで最後に乗るのがガンダムだったらどうしようと思いましたよ。ガンダムと模擬戦ができるダウロードデータが同梱されているバージョンがドリームキャストで出て、本体ごと買って、それだけをやってたなあ。

あと、ドリームキャストでは『ガンダムバトルオンライン』はやりました。自分がサラミスの艦長になって、自分のモビルスーツ隊を指揮していくゲームでした。自分は艦長だから見ているだけしかできないんだけど、あのゲームもジムがリスベクトされているゲームでしたね。まあ、ずっとサラミスに乗っていたいのに途中からマゼランに乗せられたりして、やっぱり横槍が入ったりするんですよ(笑)。

——いつの間にか、その他大勢の中の一人が自分で、それなりにスペシャルになるように頑張るけど決してアムロではない、という「コロニー

の落ちた地で……」の頃感覚はなくなっているかもしれないね。現在の若者は何でもスペシャルじゃないとイヤで、雑多な中の一人的なものに見向きもしない感じがあります。

玄馬 でも『ゴレンジャー』の頃も「赤」の話が多くて、たまに「青」の話をするくらいだったように思います。結局、一点盛りがスタンダードな時代があったんでしょう。

アニメも特撮も今は多様性の時代で、群像劇として描かれることも多いですね。一番新しい作品だと『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』もそうですね。全滅に近いエピソードでしたが、あれを子供の頃とか中学生の時期に見たら、かなりの影響を与えているんじゃないでしょうか？ あの結末を見て、すぐにソフトを買いたいとは思わないかもしれないけど、10年くらい経ったら「また見てみよう」という気になるポテンシャルを持ったすごい作品なんじゃないかとは思います。

——『オルフェンズ』のジムの機体といえばグレイズですが、あれは味方ではありませんでした。その意味では、ザクも兼ねていたように感じます。

玄馬 こう言う悪口のように聞こ

全部が格好良くてもつまらない
ジムのよう な 平均値 も必要なはず



えてしまうかもしれませんが、『オルフェンズ』のグレイズは格好よすぎるころがあった。今の時代は、やり難いかもしれないけど、格好悪いとまではいかなくとも、面白いデザインを入れてもいいと思います。それこそマン・ロディとか、よかったですよね。振り幅が必要なんだと思います。どれもこれも基準より全部格好いいし、面白いていうと、そこにはザクやジムといった平均値がない世界になってしまふ。

それこそ今はそういう平均値的なものが珍重されない、量産型は引き立て役でしかない時代だし、『オルフェンズ』も主人公側は、みなカスラム機に乗っていますよね。まあ、『ガンダム』の頃からそうだったともいえますけれど。

——ほとんどのシーンではモブであっても、劇場版の『機動戦士ガンダムⅢ めぐりあい宇宙』でジムがドムを斬ったシーンのような、たった一瞬だけど輝くものをいかにして入れるのか、という話ですよ。

玄馬 最近のアニメでも特撮でも、すごく話が複雑です。これをロボットのものに置き換えると、ロボットには主体がなくて、キャラの話とストーリーが前面にある。そこにあくまで添え物としてロボ

ットがあつて、それがうまく作品に噛み合っていないとダメなんだな、という印象があります。量産型もあってもいいけれど、それ以上のものにはなれないし、そこにお金を落とすてくれる人もいない。お金がないとそれを対象にした商品も出ないし、ますます注目されないということになっていく。

——十数年前の時点で、学芸会で主役が5人いる時代ですからね。ジムのような量産機に思い入れがないのは仕方がないかもしれない。

玄馬 定期的に振り幅がありますから。そこをうまく拾ってもらえればいいんですけど、今の空気だと振り切ったものを作ると失敗すると思われると思います。ジムを主役メカにしたガンダム作品を今作ったら……コケちゃいますよね。

——言ってみれば90年代は「ジムのなものが格好いい」という流行りがあったといえるかもしれません。後はどうやって玄馬さんのような人が「ジム文化」を守っていくのか、という話なのかもしれないですね。

玄馬 いやあ、どうなんでしょう、そこまでして守りたいものかな(笑)。その時はもう私も他の格好いいヤツに便乗しないと。「何だよ、あの変な凸顔のジムとかいうモビルスーツは!?」、みたいな(笑)。

なんて冗談です。やっぱり私はジムに乗って端っこの方で戦うのがいいかな。もちろん腰板は一枚のヤツでね。

森下直親画集2 鋼鬼 HAGANE ONI

A4サイズ／定価2,778円+税



グレートメカニック・スペシャル
モビルスーツ全集シリーズ



モビルスーツ全集 ⑨
ニュータイプ専用機BOOK
B5判カバー付 定価1,400円+税



モビルスーツ全集 ⑩
可変モビルスーツ／モビルアーマー BOOK
B5判カバー付 定価1,400円+税



モビルスーツ全集 ⑪
量産型モビルスーツBOOK
B5判カバー付 定価1,400円+税



モビルスーツ全集 ⑫
専用機モビルスーツBOOK
B5判カバー付 定価1,400円+税

機動戦士ガンダムユニコーン
RE:0096

メカニック・コンプリートブック

B5判カバー付／定価1,500円+税



グレートメカニックスペシャル
機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ
メカニック&ワールド式

A4判カバー付／定価1,900円+税



1983年の
ロボットアニメ

B5判カバー付／定価1,500円+税



グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

グレートメカニックG 2018 SPRING

A4サイズ／定価1,000円+税



大特集 伝説巨神イデオン

45年ぶりの復活! マジンガー Z / INFINITY

今こそ思い出せ! 『コードギアス』の物語を
コードギアス 反逆のルルーシュ

- ・ 劇場版マクロスΔ 激情のワルキューレ
- ・ ガンダムビルドダイバース & ガンダムビルドファイターズ バトログ
- ・ フルメタル・パニック! IV
- ・ INTERVIEWS
湖川友謙 / 樋口雄一 / 大張正己 / 賀東招二 / 海老川兼武 他

バックナンバーをご希望の方は、
お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒162-8540 東京都新宿区東五軒町3-28

☎03-5261-4818 (営業) <http://www.futabasha.co.jp/>
(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

※書店・HP以外に、電話・FAX・はがきでもご購入いただけます。

ブックサービス (営業時間: 9~18時)

☎0120-29-9625 (携帯電話も可)

☎0120-29-9635

いずれの場合も「社名(双葉社)、タイトル、購入冊数、
定価および住所、氏名、電話番号」をお知らせください。

グレートメカニックG 2017 WINTER

A4サイズ／定価1,000円+税

30周年直前大特集!
機動戦士ガンダム
逆襲のシャア

10周年記念
機動戦士ガンダム00

総力特集
無敵鋼人ダイターン3

- ・ 機動戦士ガンダムサンダーボルト
BANDIT FLOWER
- ・ INTERVIEWS
富野由悠季 / 大河原邦男 / 水島精二 /
松尾衡 / 海老川兼武 他



グレートメカニックG 2017 AUTUMN

A4サイズ／定価1,000円+税

今もう一度見る
装甲騎兵ボトムズクメン編

40周年記念大特集
無敵超人ザンボット3

- ・ ガンダムビルドファイターズ GMの逆襲
- ・ 機動戦士ガンダム サンダーボルト
- ・ 機動戦士ガンダム Twilight AXIS
- ・ 機動戦士ガンダム THE ORIGIN
- ・ INTERVIEWS
富野由悠季 / 高橋良輔 / 安彦良和 /
高千穂遙 / 宮武一貴 他



グレートメカニックG 2017 SUMMER

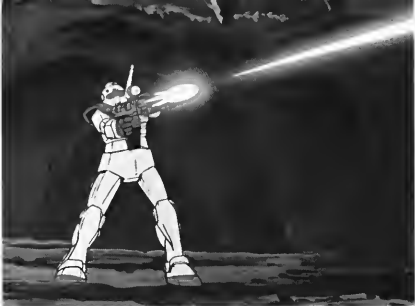
A4サイズ／定価1,000円+税

今もう一度見る
戦闘メカ ザブングル

第二章『発進篇』プレビュー
宇宙戦艦ヤマト2202
愛の戦士たち

- ・ 機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ
- ・ 疾風! アイアンリリーガー
- ・ 機動戦士ガンダム サンダーボルト
- ・ INTERVIEWS
富野由悠季 / 羽原信義 /
アミノテツロ / 海老川兼武 他





双葉社MOOK
グレートメカニック・スペシャル

モビルスーツ

MS図鑑 ジム

RGM-79

2010年4月17日発行

編集

オフィス JB
藤田幸夫 豊村保行 横本あゆみ
旭和朗 (双葉社)

執筆

H2R 星★肇介 市ヶ谷ハジメ
南達健一郎 やすゆきゆたか 小高正裕

表紙・本文イラスト

森下直規

本文MSイラスト

船越裕

Art Director

成富英樹 (I! Products)

Designer

国田茜 加倉佐真 藤原雪子
谷村風夕 高橋崇央 丸岡肇月 (I! Products)

スーパーバイザー

山崎努

監修・協力

疾サンライズ
© KADOKAWA

編集人

二之宮隆

発行人

堀江敦

発行所

株式会社双葉社
〒162-8540
東京都新宿区東五軒町 3-28
営業 ☎ 03-5261-4818 編集 ☎ 03-5261-4859
<http://www.futabasha.co.jp/>
(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

印刷所

三晃印刷株式会社

製本所

株式会社若林製本工場

※譯丁・乱丁の場合は送料双葉社負担であり取り替えます。

【制作部】あてにお送りください。ただし、古書店で購入したものに付いてはお取り替えできません。

☎03-5261-4822 (制作部)

※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。

本書を代行発行者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

※定価はカバーに表示してあります。

©創述・サンライズ

©FUTABASHA 2018 Printed in Japan